下総町青山富ノ木遺跡・鎌部長峯遺跡

—主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅶ—

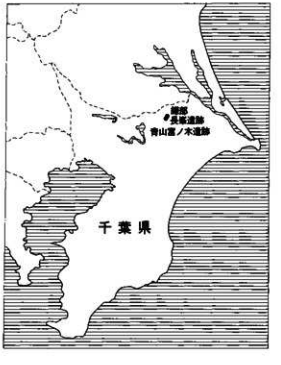
平成11年3月

千葉県土木部

財団法人　千葉県文化財センター

下総町青山富ノ木遺跡・鎌部長峯遺跡

— 主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅶ —



（中央拡大写真）

二面風字硯（青山富ノ木遺跡）

青山富ノ木遺跡全景

序　文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告書第370集として、千葉県土木部の一般県道成田下総線建設事業に伴って実施した香取郡下総町青山富ノ木遺跡・鎌部長峯遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、竪穴住居跡から二面風字硯が出土するなど、この地域の古代の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が、学術資料として、また埋蔵文化財の保護のために広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成　11年　3月　31日

財団法人千葉県文化財センター

理事長　中　村　好　成

凡　例

1　本書は、千葉県土木部による主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は、千葉県香取郡下総町青山字富ノ木116ほかに所在する青山富ノ木遺跡(遺跡コード341-009)、及び同町名木字長峯591－１ほかに所在する鎌部長峯遺跡（遺跡コード341－010）である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4　発掘調査及び整理作業は、調査研究部長堀部昭夫（平成２)、同天野努（平成３・４)、調査部長沼澤豊(平成10)、班長藤崎芳樹(平成２)、同宮重行(平成３)、東部調査事務所長石田廣美(平成７～９)、同三浦和信(平成10)の指導のもと、発掘調査は班長代理宮重行、主任技師萩原恭一が、整理作業は副所長宮重行、同雨宮龍太郎が下記の期間に実施した。主要土器の実測は整理課主任技師高梨俊夫・同整理技術員大久保奈奈が行った。

調査／整理	遺　跡　名	実　施　期　間
発掘調査	青山富ノ木遺跡	平成２年９月３日～平成３年３月27日
		平成３年４月９日～平成３年６月14日
		平成４年７月１日～平成４年７月28日
	鎌部長峯遺跡	平成３年７月１日～平成３年９月25日
整理作業	青山富ノ木遺跡	平成７年４月１日～平成９年９月15日
	鎌部長峯遺跡	平成９年９月16日～平成９年３月31日

5　本書の執筆は、第２章第３節１の一部及び第３章第２節は宮重行が担当し、そのほかは雨宮龍太郎が行った。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部道路建設課、下総町教育委員会の御指導、御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は下記のとおりである。

第１図　国土地理院発行　1/25,000地形図「佐原西部」(Ｎ－54－19－９－２)

第88図　千葉県都市計画課発行　1/2,500地形図「下総町地形図８」

8　本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

9　本書で使用した遺構番号の一部は、編集の都合上調査時の番号と異なる。

10　挿図に使用したスクリーントーンの用例は、次のとおりである。

本文目次

第1章　はじめに……1
第1節　調査の経緯と経過……1
第2節　遺跡の位置と環境……1
第2章　青山富ノ木遺跡……4
第1節　調査の概要……4
第2節　検出された遺構と遺物……4
1　竪穴住居跡と出土遺物……4
2　掘立柱建物跡と出土遺物……59
3　土坑類と出土遺物……72
4　溝跡と出土遺物……92
第3節　遺構外出土遺物……96
1　グリッド出土遺物……96
2　表面採集遺物……107
第4節　小結……108
1　竪穴住居跡の土器編年……108
2　竪穴住居跡の形態の変遷……110
3　掘立柱建物跡群について……113
第3章　鎌部長峯遺跡……115
第1節　調査の概要……115
第2節　縄文時代遺物包含層と出土遺物……115
1　遺物包含層の状況……115
2　出土遺物……118
第3節　平安時代竪穴住居跡と出土遺物……121
第4節　土坑……126
第5節　小結……126
第4章　まとめ－周辺地域の考古学的成果－……127
報告書抄録……巻末

挿図目次

第1図　周辺の遺跡分布図……2
第2図　遺構配置図……5
第3図　竪穴住居跡配置図……6
第4図　SI 1　遺構実測図……8
第5図　SI 2　遺構・遺物実測図……8
第6図　SI 3　遺構・遺物実測図……9
第7図　SI 4　遺構・遺物実測図……11
第8図　SI 5・SI 6　遺構・遺物実測図……12
第9図　SI 7　遺構・遺物実測図……14
第10図　SI 8　遺構・遺物実測図……16
第11図　SI 9　遺構・遺物実測図……18
第12図　SI 10　遺構・遺物実測図……20
第13図　SI 11　遺構・遺物実測図……20
第14図　SI 12　遺構実測図……21
第15図　SI 13　遺構実測図……21
第16図　SI 14　遺構・遺物実測図……23
第17図　SI 14　遺物実測図(2)……24
第18図　SI 15　遺構実測図……24
第19図　SI 16　遺構・遺物実測図……27
第20図　SI 16　遺物実測図(2)……30
第21図　SI 17　遺構・遺物実測図……30
第22図　SI 18　遺構実測図……31
第23図　SI 19　遺構・遺物実測図……32
第24図　SI 20　遺構・遺物実測図……34
第25図　SI 20　遺物実測図(2)……35
第26図　SI 21　遺構実測図……35
第27図　SI 22　遺構・遺物実測図……38
第28図　SI 23　遺構・遺物実測図……40
第29図　SI 24　遺構・遺物実測図……42
第30図　SI 25　遺構・遺物実測図……43
第31図　SI 26　遺構実測図……45
第32図　SI 27　遺構・遺物実測図……45
第33図　SI 28　遺構・遺物実測図……47
第34図　SI 29　遺構・遺物実測図……49
第35図　SI 30　遺構実測図……51
第36図　SI 31　遺構・遺物実測図……51
第37図　SI 32　遺構・遺物実測図……52
第38図　SI 33　遺構・遺物実測図……54
第39図　SI 34　遺構・遺物実測図……56
第40図　SI 34　遺物実測図(2)……57
第41図　SI 35　遺構・遺物実測図……57
第42図　掘立柱建物跡集中地区……59
第43図　SB 1　遺構・遺物実測図……60
第44図　SB 2遺構実測図……61
第45図　SB 3　遺構実測図……62
第46図　SB 4　遺構実測図……63
第47図　SB 5　遺構実測図……64
第48図　SB 2～SB 5　周辺出土遺物実測図……66
第49図　SB 6　遺構実測図……66
第50図　SB 7　遺構・遺物実測図……68
第51図　SB 8・SK 42　遺構・遺物拓影図……69
第52図　SB 9　遺構実測図……69
第53図　SB 10　遺構・遺物実測図……70
第54図　SB 11　遺構実測図……71
第55図　SB 12　遺構実測図……71
第56図　土坑類・溝等配置図……73
第57図　SY 1　遺構・遺物実測図……75
第58図　SX 1　遺構・遺物拓影図……76
第59図　SX 2　遺構実測図……76
第60図　SX 3　遺構・遺物実測図……77
第61図　SX 4　遺構実測図……78
第62図　SX 5　遺構・遺物実測図……79
第63図　SX 6　遺構実測図……81
第64図　SX 7　遺構・遺物拓影図……81

第65図　SK 2・SK 3 遺構、SK 3 遺物実測図……82
第66図　SK 4 遺構・遺物実測図……84
第67図　SK 5・SK 10・SK 16 遺構実測図……84
第68図　SK 20 遺構・遺物実測図……86
第69図　SK 21 遺構・遺物実測図……86
第70図　SK 22 遺構実測図……87
第71図　SK 30 遺構実測図……87
第72図　SK 31・SK 32 遺構・遺物実測図……89
第73図　SK 36・SK 37 遺構・遺物実測図……90
第74図　SK 38遺構実測図……90
第75図　SK 41 遺構・遺物拓影図……91
第76図　SK 43 遺構・遺物拓影図……91
第77図　溝 遺構実測図……93
第78図　溝 遺物実測図……95
第79図　グリッド配置図……97
第80図　グリッド出土遺物拓影図……98
第81図　グリッド出土遺物実測図(1)……100
第82図　グリッド出土遺物実測図(2)……102
第83図　グリッド出土遺物実測図(3)……104
第84図　グリッド出土遺物実測図(4)……106
第85図　表採資料拓影図及び実測図……107
第86図　主要器種編年図……109
第87図　竪穴住居跡編年図……112
第88図　遺跡周辺の地形図……116
第89図　遺構等配置図……116
第90図　縄文時代遺物出土状況……117
第91図　包含層出土遺物(1)……119
第92図　包含層出土遺物(2)……120
第93図　SI 1 遺構・遺物実測図……122
第94図　SI 2 遺構・遺物実測図……124
第95図　土坑実測図……125

表 目 次

第1表　掘立柱建物跡方位表……114

図 版 目 次

巻首図版 1 二面風字硯（青山富ノ木遺跡）
巻首図版 2 青山富ノ木遺跡全景
図版1　SI 1～SI 4
図版2　SI 7～SI 9
図版3　SI 10～SI 12
図版4　SI14～SI17
図版5　SI18～SI21
図版6　SI 22～SI 24
図版7　SI 28～SI 30、SI 32・SI 33
図版8　SI 34、SB 4～SB 6、SB 10
図版9　SB 11、SB 3 周辺、SX 5、SX 6
図版10　SY 1、SK 2・SK 3、SK 10
SK 20、SK 36・SK 37、SD 2
図版11　SI 2～SI 16出土土器
図版12　SI 16～SI 22出土土器
図版13　SI 22～SI 34、SK 2 出土土器
図版14　SK 20～SK 37、SD、SB、グリッド出土土器
図版15　他地点、SI 22出土土器、墨書土器、手捏ね土器

図版16　二面硯、小型台形土器、琥珀玉、紡錘車、石器類、銅銭
図版17　鉄製品
図版18　グリッド出土縄文土器
図版19　鎌部長峯遺跡調査前風景、縄文土器片出土状況
図版20　SI 1、SI 2、SK 1
図版21　SK 2、SK 3・SK 4・SK 5
図版22　包含層出土縄文土器片(1)
図版23　包含層出土縄文土器片(2)
図版24　包含層出土石器、SI 1・SI 2出土遺物

第1章　はじめに

第1節　調査の経緯と経過

千葉県土木部は、主要地方道成田下総線建設事業の実施に当たり、千葉県教育委員会に対して、計画路線内に所在する埋蔵文化財の有無について照会を行った。現地踏査の結果、青山富ノ木遺跡を初めとして、数多くの遺跡の所在が確認された。このため、県教育庁文化課は、県土木部道路建設課と埋蔵文化財の取扱いについて協議し、記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

青山富ノ木遺跡の調査は、平成2年9月3日から9月10日まで第1次上層確認調査、9月11日から3月27日まで第1次上層本調査、平成3年2月18日から3月27日まで第1次下層確認調査をそれぞれ実施した。平成3年4月9日から6月21日まで第2次上層本調査、6月10日から6月14日まで第2次下層確認調査を実施した。平成4年7月1日から7月28日まで第3次上層本調査及び第3次下層確認調査を実施した。

鎌部長峯遺跡の調査は、平成3年7月1日から7月31日まで上層確認調査、8月1日から9月25日まで上層本調査、9月10日から9月27日まで下層確認調査をそれぞれ実施した。

第2節　遺跡の位置と環境（第1図）

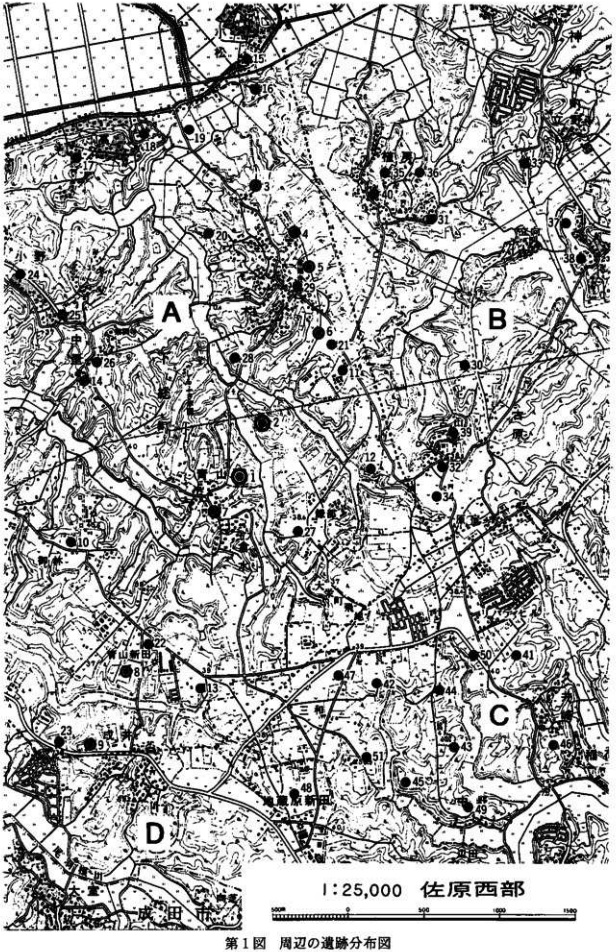
青山富ノ木遺跡[1]は香取郡下総町青山字富ノ木116ほかに所在する。また、鎌部長峯遺跡[2]は同町名木字長峯591－1ほかに所在する。下総町は香取郡の西辺に属し、北に利根川を望み、東は印旛郡の旧長沼と境を接している。青山富ノ木遺跡は、青山集落の東方、南流して利根川に注ぎ込む小河川の左岸台地上に位置しており、台地標高は39mを測る。また、鎌部長峯遺跡は、青山富ノ木遺跡の北方400m程の標高40mの台地上に位置している。

本事業関連の下総町内分の遺跡調査は、平成5年度をもってすべて終了している。

青山富ノ木遺跡は、今回の調査以前にも財団法人香取郡市文化財センターによって発掘調査が実施され、奈良・平安時代の竪穴住居跡群と中世掘立柱建物群が主体的に検出されている。鎌部長峯遺跡は、今回の調査では、縄文時代早期の遺物包含層と2軒の奈良・平安時代の竪穴住居跡が検出された。

本事業関連遺跡中最北端の長稲葉遺跡[3]は、古墳時代後期の集落跡を中心に、縄文時代早期遺物包含層や当地では僅少な弥生時代後期竪穴住居跡が2軒検出された。名木大台遺跡[4]は、下総町教育委員会調査分、財団法人香取郡市文化財センター調査分と合わせて、古墳時代後期から奈良時代にかけての大集落跡であることが判明した。名木不光寺遺跡[5]では、財団法人香取郡市文化財センター調査分と合わせて、古墳時代後期から平安時代にわたる集落跡の存在が明らかになった。さらに、名木天神台遺跡[6]からは、旧石器時代石器ブロック、古墳時代後期から平安時代にわたる竪穴住居跡群、中世掘立柱建物群などが検出された。以上の諸遺跡は、現在の名木集落を中心に、同一支台上にある遺跡群として一括することができる。

この西南方には鎌部長峯遺跡の所在する支台があり、さらにその西には、青山富ノ木遺跡が所在する支



第1図　周辺の遺跡分布図

台が展開している。青山地区では、このほかに青山宮脇遺跡[7]が所在し、旧石器時代石器ブロックが調査報告された。この西南に隣り合う支台では、青山中峰遺跡[8]が調査され、平安時代竪穴住居跡群が検出された。さらにその南の成井地区では、新シ山・柳和田台遺跡[9]から旧石器時代の石器ブロック、貴重な弥生時代中期の土器棺墓、奈良平安時代の竪穴住居跡、中世の掘立柱建物群などが検出されている。

参考文献

3）萩原恭一ほか 1994『下総町長稲葉遺跡－主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－』(財)千葉県文化財センター

4）江尻和正 1982 『名木大台遺跡－名木小学校移転新築に伴う埋蔵文化財調査－』下総町教育委員会
江尻和正 1994 「名木大台遺跡」『事業報告Ⅲ』(財)香取郡市文化財センター
雨宮龍太郎 1998『下総町名木大台遺跡－主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅵ－』(財)千葉県文化財センター

5）萩原恭一ほか 1993『下総町不光寺遺跡－一般県道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－』(財)千葉県文化財センター
奥田正彦 1994 「名木不光寺遺跡」『事業報告Ⅲ』(財)香取郡市文化財センター
江尻和正 1995 「名木不光寺遺跡」『事業報告Ⅳ』(財)香取郡市文化財センター

7～9）宮重行ほか 1995『下総町新シ山・柳和田台遺跡 青山中峰遺跡 青山宮脇遺跡－主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅴ－』(財)千葉県文化財センター

第２章　青山富ノ木遺跡

第１節　調査の概要（第２図）

青山富ノ木遺跡は、青山集落を中心とする台地上の遺跡で、東西450m、南北600mの規模を有する。同一支台の北西部には、前章で紹介した小野女台遺跡、中里西口遺跡、中里原遺跡等、本遺跡と時期を等しくする遺跡群が展開している。今回の調査は、青山集落の200m程東方に張り出した小舌状台地の付け根の部分で、長さ160m余りの南北に長い区域が対象とされた。

調査対象区には、公共座標に基づいて40mピッチで基準杭を打ち込み、グリッドを設定した。大グリッドは40m×40mで、それを４m×４mの小グリッドに100分割した。

発掘調査は、平成２年度から平成４年度にわたって実施された。調査対象面積は平成２年度4,575㎡、平成３年度960㎡、平成４年度415㎡で、合計5,950㎡に達する。確認調査は、上層については初年度に472㎡(10.3%)発掘し、その結果、以後全面本調査に切り替えられた。下層については逐年実施され、総じて241㎡(4.0%)に及んだが、旧石器時代遺物包含層は検出されず、本調査の必要性は認められなかった。

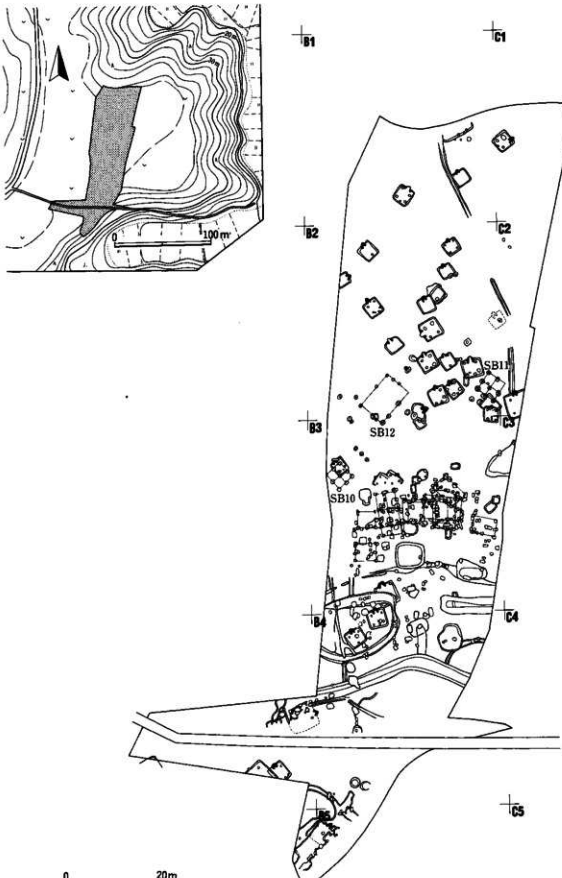
上層本調査の成果は、遺構については、竪穴住居跡35軒、掘立柱建物跡12棟、地下式坑１、土坑類23基、溝跡９条が検出調査され、さらに掘立柱建物跡集中地区を中心に、80余りの小ピットが発見されている。また、調査区南部では、表土層下の暗褐色土層中に比較的多くの遺物を包含していた小グリッドが点在している。

第２節　検出された遺構と遺物

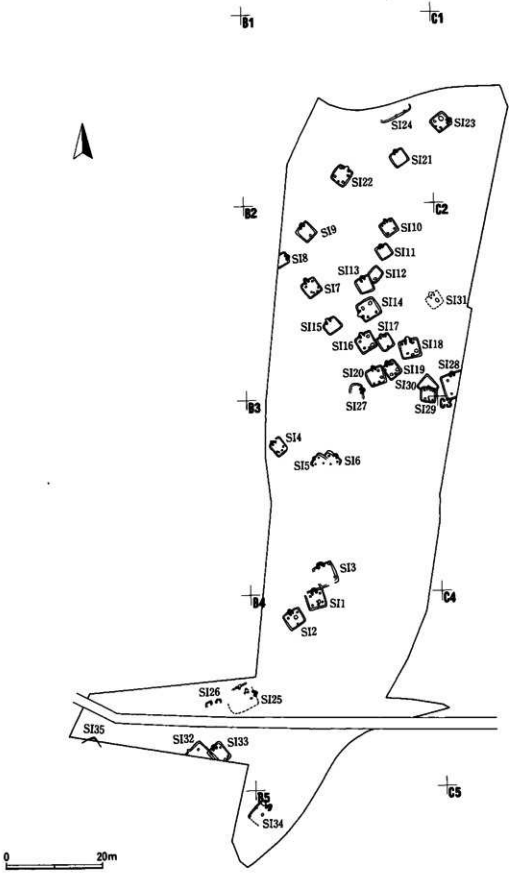
１　竪穴住居跡と出土遺物（第２図、第３図）

竪穴住居跡の分布状況は、B2区に最も集中し、それ以外は比較的散漫に点在している。B3区中央の空白部分は掘立柱建物跡が密集している区域である。また、B3区からB4区の東部も竪穴住居跡が存在しないが、この区域は溝跡や大型土坑が集中する区域でもある。以上のように、調査区の南部では、竪穴住居跡は新しい時期の遺構によって攪乱され、既に消滅している可能性も考えられる。したがって、竪穴住居跡群の本来の集落構成を復原する作業は、極めて困難である。竪穴住居跡間の重複状態は比較的少ない。また、竈は北西壁中央に設置されているものが圧倒的に多い。なお、南部に所在する竪穴住居跡は遺存状態が不良だが、これは南側に急斜面を控えているために、表土の一部が流出している結果であろう。

竪穴住居跡はSI 24の１軒を除き、奈良・平安時代に築造されたものであるが、この時代の竪穴住居跡の基本的な平面プランは普通「方形」・「隅丸方形」と表現されることが多く、まれに「長方形」が見出されることがある。さらに「略方形」なる表現もしばしば目にするところである。ところが、今回検出された竪穴住居跡の各辺を計測すると、上記リストからは客観的にはずれてしまう事例が多々摘出された。それは「台形」住居跡の存在である。この類型を「略方形」で括ってしまえば、竪穴住居跡の分析や集落構造



第2図　遺構配置図



第３図　竪穴住居跡配置図

の復原に際して、重要な手がかりの一つを見落としてしまうおそれもなしとしない。そのため本書では、方形・長方形に加えて「台形」も竪穴住居跡の基本プランとして採用している。台形住居跡の計測部位は上辺（竈のある壁）、下辺（竈対向壁）、幅（上辺・下辺間の距離）である。これは正台形の場合であり、このほかに、逆台形・横転台形等も存在している。

SI 1（第4図、図版2）

遺構　中央空白帯のすぐ南側のB3区南部からB4区北部にかけて、SI 3・SI 1・SI 2が所在する。このグループは、さらに南の住居跡群からも孤立している。

本住居跡は台形プランで、北壁中央に竈を設けている。上辺3.9m、下辺4.2m、幅3.8mの横長台形を呈している。竈のある北壁は、竈一北東コーナー間が外側に張り出している。周溝は全周し、柱穴は4本である。南壁際に後世の攪乱ピットが存在する。遺構確認面から床面までは非常に浅く、覆土断面図を作成できる状態ではなかった。したがって、カマドの遺存状態も不良で、両袖基部の山砂が僅かに原位置を留めていたに過ぎない。燃焼部のピットは船型を呈し、壁面に接している。煙道部は確認されなかった。遺物は検出されていない。

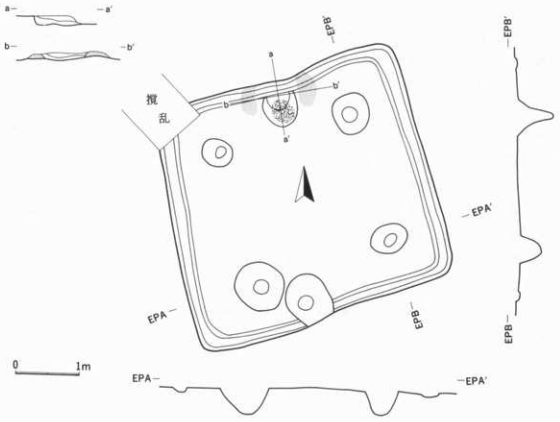
SI 2（第5図、図版2、図版12）

遺構　B4区の北西部に所在し、SI 1の南に位置する住居跡である。上辺3.6m、下辺3.5m、幅3.4mの横長逆台形プランを示す住居跡である。北壁中央に竈を持つ。東壁線、特に周溝線がやや外側に張り出している。周溝は全周し、柱穴は2本である。竈対向壁際のピットは浅いので、はしご穴と思われる。この住居跡も掘り込みが浅く、竈の遺存状態は悪く、両袖基部の山砂が僅かに原位置を留めていたに過ぎない。竈燃焼部は余り使用されなかったためか、焼けて赤変した箇所は認められなかった。また、燃焼部ピットは存在せず、煙道部も検出されなかった。

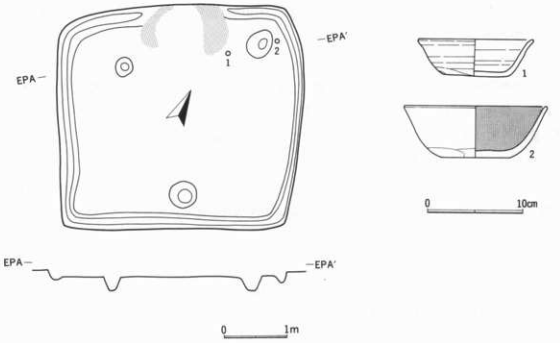
遺物　1・2は杯である。1は北部コーナーの柱穴脇から出土した。口径12.2cm、器高4.0cmを計る。ロクロ成形で、赤褐色を呈する。厚みが均質な土器で、底部外縁は面取りされ、僅かに稜を残す。体部はかすかに内湾し、口縁は肥厚して外反している。体部内外面ともにロクロナデ調整され、下端部はヘラケズリされる。底部外面は手持ちヘラケズリで処理されている。2は竈脇から出土した。口径14.7cm、器高5.3cmで、明褐色を呈し、ロクロ成形されている。底部外縁は面取りが行き届き、体部は緩いS字状に立ち上がる。体部内外面は横ナデ調整でロクロ目が消され、外面下端はヘラケズリされている。底部外面は回転ヘラ切り後、外周が回転ヘラケズリされている。内面は黒色処理が施される。

SI 3（第6図、図版2）

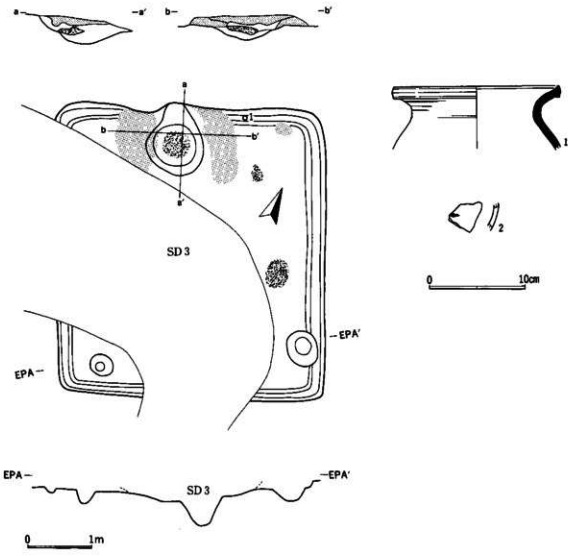
遺構　B3区の南部、SI 1の北に位置している。短辺4.1m、長辺4.3mの長方形プランである。北壁中央に竈が設置され、竈西脇の壁の煙道形成部が内側にせり出し、そこからコーナーへ至る部分が逆に外側へ張り出している。竈東脇の壁においても、西脇ほどではないもののその傾向が観察される。周溝は全周している。この住居跡も上部が流出しており、床面が浅い。中央部はSD 3によって大きく攪乱されている。南側両コーナー付近にピットが存在するが、柱穴か否かは不明である。通有の4本柱穴の場合にありうべき、北コーナー寄りには柱穴は確認されなかった。竈は攪乱破壊され、西壁寄りに山砂や焼土が散乱している。



第4図　SI 1 遺構実測図



第5図　SI 2 遺構・遺物実測図



第6図　SI3遺構・遺物実測図

電燃焼部は円形ピットで、その一部が延びて、壁面に接している。煙道部はほとんど発達していない。

遺物　1は須恵器甕で、竈東脇から出土した。口径17.3cm、現高6.4cmで、青灰色を呈する。頸部は僅かに直立し、口縁は外反して、外周に粘土紐を貼付して二重口縁を成形している。胴部外面は平行タタキ目を擦り消している。

2は杯で、覆土中から出土した。褐色を呈し、内面は黒色処理されている。外面には墨書の一部が認められる。

SI 4 （第7図、巻首図版1、図版2、図版17）

遺構　B3区の北部に所在するSI 4・SI 5・SI 6のグループは、北部住居跡群の南側にやや離れたB3区に位置する。本住居跡は3.5m×3.1mの長方形の小型住居跡である。主要部はSB 10によって撹乱され、竈も別な撹乱を受けている。北西壁中央に竈がある。竈南西脇の煙道形成部の壁線は僅かに内側にせり出している。また、竈北東脇の壁線は外側に張り出し気味である。周溝は東壁中央で途切れている。柱穴の全体は撹乱のために把握できないが、P 1・P 2・P 3がその一部になると思われる。竈対向壁際やや北寄りにはほしご穴と推定されるピットがある。竈の遺存状態は不良で、北袖部が破壊されていた。竈の下地は大きな皿形ピットが掘られ、燃焼部にはさらに円形ピットが掘り込まれていた。煙道部は僅かに壁外に突出している。

遺物　1は甕で、覆土中から出土した。口径22.2cm、現高3.5cmを計る。明褐色を呈し、胎土に雲母・長石を含むことから、いわゆる常総型の甕であると判断できる。口縁は直立し、二重口縁風にその下部が張り出している。2は甑で、竈脇の床面付近から出土した。底径12.3cm、現高7.0cmを計る。この土器も明褐色で、胎土に雲母・長石を含むことから常総型とみなしてよいだろう。胴部外面は細い工具によって、縦方向にミガキに近いヘラナデが施されている。内面下端は甑に特有な内削ぎがなされず、面取り調整されるに留まっている。

3は内耳鍋で、中央西寄りの覆土中から出土した。暗茶褐色を呈し、口径37.0cm、現高6.5cmである。口縁は粘土紐を三角形に貼付することで補強し、内面には1個の内耳が残存していた。

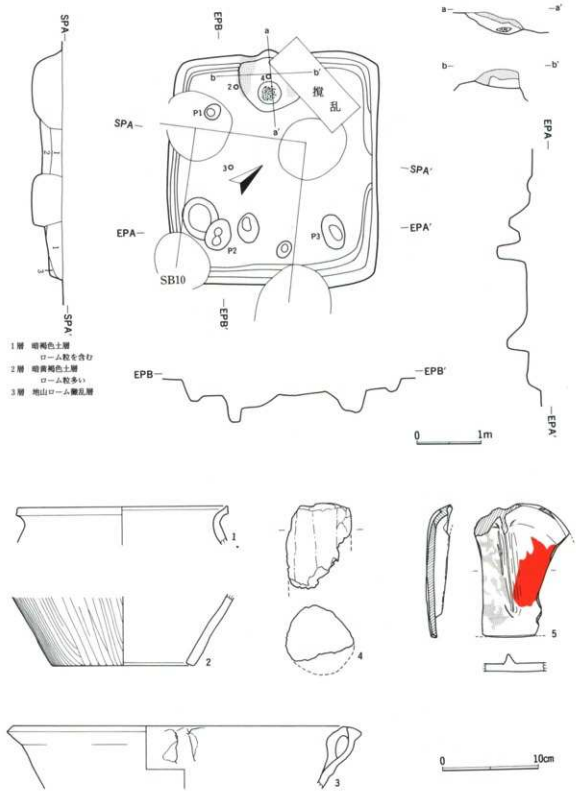
4は土製支脚である。竈内から出土した。現高9.8cmで、赤褐色を呈し、熱を受けている。上端部は原型を留めている。周囲はヘラケズリで荒く面取りされている。

5は土師質二面風字硯である。覆土中から出土した。現長13.6cm、現高2.8cmで、表面は暗褐色、内部は赤褐色を呈する。中央部の破片で、両脇と硯頭部が欠失している。硯頭部は湾曲し、硯縁は中央が最も高く屈曲し、周囲に至るほど低くなっている。硯尻部は無縁で、直線的に成形されている。硯面は水平ではなく、僅かな反りを作って海を形成している。おそらく、欠失している硯尻には、両端2か所に短い棒脚が伴っていたであろう。池と擦り面の区別は認められない。硯面中央部には、硯縁に直結して1条の堤が縦に延びている。断面は三角形で、指先で貼付調整している。この堤を境にして、右面には朱墨、左面には黒墨の痕跡が認められる。側縁はヘラケズリ、内面はヘラナデ、底部外面は無調整で、同心円状の当て具痕が残存している。

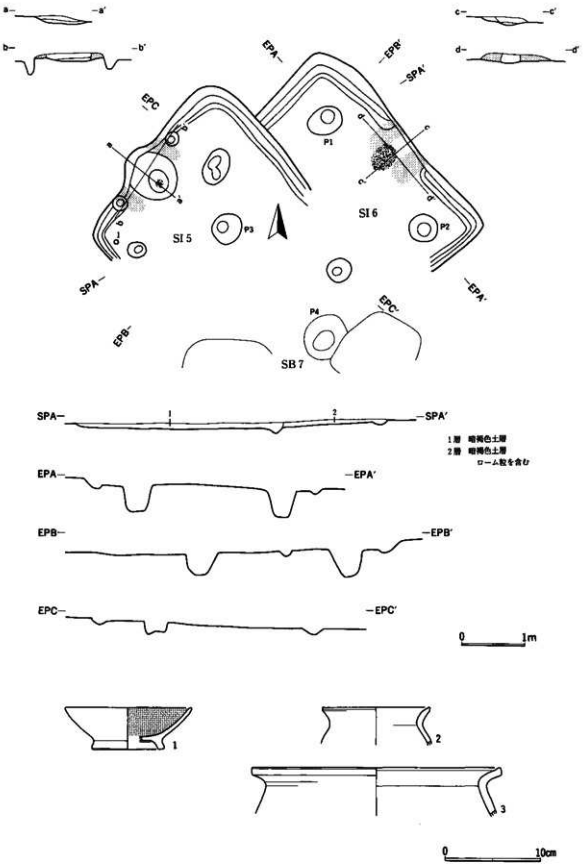
SI 5 （第8図、図版12）

遺構　B3区の北西部に所在する。SI 4の東隣にあり、SI 6を切っている。また、本住居跡はSI 6とともに、南側に密集している掘立柱建物跡群によって切られている。床面は浅く、南側は流出していた。遺構の北西辺は完存し、3.1mの長さで、中央に竈が設置されている。周溝は確認された範囲では全周している。柱穴は竈側の2か所が確認できた。竈の遺存状態は不良で、両袖基部の山砂が僅かに残っていた。燃焼部の船型ピットは壁面に接しており、煙道部の張り出しは未発達である。また、竈両脇の周溝端に小ピット2基が検出された。この遺構は心棒ピット、すなわち、竈の袖材を固定させるための木製心棒を挿入したピットであろう。

遺物　1は高台付きの椀で、南西コーナー付近から出土した。口径13.2cm、器高4.2cm、台径7.5cmで、暗



第7図　SI 4 遺構・遺物実測図



第8図 SI 5・SI 6遺構・遺物実測図

褐色を呈し、内面は黒色処理されている。厚みが均質な土器で、広い底部から体部が内湾気味に大きく開いている。口縁は単純に丸みを帯びる。高台の口径は大きく、太い台部は外に開き、接地面は広い。胎土は緻密で、内外面ともに丁寧なナデが行き届いている。

SI 6（第8図）

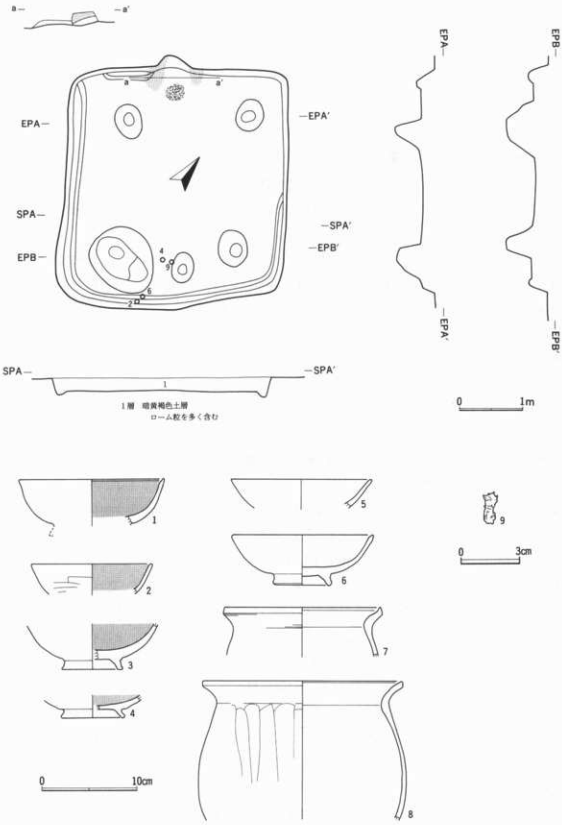
遺構　B3区の北部に所在し、SI 5によって切られ、南側は掘立柱建物跡群に切られている。遺構の北東壁は完存し、3.8mの長さで、中央に竈を持つ。竈西脇の壁は外側に膨らんでいる。周溝は確認された範囲では全周している。柱穴はP1・P2・P3・P4の4か所が確認された。竈遺存状態は不良で、両袖基部の山砂が僅かに原位置を留めているに過ぎない。燃焼部のピットは意図的には設けられず、竈煙道部の張り出しも欠如している。

遺物　いずれも覆土中から出土している。2は甕で、口径11.3cm、現高3.7cmを計る。赤褐色を呈し、胎土には雲母・長石が混入している。口縁は穏やかに開き、細いヘラ先で締められ、沈線が1本巡っている。胴部外面はヘラケズリされている。3は常総型の甕で、口径26.4cm、現高4.7cmを計り、褐色を呈し、胎土には雲母・長石が混入している。口縁は大きく外反して、頂部に断面三角形の粘土紐を載せて口唇部とし、外側を直立させている。胴部外面はヘラナデされている。

SI 7（第9図、図版3、図版12）

遺構　B2区の北西寄りの地点に所在し、北部住居跡群の中央付近に位置する。上辺3.4m、下辺3.5m、幅3.5mの横転台形プランを示す住居跡である。北西壁中央に竈が設置されている。南コーナーのみが顕著な丸みを持っている。周溝は南側に偏在し、全周しない。柱穴は各コーナー寄りに4か所あるが、南柱穴のみが異様に大きい。この柱穴の掘り方上面には貼り床が敷かれていた。南東壁中央部付近にははしご穴が存在する。竈の遺存状態は不良で、壁際に両袖の山砂が僅かに取り付いているに過ぎない。燃焼部ピットは認められず、煙道部の張り出しは弱い。覆土は人為的埋土であろう。

遺物　1は高台付きの椀で、覆土中から出土している。口径15.3cm、現高4.7cmで、高台部を欠失している。暗褐色を呈し、胎土は緻密で、内面は黒色処理されている。高台の口径は比較的大きく、椀形を呈し、口縁は僅かに外反している。外面はヘラナデ、内面はヘラミガキ調整されている。2は椀で、南東壁際の覆土中から出土した。口径12.6cm、現高3.1cmで、褐色を呈し、内面は黒色処理されている。椀形を呈し、器体は薄く、内外面ともヘラミガキ調整である。胎土には雲母が混入されている。3は高台付きの椀で、覆土中から出土した。口縁を欠失し、底径6.4cm、現高4.6cmで、赤褐色を呈する。体部は椀形を呈し、高台はやや外方に開き、台裾は肥厚して接地面は幅広く作られている。内面は黒色処理されている。4は高台付きの椀で、はしご穴と南柱穴間の覆土中から出土した。底径6.6cm、現高1.9cmで、灰褐色を呈する。内面は黒色処理されている。杯底部は未調整で、外周が面取りされず、平坦面をなす。中心には糸切り痕が観察される。高台は厚みが薄く、大きく開き、接地面は面取りされるに留まる。5は椀で、覆土中から出土した。口径14.9cm、現高2.9cmを計り、暗褐色を呈する。体部は緩いS字状に大きく開いている。内外面ともにヘラミガキ調整が見られる。胎土には雲母が混入している。6は高台付きの椀で、2とともに南東壁際の覆土中から出土した。口径15.0cm、器高5.3cm、底径6.2cmを計り、暗褐色を呈する。身は浅い椀形で、器高に比べ、小さな高台部が取り付いている。口縁は内削ぎによって調整されている。台部は外反し



第9図　SI 7 遺構・遺物実測図

て、接地面は丸みを帯びる。体部外面はナデ、内面は放射状のヘラミガキが施されている。

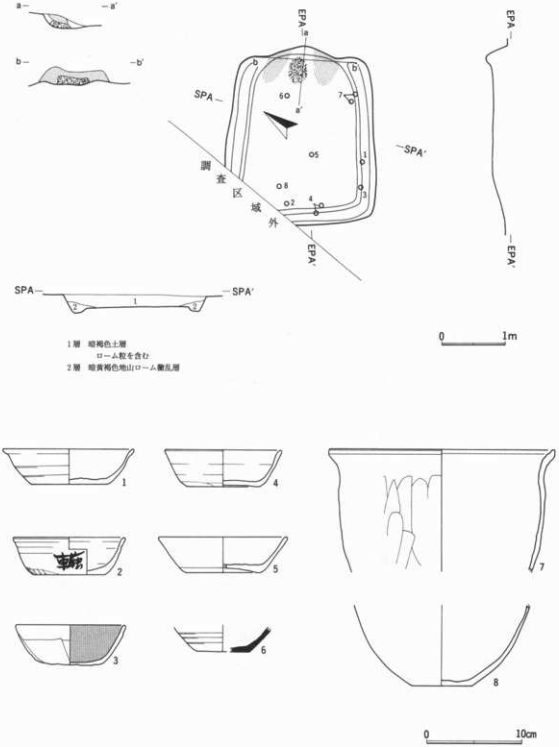
7は甕で、覆土中から出土した。口径16.6cm、現高4.9cmで、茶褐色を呈する。口縁部は外反して、頂部に断面三角形の粘土紐を載せて口唇部を成形している。胴部はなで肩になる。胴部外面はヘラケズリされている。8は甕で、覆土中から出土した。口径21.3cm、現高14.2cmで、赤褐色を呈する。口縁は外反して、頂部に粘土紐を載せて、僅かに口唇部を成形している。口縁外側は直立して稜をなす。分厚いくびれ部からなめらかに胴部に移行する。胴部外面は縦方向にヘラケズリされている。

9は鉄器片で、はしご穴脇の覆土中から出土した。側面に明確な稜は認められない。長さ1.5cmで、0.6gを量る。

SI 8 (第10図、図版3、図版12、図版16)

遺構 B2区の北西部に所在する。北部住居跡群中最も西寄りに位置し、西コーナーは調査区外に出ている。上辺1.9m、下辺推定3.8m、幅2.5mの台形プランである。北東壁中央に竈が設置され、それ以外の3辺に周溝が巡っている。柱穴は確認できなかった。竈の遺存状態はやや不良である。両袖の張り出しは短く、燃焼部ピットは認められない。煙道部は壁の広範囲を浅く抉って作り出しており、特徴的な壁線を呈している。

遺物 1～6は杯である。1は南東壁際西寄りの覆土下層から出土した。口径13.7cm、器高3.7cmを計り、赤褐色を呈する。体部は緩いS字状に大きく開き、口縁は肥厚している。底径は比較的大きく、面取りは行き届くが、体部との境では稜を残している。体部内外面はロクロナデ調整され、特に内面は平滑になっている。底部外面はヘラケズリされている。2は南西壁際中央の覆土下層から出土した。口径11.6cm、器高3.9cm、底径7.5cmを計り、赤褐色を呈する。広い底部から体部は湾曲しながら開いて、口縁では肥厚して外反する。体部はロクロナデ調整されるが、上半部はロクロ目が強い。外面下端はヘラケズリされている。底部外面は糸切り後、手持ちヘラケズリを施しているが、端部面取りの際のヘラ痕が連続的に残っている。この個体の体部外面には「轆」の墨銘が存在する。3は南コーナー付近の覆土中から出土した。口径11.5cm、器高4.1cm、底径 6.7cmを計り、赤褐色を呈する。底部は外側にやや膨らみ、体部との境の稜は鈍い。体部は内湾しながら口縁に至り、口唇部で僅かに外反する。内面は黒色処理されている。体部外面には幅広いヘラケズリが見られ、底部外面はヘラケズリ調整されている。内外面ともに表面が荒れている。4は南西壁際の覆土中から出土した。口径12.2cm、器高4.8cm、底径7.9cmを計り、赤褐色を呈する。底部は広く、上げ底気味で、体部との境は十分面取りされている。体部は内湾気味に開き、口縁は肥厚して僅かに外反する。体部内外面はロクロナデ調整によってロクロ目が消されている。外面下端はヘラケズリされる。底部外面は回転糸切り後、周囲を回転ヘラケズリしている。5は住居中央やや南寄りの覆土中から出土した。口径13.6cm、器高4.7cm、底径8.0cmを計り、赤褐色を呈する。底部は広く、強い上げ底になる。体部との境は稜が消されている。体部は浅く、直線的に大きく開いている。体部内外面はロクロナデ調整によってロクロ目が消され、外面下端はヘラケズリされている。しかし、底部内面のロクロ目は未処理のままである。底部外面は回転糸切り後、回転ヘラケズリで外縁を調整している。6は須恵器で、竈前面の床面付近から出土した。現高2.5cm、推定底径5.6cmを計る。灰色を呈し、胎土には雲母・長石を混入している。器体は薄く、底部は小さい。体部は直線的に開き、外面のロクロ目は強く残るが、内面はロクロナデ調整で消されている。底部外面はヘラケズリ調整されている。



第10図　SI 8 遺構・遺物実測図

7・8は甕である。7は東コーナー近くの南東壁際の床面直上から出土した。口径23.8cm、現高12.5cmで、明褐色を呈する。口縁は直線的に開き、頂部に粘土紐を載せて口唇部を成形している。外側は横ナデで調整され、稜をなしている。胴部は直立する頸部の直下に最大径を持ち、そのまま膨らまずに底部に至る長胴形である。胴部外面には、弱い縦方向のヘラケズリが認められる。8は西寄りの床面直上から出土した。現高8.2cm、底径6.3cmで、赤褐色を呈する。器体は全体に薄いつくりで、外面はヘラケズリの後に、ヘラナデされている。底部外面はヘラケズリ調整されている。

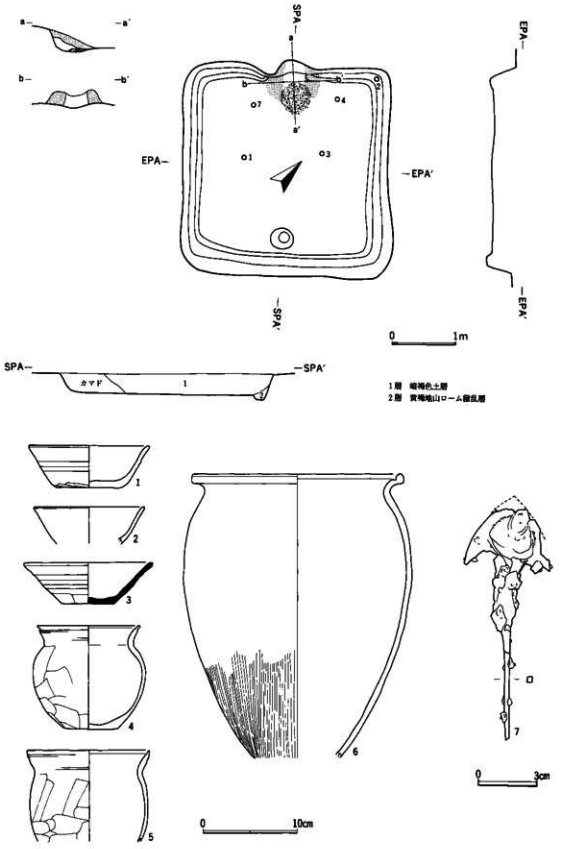
SI 9（第11図、図版3、図版18）

遺構　B2区の北西部に所在する。SI 8の北東に隣り合う小型住居跡である。1辺3.2mの方形プランで、北西壁の中央に遺存状態の良好な竈を持つ。この壁は竈を境にして、北側では直線状だが、南側では煙道形成部が内側にせり出し、そこからコーナーまでは外方に張り出している。周溝は全周している。柱穴は認められず、南東壁際中央にはしご穴が存在する。竈の両袖は短く、燃焼部ピットは認められない。煙道部の張り出しは未発達である。

遺物　1～3は杯である。1は中央西寄りの覆土下層から出土した。口径12.4cm、器高4.4cm、底径6.5cmを計り、赤褐色を呈する。厚みのある底部から直線的に体部が開く器形で、体部外面には弱いロクロ目が残っているが、内面はナデ調整で仕上げられている。外面下端はヘラケズリで面取りされ、稜を消している。底部外面は回転糸切り後、手持ちヘラケズリで外縁調整している。2は北コーナーの床面付近から出土した。口径11.4cm、現高3.8cmで、明褐色を呈する。器体は薄く、緩いS字状に開いている。口縁部は若干肥厚する。内外面ともロクロナデ調整されているが、弱いロクロ目が残っている。3は須恵器で、中央北寄りの覆土下層から出土した。口径13.2cm、器高4.2cm、底径5.7cmで、灰色を呈する。上げ底気味の小さい底部から、直線的に大きく体部が開く器形である。体部外面にはロクロ目が強く残るが、内面はロクロナデ仕上げで平滑になっている。底部内面のロクロ目は未処理で、凹凸が激しい。底部外面はヘラ切り後、周縁と体部下端に手持ちヘラケズリで調整している。

4～6は甕である。4は竈東脇の覆土下層から出土した。口径10.8cm、器高11.6cm、底径5.5cmで、暗褐色を呈する。口縁は緩やかに立ち上がり、頂部に粘土紐を載せて口唇部を成形している。その際、口縁本体と密着させるために、細い工具によって接合部を圧迫したために、その痕跡が凹線化して装飾的な効果を生みだしている。胴部は最大径が中位やや上にあって、球形状を呈する。胴部外面には粗いヘラケズリが見られる。5は覆土中から出土した。口径13.0cm、現高9.4cmで、赤褐色を呈する。口縁は余り立ち上がらず、外側に粘土紐を廻して口唇部を成形している。このため、口縁内外面に微妙な起伏を生じている。胴部は肩が張らずに最大径へ移行する。胴部外面は上半が縦方向の粗い縦ヘラケズリ、下半が横ヘラケズリ調整である。6は常総型で、覆土中から出土した。口径22.0cm、現高29.3cmを計り、明褐色を呈する。口縁は水平になるまで強く外反し、頂部に断面蒲鉾形の口唇部を成形している。その際、細い工具で口唇内側を口縁本体と密着させたため、1条の沈線が巡っている。胴部外面はヘラナデの後、下部が細い工具によって縦方向にヘラナデされる。胎土には雲母・長石が混入している。

7は鉄鏃で、竈西脇の床面直上から出土した。幅広の三角刃で、抉りの程度は損耗のために不明である。篦被は刃部側の方が幅広で、棘を有さずに、細身の茎に移行している。現長11.9cmで、23.8gを量る。



第11図　SI 9 遺構・遺物実測図

SI 10（第12図、図版４）

遺構　B2区の北東部に所在する。北部住居跡群の中央付近に位置する。短辺2.8m、長辺3.0m、幅3.0mの横転台形プランを持つ小型住居跡である。北西壁中央に竈が存在する。竈の南西脇の壁は若干外側に張り出している。周溝は竈壁以外の３辺に回っている。柱穴は４か所で、いずれもコーナー付近に偏在している。北柱穴のみ口径が大きい。竈の遺存状態は不良で、片袖が破壊されていた。袖部は短く、燃焼部には通常の船型ピットの代わりに、周溝の一部のような長楕円形ピットが袖部の下まで延びている。余り使用されなかったためか、坑底は特に焼けて赤変してはいない。煙道部の張り出しは極めて弱い。遺物は検出されていない。

SI 11（第13図、図版４）

遺構　B2区の北東部に所在する。SI 10の南に隣り合う小型住居跡である。短辺2.7m、長辺2.9m、幅3.3mの横長横転台形プランで、北西壁の北コーナー寄りに竈が設置されている。北東壁は若干外に張り出している。周溝は南コーナー付近で途絶している。柱穴は確認できなかった。竈の遺存状態は良好である。両袖は極めて短く、竈下には周溝が貫通し、それが燃焼部で肥大している。煙道部の張り出し方は普通である。住居跡覆土は人為的埋土を示している。なお、南壁はSK 20・SK 21によって切られている。遺物は検出されていない。

SI 12（第14、図版４）

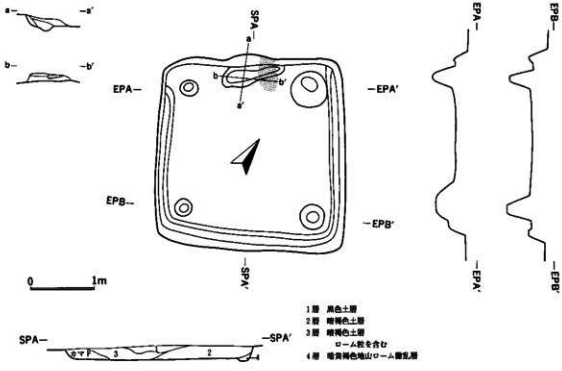
遺構　B2区の北東寄りの地点に所在する。SI 11の南に隣り合う住居跡である。南西でSI 13と接している。4.0m×3.2mの不整長方形プランを有する。ほかの住居跡とは異なり、斜めに掘り込んで床面を形成したために、壁が上方に開いている。竈は存在しない。床面プランも不整形であり、北東辺中央部が内側に食い込んでいる。あるいは、ここが竈設置予定場所だったのかも知れない。また、西コーナー付近の北西壁には、周溝プランからみれば不必要とも思われる張り出しが存在する。周溝は北側のみに回っている。南端には0.9m×0.7mの楕円形ピットが存在する。床面の状態は、特に硬化している部分は認められない。遺物は検出されていない。

SI 13（第15図、図版４）

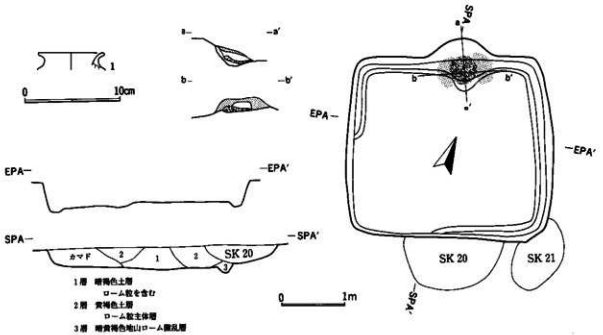
遺構　B2区の中央付近に所在する。北東でSI 12と接している。上辺2.9m、下辺3.2m、幅3.6mの台形プランである。北壁中央に竈がある。竈設置部の壁は、両側の煙道形成部が内側に食い込んでおり、その外側では逆に外方へ張り出している。また、南東壁はやや外側に張り出している。周溝は全周している。柱穴は認められない。竈の遺存状態は良好で、両袖は短く、竈下を周溝が貫通し、燃焼部で肥大している。煙道部の張り出し方は普通である。東壁際南寄りの床面付近から、焼土塊が発見された。遺物は検出されていない。

SI 14（第16図、第17図、図版５、図版12、図版18）

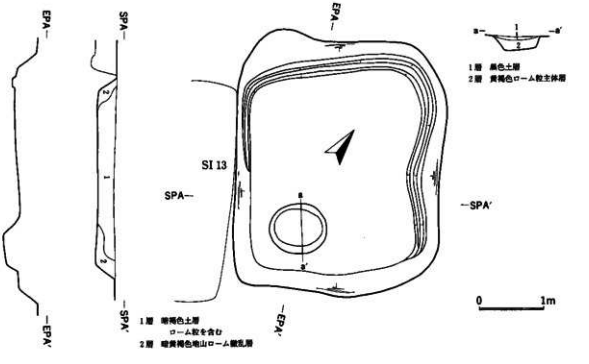
遺構　B2区の中央付近に所在する。SI 13の南に隣り合う位置にある。上辺（北西壁）3.6m、下辺（南西壁）3.9m、幅4.3mの横長横転台形プランを持つ。やや斜めから掘り込まれた住居跡で、南西壁中央に竈が設



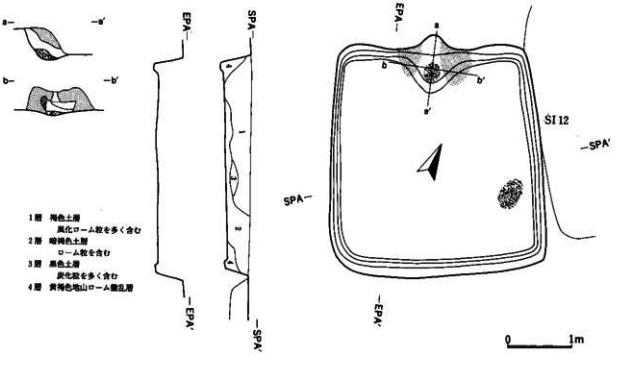
第12図　SI 10 遺構・遺物実測図



第13図　SI 11 遺構・遺物実測図



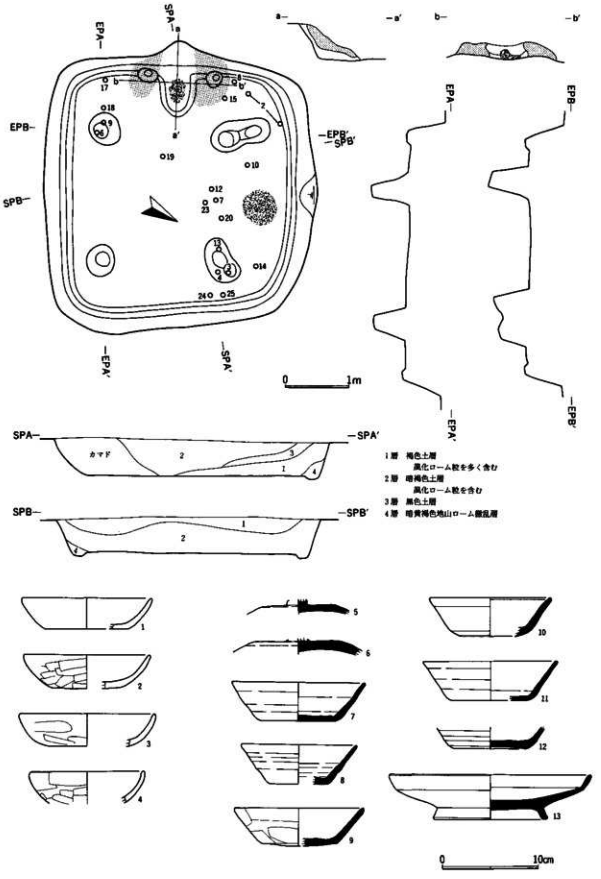
第14図　SI 12 遺構実測図



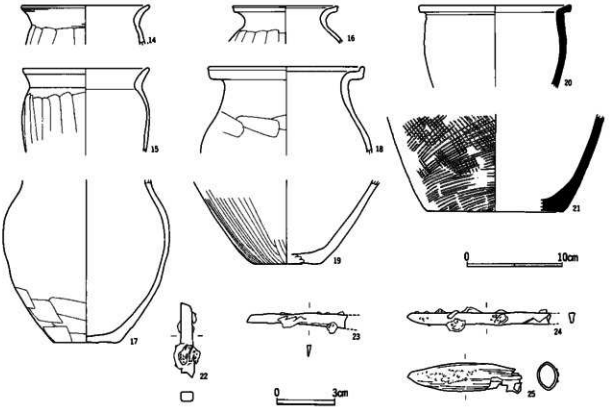
第15図　SI 13 遺構実測図

置されている。この位置は周辺の住居跡に比べて変則的である。それはこの竈が新竈であるためで、当初の旧竈は北西壁中央部にその痕跡を残している。旧竈が存在した壁は若干外側に張り出している。各コーナーは丸みを持っている。周溝は全周し、柱穴は4か所備わっている。新竈の遺存状態は良好で、左袖の方が右袖よりも長く延びている。竈下を周溝が貫通し、燃焼部で船型ピット状に肥大している。両袖下からは心棒ピット（SI 5参照）が検出された。煙道部の張り出し方は普通である。旧竈跡には燃焼部のピットは存在せず、相当する床面が赤く焼けていた。竈内の壁面は外方に膨らんで、煙道部の痕跡を残している。また、4か所の柱穴のうち、北側の2か所には立て替えの跡が見られる。これは竈の移築に伴って、柱の位置を外側にずらせたことを意味しよう。住居跡覆土は人為的な埋土である。

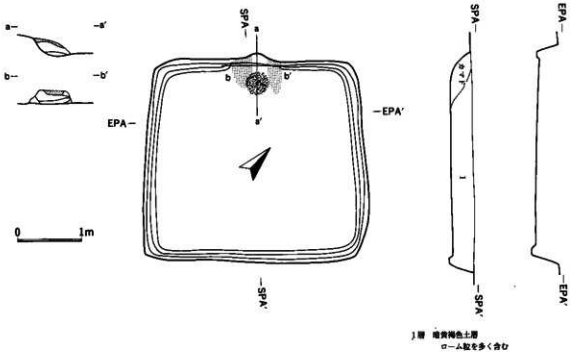
遺物　1～13は杯類である。1は覆土中から出土した。口径13.8cm、器高3.2cm、推定底径8.6cmを計り、赤褐色を呈している。広い底部から浅い体部が湾曲気味に開く盤状杯で、底部と体部の境は面取りされて稜が消えている。体部外面はヘラナデ、内面はヘラミガキで仕上げられている。底部外面にはヘラナデ調整が見られる。2は西コーナー付近の覆土中から出土した。口径13.3cm、器高3.5cm、推定底径7.4cmで、赤褐色を呈する。体部が内湾しながら開く器形で、口縁は単純に丸くなる。底部と体部の境には明瞭に稜が残っている。体部外面はヘラケズリ、内面も弱いヘラケズリが施されている。3は北コーナー寄り柱穴上の覆土中から出土した。口径14.3cm、現高3.4cmで、赤褐色を呈する。底部は僅かに丸みを持ち、体部との境の稜は消されている。浅い体部が内湾気味に開く器形で、口縁端は単純に丸くなる。体部外面は粗くヘラケズリされ、内面はヘラミガキされている。4は北コーナー寄り柱穴上の覆土中から出土した。口径12.0cm、現高3.9cmで、赤褐色を呈する。3よりもさらに丸みを帯びた器形である。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端は単純に丸くなる。体部外面にはヘラケズリが見られ、内面はヘラナデされている。5～13は須恵器である。5は杯蓋で、覆土中から出土した。現高1.6cmで、ツマミ上端と体下部以下を欠いている。明灰色を呈する。ツマミを中心とする天井部は回転ヘラケズリによってほぼ水平に仕上げられている。体下部はロクロ目が残り、内面は回転ヘラナデされている。6は杯蓋で、南コーナー寄り柱穴上の覆土中から出土した。現高1.7cmで、ツマミと体下部以下を欠いている。明灰色を呈する。天井部は僅かに陥没し、回転ヘラケズリ調整される。内面は回転ナデ調整でロクロ目を消している。5に比べて器体が厚く、それだけ大型品になると思われる。7は旧竈手前の覆土下層から出土した。口径14.0cm、器高4.0cm、底径8.0cmを計り、青灰色を呈する。底部は広く、体部との境は面取りされて稜を失っている。また、内面には接合部を圧迫して密着させた際の、細い工具の痕跡が沈線化して巡っている。大きく開く体部は僅かに内屈している。体部は内外面ともロクロナデ調整されているが、外面にはロクロ目が残っている。底部外面は手持ちヘラケズリによって調整されている。胎土には雲母・長石が混入している。8は新竈北脇の覆土中から出土した。口径12.3cm、器高4.1cm、推定底径6.2cmで、明灰色を呈する。底部は比較的狭く、体部が直線的に大きく開く器形である。体部はロクロ調整されるが、外面にはロクロ目が強く残されている。底部外面は手持ちヘラケズリで整えられる。9は南コーナー寄り柱穴上の覆土中から出土した。口径13.8cm、器高3.9cm、底径8.0cmを計り、青灰色を呈している。底部は中心部に厚みがあり、体部下端よりも突出している。底部と体部の境は、面取りによって稜を失っている。体部は直線的に大きく開いているおり、口縁端は単純に丸くなる。体部外面は粗いヘラナデによってロクロ目を消しているが、内面はロクロナデ調整によるものの、弱いロクロ目が残っている。底部外面はヘラ切り痕を回転ヘラケズリによって調整している。10は西コーナー寄り柱穴と旧竈の中間の覆土中から出土した。口径12.1cm、器高4.0cm、推定底径6.1



第16図　SI 14 遺構・遺物実測図



第17図　SI 14 遺物実測図(2)



第18図　SI 15 遺構実測図

cmで、明灰色を呈する。破損断面からみて、底部は厚みがある。底・体部の境はヘラケズリで面取りされ、体部は緩いS字状に大きく開いて口縁に至る。口唇部内面には、器体を絞めた際の沈線が見られる。体部内外面ともにロクロナデ調整されている。底部外面は回転ヘラケズリで調整されている。胎土には雲母が混入している。11は覆土中から採集された。口径14.0cm、器高4.0cm、推定底径8.0cmで、明灰色を呈する。器体の厚みは均質で、体部が直線的に大きく開く器形である。底部と体部の境は、面取りによって稜を失っている。体部内面は、ロクロナデ調整で平滑にされるが、外面にはロクロ目が強く残っている。底部外面は手持ちヘラケズリで調整されている。胎土には長石・石英が混入している。12は覆土中から出土した。現高2.3cm、底径7.7cmで、青灰色を呈する。底部は上げ底で、体部との境は面取りされて、稜が消されている。体部内面はロクロナデで平滑になっているが、外面には強いロクロ目が残っている。底部外面はヘラ切り後に、回転ヘラケズリ調整されている。表面には火ダスキが見られる。13は高台付きの盤で、北寄り柱穴上の覆土中から出土した。口径20.8cm、器高4.6cm、台径12.0cmを計り、明灰色を呈する。脚の開いた台に、大きく開いた底体部が載り、口縁が屈折して内湾気味に開いている。口縁端は肥厚している。台裾の接地面は広く設けられている。底部外面は回転ヘラケズリで調整され、そのほかの部位は横ナデで仕上げられている。胎土は肌理が粗く、砂っぽい。雲母が混入している。

14～21は甕である。14は北コーナーの覆土中から出土した。口径13.4cm、現高4.0cmで、赤褐色を呈する。口縁は外反して、端部は単純に丸くなる。成形上は頸部・口縁と一体で、薄い胴部上端と厚い頸部下端が無造作に接合されている。胴部の膨らみは弱い。外面には縦方向のヘラケズリが施される。15は新竈北脇の覆土中から出土した。口径13.3cm、現高8.6cmで、赤褐色を呈する。頸部は極端に厚みを持ち、口縁は穏やかに開いて、端部は単純に丸くなる。胴部は頸部からやや下がった位置に最大径があり、それ以下は器体が薄く均質化する。胴部外面には縦方向のヘラケズリが見られる。16は覆土中から出土した。口径11.3cm、現高3.9cmで、明褐色を呈する。口縁は水平になるまで大きく外反する。その頂部に粘土紐を載せ、さらに突出させて口唇部を成形している。胴部は最大径がやや下位にあり、膨らむ器形になる。胴部外面には縦方向のヘラケズリが見られる。17は常総型で、南コーナー付近の覆土下層から出土した。現高16.7cm、底径7.0cmで、明褐色を呈する。胴上部に最大径を持つ器形である。中位は成形上の不手際のために、ややくぼんでいる。胴部外面は全体にヘラナデされ、下部は横方向にヘラケズリされている。底部外面には木葉圧痕が認められる。胎土に雲母・長石が混入している。18は常総型で、南コーナー付近の覆土下層から出土した。口径16.5cm、現高9.0cmで、明褐色を呈する。口縁は水平に開き、その外周に蒲鉾形断面の口唇部を積み上げている。胴部はなで肩の器形になる。胴部はヘラナデされた後、頸部直下に装飾的なヘラケズリが入る。17と同一個体の可能性が高いが、接合しない。19は常総型で、覆土中から採集された。現高8.3cm、推定底径7.2cmで、明褐色を呈する。胴部外面はヘラナデの後、細い工具による弱い縦ヘラケズリが施される。胎土には雲母・長石が混入している。外面には煤が付着している。20・21は須恵器である。20は旧竈手前の覆土下層から出土した。口径16.0cm、現高8.7cmで、青灰色を呈している。頸部を持たず、口縁は短く屈折して二重口縁を形成している。胴上部が緩く張り出して、底部へ向かう器形である。胴部外面はヘラナデ調整が全体に行き届いている。21は覆土中から採集された。現高10.0cm、推定底径14.3cmで、外面は黄褐色、内面は黒色を呈する生焼け製品である。バケツ形の器形で、底部は上げ底気味になる。外面には平行タタキ目が格子状に施され、内面はヘラナデされている。

22は鉄器片で、覆土中から出土した。現長3.9cm、重量4.8gである。断面が方形であるところから、鉄

鏃または釘の可能性がある。23は刀子で、中央付近旧竈寄りの覆土下層から出土した。現長5.3cm、重量3.0gの切っ先に近い破片である。摩耗のために刀身が細くなり、刃部側は僅かに内湾している。24は刀子で、北寄り柱穴と北東壁の間の覆土中から出土した。現長7.4cm、重量5.4gである。切っ先を含む破片で、刀身は細身である。刃部側は余り摩耗していない。25は刀子鞘で、24とともに、北寄り柱穴と北東壁の間の覆土中から出土した。24とセットになる可能性が高い。現長6.0cm、重量6.2gである。鞘尻を含む破片で、空洞の断面は杏仁形を呈し、長径1.5cm、短径1.1cmを計る。外部は木質部がよく残り、内面は鉄化して、薄く皮膜されている。

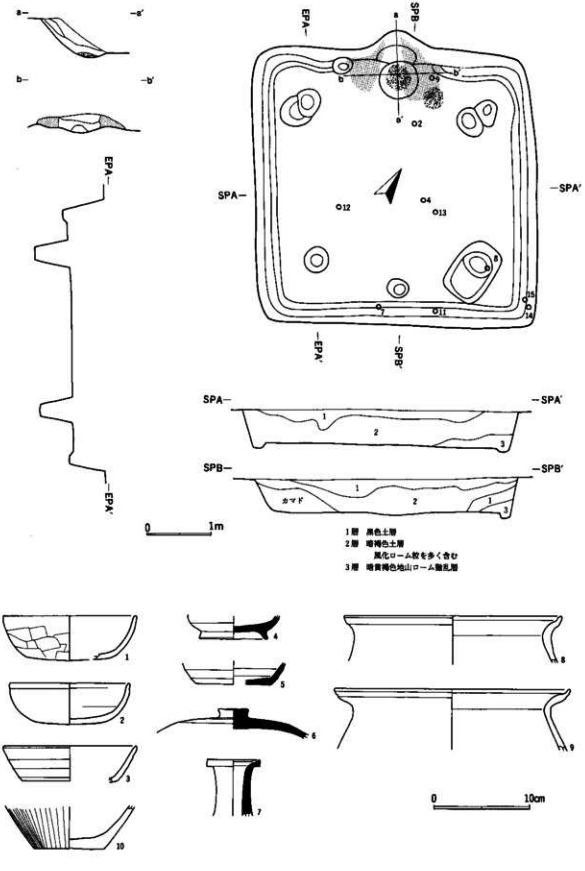
SI 15（第18図、図版５）

遺構　B2区の中央付近に所在し、北部住居跡群中、南寄りに位置し、SI 14の南西に隣り合う。上辺3.2m、下辺3.4m、幅3.2mの台形プランである。北西壁中央に竈が設置されている。周溝は幅が狭く、全周する。柱穴は確認されなかった。竈の遺存状態は不良で、両袖基部の山砂が僅かに残っていた。燃焼部にはごく浅いピットが掘られている。煙道部の張り出しは極めて短い。住居跡覆土の性格上、人為的な埋土であろう。遺物は検出されなかった。

SI 16（第19図、第20図、図版５、図版12、図版13、図版17、図版18）

遺構　B2区の南東寄りの地点に所在し、北部住居跡群中南側に位置し、SI 15の南東に隣り合う。南東コーナーでは、SI 17と接している。上辺4.1m、下辺4.3m、幅4.4mの横長横転台形プランを持つ。北西壁中央やや北寄りに竈が設置されている。周溝は全周しているが、北西壁両端のコーナーでは外方に湾曲している。柱穴は４か所備わっている。東柱穴のみ長方形プランで、規模が大きい。このうち３か所に立て替えの痕跡が見られる。このほか、竈対向壁際中央には、はしご穴が確認された。竈の遺存状態はやや不良である。両袖は短く、燃焼部には壁面に接して船型ピットが掘られ、煙道部は比較的発達している。南西袖下からは心棒ピットが検出された。また、北東袖下の床面の一部が、熱を受けて円形に赤変していた。住居跡の覆土は第２層の性格からみて人為的な埋土と考えられる。

遺物　１～３・５・６は杯類である。１は覆土中から出土した。口径13.8cm、器高4.6cm、底径9.0cmで、赤褐色を呈する。底部はやや膨らみ、体部との境にかすかに稜を残している。体部は内湾しながら穏やかに開き、口縁端は単純に丸くなる。外面はヘラケズリされ、内面はナデ仕上げされている。２は竈手前の覆土下層から出土した。口径12.4cm、器高4.2cmで、赤褐色を呈する。底部は丸底に近く、体部は内湾気味に短く立ち上がっている。口縁直下には、細沈線が１条巡っているが、これは口縁の内側に粘土紐を継ぎ足して口唇部を成形した際の接合痕であろう。外面はヘラナデ、内面はヘラミガキによって仕上げられている。３は覆土中から出土した。口径13.8cm、器高3.6cmで、明褐色を呈する。広い底部から、浅い体部が直線的に開く器形である。体部外面にはロクロ目が残っているが、内面はロクロナデ調整でロクロ目が消されている。底部外面は手持ちヘラケズリで調整されている。５・６は須恵器である。５は覆土中から採集された。現高2.4cm、推定底径7.4cmで、明灰色を呈する。胎土には雲母が混入している。体部が大きく開く器形である。体部内外面にはロクロ目が強く残っている。底部外面はヘラ切り後、回転ヘラケズリ調整されている。６は杯蓋で、覆土中から採集された。現高2.0cmで、青灰色を呈する。胎土には長石が混入している。ツマミは王冠形を呈し、中央が盛り上がっている。天井部は丸みを帯びることから、比較的背



第19図　SI 16 遺構・遺物実測図

の高い器形を予想させる。天井部外面は回転ヘラケズリされ、内面は回転ナデ調整でロクロ目が消されている。

4は須恵器で、高台付きの小型壺の底部破片であろう。中央東寄りの床面付近から出土した。現高2.4cm、台径7.0cmで、明灰色を呈する。胎土には雲母が多く混入している。丸底気味の底部に、短脚の台が付いている。台脚は外方に開き、接地面は丸くなっている。底部周辺は回転ヘラケズリされるが、底部にはヘラ切り痕が残っている。内面は回転ヘラケズリで調整されている。7は須恵器長頸壺で、南東壁際中央の覆土中から出土した。口径5.6cm、現高5.8cmで、明灰色を呈する。口縁は二重口縁で、側縁は直立している。口頸部は内外面ともロクロナデ仕上げされている。

8～10はいずれも常総型の甕である。8は東コーナー寄り柱穴上の覆土下層から出土した。口径22.6cm、現高4.7cmで、褐色を呈し、胎土には雲母・長石が混入している。口縁は短く外反し、頂部に粘土紐を立てて口唇部を成形している。頸部は厚みがあり、緩やかに胴部が広がる器形である。内外面ともにヘラナデ調整されている。9は竈内から出土した。口径24.2cm、現高6.2cmで、赤褐色を呈し、胎土には雲母・長石を混入している。口縁は短く、大きく開き、端部に粘土紐を継ぎ足して口唇部を成形している。その際、接合部を密着させるために、細い工具によって内外両面から圧迫したために、内面では微妙にくびれ、外面では凹線となって装飾的に生かされている。胴部は上位に最大径を持つ腰高な器形であろう。内外面ともにヘラナデ調整されている。10は覆土中から出土した。現高4.2cm、底径7.4cmで、赤褐色を呈し、胎土には雲母・長石を混入している。底部破片で、外面は細い工具による縦方向のヘラケズリ、内面はナデで調整され、底部外面には木葉圧痕が残っている。

11・12は素焼きの紡錘車である。11は南東壁際北寄りの覆土下層から出土した。最大径4.3cm、高さ1.3cm、心孔径0.7cm、重量32.5gである。灰褐色を呈する。上面は中央がやや膨らみ、底面はほとんど平らである。心孔径は一定している。上下面ともに平滑にナデ仕上げされている。周囲は0.8cm幅で面取りされている。12は中央西寄りの覆土下層から出土した。最大径4.4cm、高さ2.4cm、心孔径0.5cm、重量55.5gである。赤褐色を呈し、一部に赤彩痕跡が認められる。上面は高く盛り上がり、底面も中央部で若干肥厚している。心孔は中心で最も狭く、両端が広がっている。上下面ともにヘラケズリで調整され、その際に周囲が僅かに面取りされている。

13は石皿で、中央東寄りの覆土下層から出土した。長さ8.0cm、高さ4.4cm、重量363.6gである。砂岩製で、黄灰色を呈し、肌理は細かい。本来は楕円形を呈していた遺物の、4分の1大の破片と思われる。各面は平滑で磨滅している。周縁部には敲打痕が認められる。単なる破片としては破損面が整い過ぎており、加工整形した可能性がある。出土層位からみても混入物とは考えにくく、縄文時代の遺物を再利用していた疑いが残るが、砥石としての線状擦痕は認められない。

14・15は鉄製品である。14は不明鉄器で、東コーナーの覆土中から出土した。長さ9.3cm、最大幅1.9cm、中央部の厚さ0.2cm、重量10.4gである。ほぼ完形品で、両側に小孔が穿たれている。断面形は刃器のそれに似て、一方が先細りしているが、刃部は研ぎ出されていない。にもかかわらず、中央部の幅が減じているのは、使用時における摩耗のためであると考えられる。15は鉄鏃で、14とともに東コーナーの覆土中から出土した。現長9.7cm、重量7.5gである。無棘有茎柳葉式である。

SI 17（第21図、図版５、図版13）

遺構　B2区の南東寄りの地点に所在し、北部住居跡群中の南側に位置し、北西コーナーがSI 16と接している。上辺3.0m、下辺2.8m、幅3.0mの逆台形プランを持つ住居跡である。北西壁のやや北に偏して竈が設けられている。周溝は全周している。北側に比べて南側の周溝幅は広くなっている。床面プランは中央を境に、竈側の方が外側に張り出している。柱穴は確認されていない。南東壁際中央にはしご穴がある。竈の遺存状態はやや不良である。両袖は短く、周溝が竈の下を貫通し、燃焼部では船型ピット状に肥大している。袖の下には心棒ピットが存在する。煙道部の張り出しは未発達である。

遺物　１～３は杯である。１は竈北脇の覆土下層から出土した。口径14.0cm、器高3.7cm、底径8.6cmで、全面に赤彩が施されている。やや上げ底の大きい底部から、浅い体部が直線的に開く盤状形である。体部内外面には、弱いロクロ目が残されており、下端部はヘラケズリで面取りされているが、底部と体部の境には稜がはっきり残っている。底部外面は静止糸切り後に、周辺を手持ちヘラケズリ調整されている。なお、底部外面には、「＋」の浅い線刻が存在する。２は１とともに、竈北脇の覆土下層から出土した。口径14.0cm、器高3.6cm、底径10.8cmで、内外面ともに赤彩されている。広い底部から浅い体部が直線的に開く盤状形であるが、器体の厚みにはムラがある。体部内外面ともロクロナデされ、内面はさらに、条痕状の細い工具による横方向のヘラミガキが入る。体部外面の下端はヘラケズリで整えられ、底部と体部の境の稜は消されている。残存する底部外面には、手持ちヘラケズリの痕跡が見える。３は須恵器で、北コーナーの覆土中から出土した。口径14.2cm、器高4.1cm、底径8.0cmで、明灰色を呈する。上げ底気味の底部から、体部が直線的に開く器形である。体部内外面にはロクロ目が明瞭に残されている。底部外面はヘラ切り後、手持ちヘラケズリ調整されており、体部との接合部の稜が消されている。

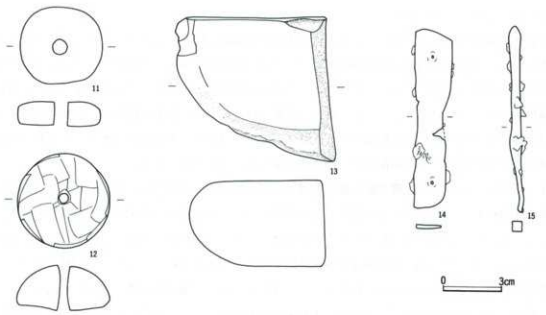
４は甕で、竈北脇の覆土下層から出土した。現高6.0cm、底径8.8cmで、赤褐色を呈する。下端部内面は内削ぎによって、僅かに面取りされている。外面調整は下端部にヘラケズリが入り、内面はヘラナデされている。

SI 18（第22図、図版６）

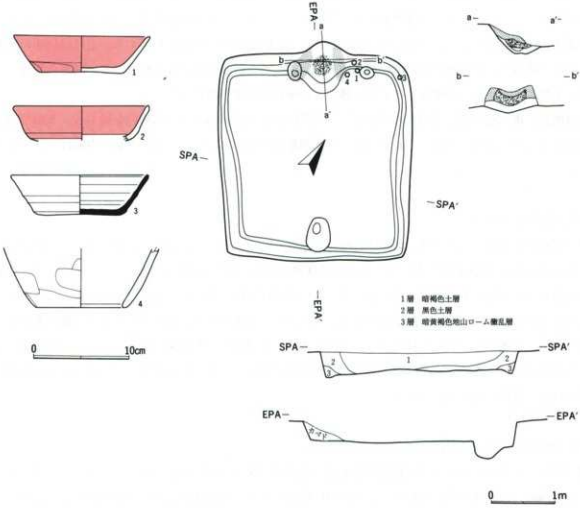
遺構　B2区の南東部に所在する。北部住居跡群中の南東部に位置し、SI 17の東に隣り合う。短辺3.7m、長辺3.9m、幅3.8mの横長横転台形プランを持つ住居跡である。北壁中央付近に竈が設けられている。北壁の竈・北西コーナー間が若干外側に張り出している。周溝は全周している。柱穴は４か所備わっており、そのうちの２か所には立て替えの跡が見られる。このほか、南壁中央にははしご穴がある。竈の遺存状態は良好である。両袖の張り出し方は普通で、周溝が竈の下を貫通し、燃焼部で肥大している。煙道部の張り出し方は普通だが、燃焼部の主軸と一致せず、若干西にずれている。住居跡覆土の性格上、人為的な埋土と思われる。遺物は検出されなかった。

SI 19（第23図、図版６、図版13、図版16、図版18）

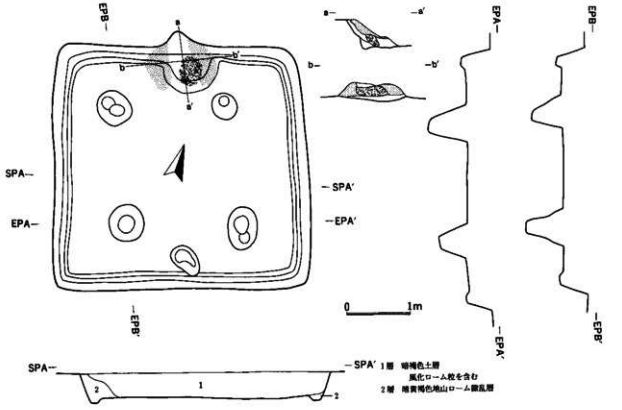
遺構　B2区の南東部に所在する。北部住居跡群の南部に位置し、西側でSI 20を切っている。短辺2.9m、長辺3.2m、幅3.3mの横長横転台形プランを持つ住居跡である。東側壁面の掘り込みは傾斜しており、各コーナーは丸みを持っている。竈は北西壁北寄りに設置されている。北西壁の竈・北コーナー間が外側に張り出している。周溝は全周している。柱穴は４か所で、大型で浅く、コーナー付近に掘られている。この



第20図　SI 16 遺物実測図(2)



第21図　SI 17 遺構・遺物実測図



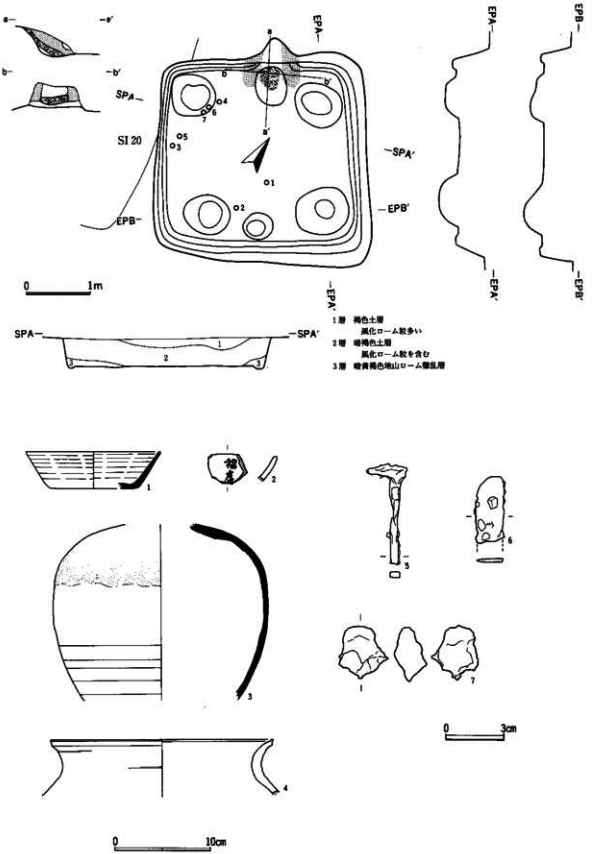
第22図　SI 18 遺構実測図

ほか、南東壁際中央にはしご穴がある。竈の遺存状態は良好である。両袖は短く、燃焼部には壁面に接するように船型ピットが、両袖からはみ出して掘られている。煙道部の張り出し方は普通だが、燃焼部の主軸より北にずれている。

遺物　1は須恵器杯で、中央南東寄りの覆土中から出土した。口径14.2cm、器高3.8cm、推定底径9.0cmで、外面は灰褐色、内面は赤褐色を呈する。大きい底部から浅い体部が直線的に開く器形である。体部内外面には、幅の狭いロクロ目が残っている。底部外面は手持ちヘラケズリで調整され、底部と体部の境の稜は消されている。なお、胎土には雲母が混入している。2は土師器杯の口縁部破片で、赤褐色を呈する。南柱穴脇の床面付近から出土した。外面には淡い墨色の墨書がある。1字目は「福」、2字目は下部が欠失しているが、「廣」になるであろう。

3は須恵器長頸壷で、南西壁際中央の覆土中から出土した。現高18.0cm、胴部最大径22.5cmで、青灰色を呈する。頸部との接合面が残っているので、頸部径は推定できる。肩は大きく張って丸くなり、胴部最大径となる。胴部上半部は回転ヘラナデ、下半部は回転ヘラケズリされている。頸部付け根から肩部までは自然釉が付着している。

4は甕で、西柱穴脇の床面付近から出土した。口径23.6cm、現高5.4cmで、赤褐色を呈する。口縁は短く外反し、頂部に粘土紐を載せて口唇部を成形している。その際、外側から強く横ナデで絞めたために、口



第23図　SI 19 遺構・遺物実測図

縁側縁が外反している。胴部外面にはヘラケズリが見られる。

5・6は鉄製品である。5は不明鉄器で、南西壁際北寄りの覆土中から出土した。長さ5.2cm、重量5.7gである。断面は長方形を呈し、先端はほぼ直角に屈折している。6は鉄鏃で、西柱穴脇の覆土中から出土した。長さ3.5cm、重量2.8gである。片刃式有茎鏃の先端部の破片である。

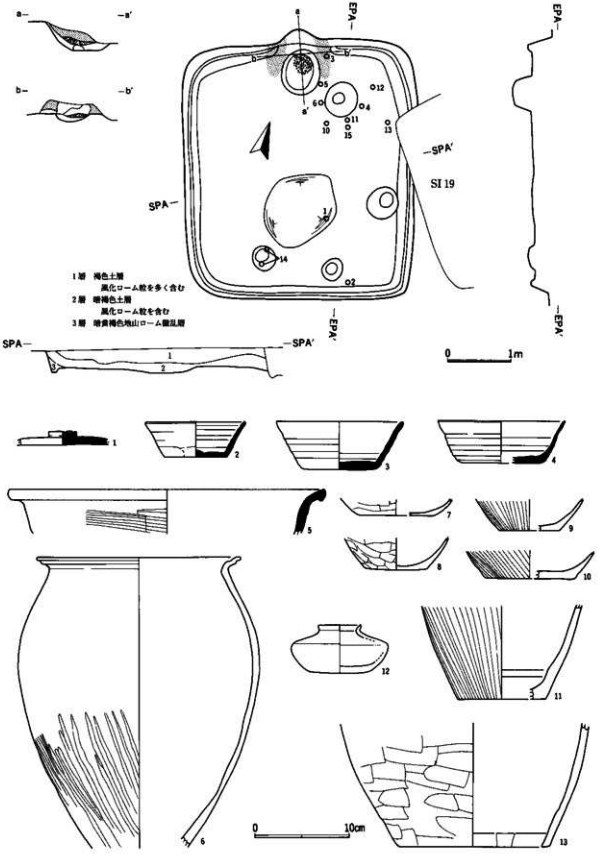
7は鍛冶滓で、西柱穴脇の覆土中から出土した。長さ2.7cm、重量13.9gである。いわゆる鉄錆状態で、暗褐色の地色の随所が黄褐色に変色している。

SI 20（第24図、第25図、図版6、図版13、図版18）

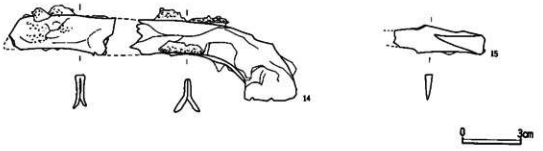
遺構　B2区の南部に所在する。北部住居跡群の南部に位置し、東壁の一部がSI 19に切られている。上辺3.5m、下辺3.4m、幅4.1mの逆台形または横転台形プランの住居跡である。竈は北壁中央に設置されている。南東コーナー以外の3コーナーは丸みを持っている。東壁はやや外側に張り出しており、西壁は逆にやや内側にせり出している。周溝は全周しており、南側では幅が狭くなっている。床面上には大小のピットが不規則に配されており、柱穴・はしご穴等の特定機能を限定できない。中央南寄りには浅皿状の大きな窪みがあり、東側を中心に4か所の小ピットが散在している。これらの小ピットは、北側の2か所が深く、南側の2か所は浅い。竈手前の深い1か所は、竈の傍らに位置することと、周囲から遺物が多量に出土していること等から、貯蔵穴とも考えられる。竈の遺存状態はやや不良である。両袖は短く、壁に接近して船型ピットが掘られ、煙道部の張り出しは未発達である。

遺物　1～4は須恵器杯類である。1は杯蓋で、覆土中から出土した。現高1.4cmで、青灰色を呈する。ツマミは扁平な王冠形で、中央部が突起しているが、周縁部の方が高い。天井部・ツマミ本体間のくびれ部は存在しない。天井部はほとんど水平である。2は南壁際東寄りの床面直上から出土した。口径10.3cm、器高3.6cm、底径6.4cmで、青灰色を呈する小型品である。底部と体部との境の稜ははっきり残り、体部が外反しながら開く器形である。内外面にロクロ目が残されるが、特に内面が顕著で、底部にはロクロ上で生じた凹凸がそのまま残されている。体部外面下部はヘラケズリで面取り調整されている。底部外面はヘラ切り後、回転ヘラケズリで仕上げられている。3は竈内から出土した。口径13.5cm、器高4.9cm、底径7.4cmで、明灰色を呈する。厚い底部から、深い体部が直線的に、大きく開く器形で、口縁が僅かに外反している。体部と底部の接合部内面は、ヘラ状用具で圧迫され、陥没している。体部内外面はロクロ目がよく残っている。底部外面はヘラ切り後、手持ちヘラケズリで調整され、体部との境の稜は消されている。胎土には長石が混入している。4は竈手前のピット脇の覆土中から出土した。口径13.4cm、器高4.3cm、底径8.2cmで、明黄灰色を呈する。厚い底部に対し、体部が薄い点が特徴的である。体部が外反しながら開く器形で、口縁付近でさらに外反している。底部と体部の接合部内面は、僅かに陥没している。体部外面はロクロ目が強く残るが、内面はロクロナデ調整により平滑になっている。底部外面は、手持ちヘラケズリ調整され、体部との境の稜は消されている。

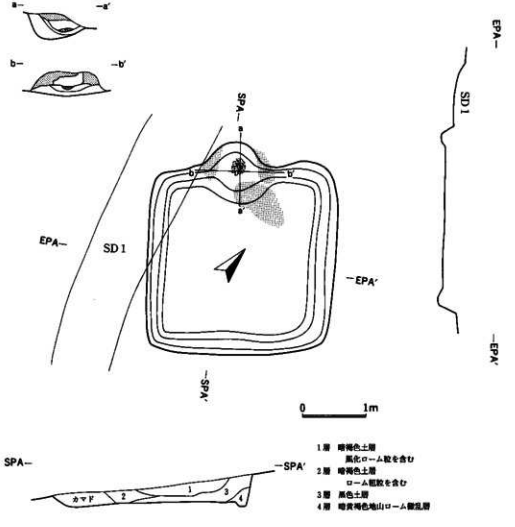
5～11は甕である。5は須恵器で、竈内から出土した。口径33.2cm、現高4.6cmで、明灰色を呈する。口縁は短く外反して、端部下側に粘土紐を継ぎ足して二重口縁を成形している。頸部を形成せず、直ちに直線的な胴部へ移行するバケツ形の器形である。外面は平行タタキ目が見られ、内面はヘラナデされている。胎土には雲母が混入している。6は常総型で、竈手前の覆土下層から出土した。口径21.2cm、現高30.0cmで、明褐色を呈する。口縁は短く、水平に延びて、頂部に粘土紐を継ぎ足してさらに外反する口唇部を作



第24図　SI 20 遺構・遺物実測図



第25図　SI 20 遺物実測図(2)



第26図　SI 21 遺構実測図

り出している。その結果、いわゆる有段口縁が形成されて、装飾的な効果を生みだしている。胴部は上位に最大径を持つ、腰の高い器形である。胴部外面は全面にヘラナデが施され、下半部には粗い縦ヘラナデ調整が見られる。胎土には雲母が混入している。7は覆土中から出土した。現高1.7cm、推定底径7.9cmで、赤褐色を呈する。薄い器体で、胴部外面は横ヘラケズリされている。8は覆土中から出土した。現高3.3cm、底径6.4cmで、暗褐色を呈する。薄い器体で、胴部外面はヘラケズリされている。9～11は常総型である。9は覆土中から採集された。現高3.2cm、底径6.4cmで、赤褐色を呈する。外面は細い工具で縦方向にヘラナデされている。胴部中位は極めて薄くなる。胎土には雲母を含む。10は覆土中から出土した。現高2.8cm、底径9.8cmで、褐色を呈する。外面は細い工具で縦方向にヘラケズリされている。底部外面には木葉圧痕が見られる。胴部中位は極めて薄くなる。胎土には雲母・長石が混入している。11は竈手前のピット脇の覆土中から出土した。現高9.6cm、推定底径9.2cmで、暗褐色を呈する。胴部最大径が上方にある、腰の高い器形である。体部接合部は内面が肥厚したままで、調整されていない。胴部外面の調整は縦方向のヘラケズリである。胎土には雲母・長石が混入している。

12は小型壺で、北東コーナー付近の覆土下層から出土した。口径4.4cm、器高5.0cm、最大径10.3cm、底径5.0cmで、赤褐色を呈する。薬壺の範疇に含められる。精製された胎土が使用されている。短い口縁は直線的に開き、胴部は大きく張り出した肩部で最大径になる。肩部はかすかに丸みを帯びて、大きく屈曲して底部に至る。胴部と底部の接合部は、面取りされて丸みを帯びている。外面は全体にナデ調整で丁寧に仕上げられている。

13は甕で、東壁際北寄りの覆土中から出土した。現高12.4cm、底径16.0cmで、赤褐色を呈する。底部は五孔式で、中央の円孔を4個の楕円孔が取り巻いている。この底部は胴部に比べ、厚手に作られている。胴部外面下半には粗い横ヘラケズリが施される。

14・15は鉄製品である。14は鎌で、南西コーナーに近いピット上の覆土下層から出土した。切っ先と中間部が欠失しており、錆化が進んでいる。総重量は39.4gである。断面観察から、鍛造鉄板を折り合わせて、本体が作成されていることが知られる。15は刀子で、竈手前のピット脇の床面付近から出土した。重量7.2gである。切っ先を含む破片であるが、切っ先部が強く折り曲げられた状態で出土している。

SI 21（第26図、図版6）

遺構　B1区の南東部に所在する。北部住居跡群の北側に位置している。短辺2.1m、長辺2.7m、幅3.0mの横転台形プランを示す小型住居跡である。西コーナー付近はSD 1によって上部が切られている。北西壁中央に竈が設置されている。北西壁の竈・北コーナー間は、竈側が内側にせり出し、コーナー側が外側に張り出している。周溝は全周している。竈のある北西壁を除く3壁の周溝は、それぞれ中央付近が内側にせり出している。柱穴・はしご穴は存在しない。竈の遺存状態は不良で、竈材となっていた多量の山砂が、周辺に散乱していた。両袖は極めて短く、周溝は竈下を貫通して、燃焼部のところではピット状に肥大している。煙道部の張り出しは、住居跡の規模に比べて大きめに掘られている。遺物は検出されなかった。

SI 22（第27図、図版7、図版13、図版14、図版16）

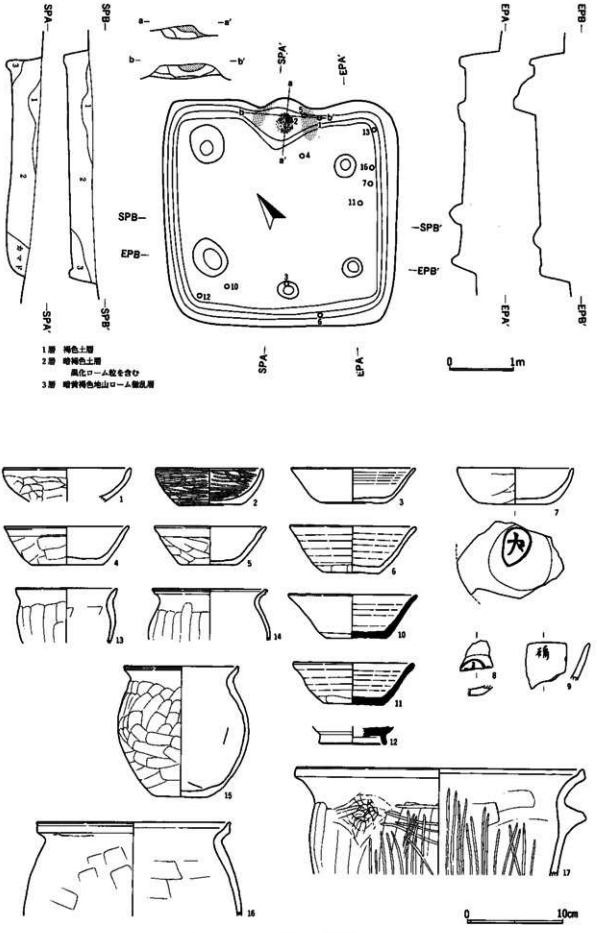
遺構　B1区の南部に所在する。北部住居跡群の北側に位置し、SI 21の南西に隣り合う。上辺3.5m、下辺3.2m、幅3.4mの逆台形プランの住居跡である。北コーナーを除く3コーナーは丸みを持っている。竈はほか

の住居跡と異なり、北東壁中央に設置されている。北東壁の煙道形成部は、両側とも内側にせり出しており、その外側は、北部では直線状を呈するが、南部では外側に張り出している。周溝は全周している。柱穴は4か所で、コーナーに接近して掘られている。北・西柱穴が南・東柱穴に比べて規模が大きい。このほか、南西壁際中央にははしご穴が存在する。竈の遺存状態はやや不良である。両袖は短く、周溝は竈下を貫通し、燃焼部ではピット状に肥大している。煙道部の張り出しは未発達である。住居跡覆土は風化ロームを多量に含む人為的な埋土と思われる。

遺物　1～12は杯類である。1は竈東脇の覆土中から出土した。口径12.2cm、現高3.5cmで、赤褐色を呈する。丸底からの延長の体部は、内湾しながら立ち上がり、口縁はやや屈折している。外面はヘラケズリで調整されている。2は竈内から出土した。口径11.0cm、器高3.8cm、底径6.4cmで、赤褐色を呈する。底部はかすかに上げ底になり、体部は内湾しながら立ち上がる。底部と体部の接合部は厚みを残し、面取りが十分でない。体部外面はヘラケズリの後、細い工具による粗いヘラミガキ、また、内面はナデの後、粗いヘラミガキを加えている。底部外面は体部同様、ヘラケズリの後、粗いヘラミガキを加えている。胎土には僅かに雲母が含まれる。3ははしご穴上の覆土下層から出土した。口径12.8cm、器高3.7cm、底径6.8cmで、赤褐色を呈する。広い底部から、体部が外反気味に大きく開く器形である。底部と体部の接合部は、面取りされて丸みを帯びている。薄い体部の外面は、ロクロナデによりロクロ目が消され、平滑になっているが、内面にはロクロ目が残っている。底部外面は回転糸切り後、周縁が回転ヘラケズリ調整されている。4は竈正面の床面付近から出土した。口径12.9cm、器高4.0cm、底径7.5cmで、赤褐色を呈する。広い底部から体部が内湾気味に開いて、口縁で僅かに外反する器形である。体部外面はヘラケズリされ、口縁部は強い横ナデが加えられている。底部外面はヘラナデ調整されているが、底部との境に稜を残している。5は竈上から出土した。口径11.6cm、器高4.0cm、底径5.7cmで、赤褐色を呈する。小さい底部から、体部が直線的に大きく開き、口縁で僅かに外反する器形である。体部が底部よりも厚みがある点が特徴的である。体部外面はヘラケズリされ、口縁部は強く横ナデが加えられている。底部外面はヘラケズリ調整され、体部との境の稜はかすかに面取りされている。6は南西壁際北寄りの覆土下層から出土した。口径13.0cm、器高4.9cm、底径5.8cmで、暗褐色を呈する。やや上げ底の小さい底部から、深い体部が緩いS字状に大きく開く器形で、口縁は肥厚している。胎土には雲母・長石・石英が混入している。体部内外面には、ロクロ目が強く残されている。外面下端はヘラケズリされている。底部外面はヘラ切り後、手持ちヘラケズリで調整されているが、体部との境の稜は残されている。

7～9は墨書土器である。7は南東壁際北寄りの覆土中から出土した。口径15.8cm、器高3.7cm、底径7.7cmで、赤褐色を呈する。広い底部から、浅い体部が内湾しながら立ち上がる。口縁は単純で、底部と体部の境は、面取りされて稜を失っている。体部外面はおおまかにヘラケズリされ、底部外面はヘラケズリ調整である。なお、底部外面には、図示のような丸囲み墨書がある。8は覆土中から出土した。赤褐色を呈する杯の底部破片である。底部外面には7と同様な、丸囲み墨書文字の一部が確認できる。9は覆土中から出土した。赤褐色を呈する杯の口縁部破片である。外面には「稲」字が墨書されている。

10～12は須恵器杯である。10は西コーナー寄りの覆土下層から出土した。口径13.2cm、器高4.6cm、底径6.4cmで、明灰色を呈する。胎土には雲母・長石が混入している。深い体部が外反しながら大きく開く器形である。体部外面はロクロナデでロクロ目が消され、下端はヘラケズリで面取りされて、底部との境の稜を僅かに消している。内面はロクロ目がそのまま残されており、底部内面にもロクロ痕の凹凸が残ってい



第27図　SI 22 遺構・遺物実測図

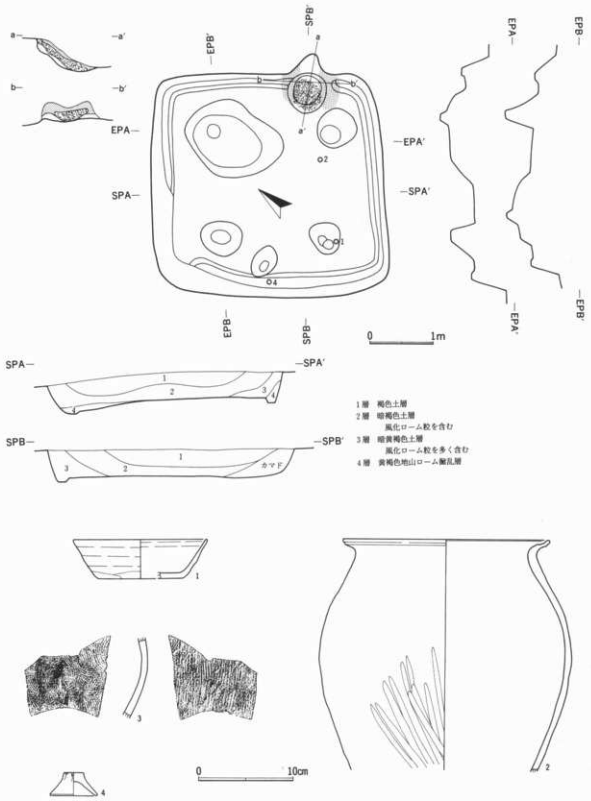
る。底部外面はヘラ切り後、回転ヘラケズリで調整される。11は南東壁傍らの覆土中から出土した。口径12.4cm、器高4.3cm、底径6.3cmで、灰褐色を呈する。厚みのある底部から、深い体部が緩いS字状に大きく開き、口縁は肥厚している。体部は内外面ともにロクロ目が強く残っている。口縁直下は器壁が薄くなる程、きつく絞められている。体部下端はヘラケズリによって面取りされているが、底部との境の稜は残されている。底部外面はヘラ切り後、手持ちヘラケズリで調整される。12は高台付き杯の底部破片である。西コーナーの覆土下層から出土した。現高1.8cm、台径7.0cm、台高0.9cmで、青灰色を呈する。回転ヘラケズリ調整された杯底部に、短い台部が取り付けられている。台裾はやや外方へ開いており、接地面は丸くなっている。

13～16は甕である。13は東コーナーの覆土下層から出土した。口径10.4cm、現高5.6cmで、赤褐色を呈する。口縁は端部が横ナデで強く絞められて口唇部を形成する。胴部は余り膨らまずに底部に至る器形である。胴部外面は縦方向にヘラケズリされている。14は覆土中から出土した。口径11.7cm、現高5.3cmで、暗褐色を呈する。口縁は外反して頂部に粘土紐を継ぎ足して口唇部を成形している。その際に、紐を接合部にあてがい、口唇部をこれに絡ませて、めくり返った形状を現出している。装飾的な手法である。胴部は上位に最大径を持つ器形である。胴部外面には縦方向のヘラケズリが施される。15は覆土中から出土した。口径11.6cm、器高13.5cm、底径5.7cmで、赤褐色を呈する。口縁の開きは余り大きくなく、頂部に粘土紐を継ぎ足して口唇部を成形している。接合部の外側は、隙間がそのまま残されて、あたかも沈線を巡らせたかのような形状になっている。胴部最大径は中位にあって、球形に近い器形を呈し、下半部は薄手に作られている。上半が縦方向、下半が横方向のヘラケズリで調整されている。16は南西壁際北寄りの覆土下層から出土した。口径20.0cm、現高9.7cmで、暗褐色を呈する。口縁は短く開き、頂部に粘土紐を継ぎ足してさらに外反させている。また、口縁下側には断面三角形の粘土帯を貼付して、下端の稜を成形している。胴部は余り膨らまないが、腰の高い器形になる。胴部外面はヘラケズリの後、粗いヘラナデが加えられている。

17は甕で、覆土中から出土した。口径29.6cm、現高11.0cmで、赤褐色を呈する。口縁は穏やかに開いて、頂部に直立する口唇部を成形している。また、15のように、口縁外側に断面三角形の粘土帯を貼付して、下端の稜を成形している。胴部最大径は最上位にあって、そこに1個の把手が付いている（4分の1周程の現存範囲)。把手は円錐状の粘土塊を器面に貼付したもので、接合部にはヘラ先で粘土を延ばした痕跡が観察される。胴部外面は縦ヘラケズリの後、粗いヘラミガキが加えられる。内面にもヘラナデ後に、ヘラミガキが施されている。

SI 23（第28図、図版7、図版14、図版17)

遺構　B1区からC1区にかけて所在する。北部住居跡群の北東端に位置する。上辺3.2m、下辺3.6m、幅3.4mの横長台形プランを示す住居跡である。北西壁と南西壁は、斜めから掘り込まれている。各コーナーは丸みを持っている。南西壁は外側に張り出している。竈は北東壁の東コーナーに偏して設置されている。周溝は西コーナー付近で途切れている。柱穴は各コーナー寄りに4か所あるが、いずれも不整形なプランである。北柱穴の掘り方は異様に大きい。この掘り方の床面レベルは、貼り床でふさがれていた。また、東柱穴はあまりにも竈に接近しすぎているために、竈周辺の諸作業に支障を来していたことと考えられる。このほか、南西壁際中央には、はしご穴が掘られている。竈の遺存状態はやや不良である。南側の袖は東



第28図　SI 23 遺構・遺物実測図

柱穴と接しており、燃焼部には壁に接して円型のピットが掘られている。煙道部の張り出し方は普通だが、軸線はやや南に傾斜している。

遺物　1は杯で、南柱穴上の覆土下層から出土した。口径14.1cm、器高4.0cm、底径8.8cmで、暗褐色を呈する。大きい底部から、体部が直線的に大きく開く器形である。体部外面にはロクロ目が強く残っているが、内面はロクロナデで調整されて平滑になっている。下端はヘラケズリで面取りされ、底部と体部の接合部は丸みを帯びる。底部外面は手持ちヘラケズリが施される。

2は常総型甕で、東柱穴脇の覆土下層から出土した。口径21.8cm、現高23.7cmで、黄褐色を呈する。胎土には雲母が混入している。口縁は短く、水平にまで開いて、その頂部に粘土紐を継ぎ足して、さらに外反する口唇部を成形している。頸部から胴上部にかけてかなり厚みがあり、胴部は最大径が上部に位置し、膨の高い器形になる。胴部外面は全体がナデ調整されているが、下半部には粗く、縦方向のヘラナデが加えられる。

3は須恵器甕の破片を素材にした転用硯である。覆土中から出土した。青灰色を呈する胴部湾曲部の破片で、外面は平行タタキ目が縦走し、内面は同心円状の当て具痕が充填している。硯面として使用されたのは内面で、中央部の当て具痕が磨滅している。

4は小型台形土器で、南西壁際中央の覆土下層から出土した。天井径2.0cm、器高2.4cm、底径5.0cmで、暗褐色を呈する。天井部が平坦な円錐台形である。天井部は焼成後に、砥石状の用具で平滑に仕上げており、この面のみ地色の赤褐色が露呈している。天井部周辺の調整はヘラケズリで行われ、そのほかは内外面ともにヘラナデ調整が施される。

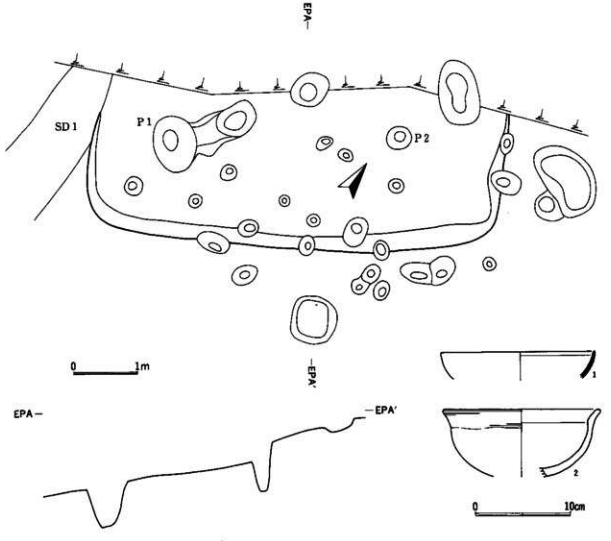
SI 24（第29図、図版7）

遺構　B1区の南東寄りの地点に所在する。北部住居跡群中、最北端に位置する。台地斜面にかかっているために、遺構の北西部を確認できなかった。残存部分には、後世のピット群が重複して存在していた。さらに、遺構の西壁はSD 1によって切られている。南壁は長さ6.2mを計る。竈を伴うとすれば、消失している北側であったろう。周溝は存在しない。柱穴は大きさが異なるものの、P 1・P 2が相当するであろうか。P 1は床面下51cm、P 2は同32cmの深さを計る。床面はEPA－EPA′におけるように、北に向かって傾斜している。

遺物　1は須恵器杯で、覆土中から出土した。推定口径17.3cm、現高2.6cmで、暗褐色を呈する。器壁は薄く、内外面ともに横ナデされている。非常に焼きしまっている。2は杯で、覆土中から出土した。口径16.6cm、現高6.8cmで、赤褐色を呈する。口縁は外反しながら開き、内面は体部との境に稜を形成している。底体部は丸底の椀形となる。口縁は強く横ナデされ、底体部はナデの後、粗くヘラケズリされている。

SI 25（第30図、図版14）

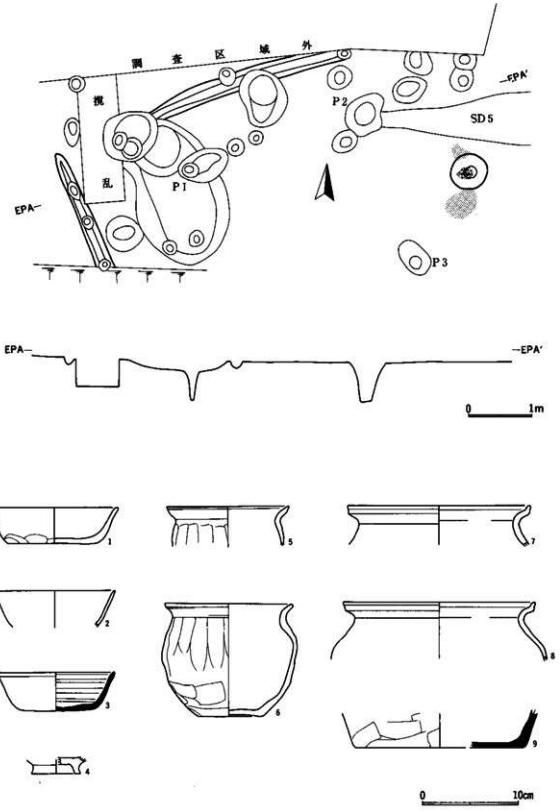
遺構　B3区からB4区にかけて所在する。SI 2の南に空白帯を挟んで、A4区に本住居跡が所在する。南側は農道建設の際に破壊され、残存部分も後世のピットや溝によって大きく切られている。元々床面の浅い住居跡で、壁の立ち上がりは確認できなかった。竈は東壁に設置されていた。遺存状態は悪く、燃焼部の船型ピットとその周囲に、山砂が僅かに残るだけであった。周溝は北側と西側から検出されたが、確認可能な東側からは発見されなかった。柱穴は4か所セットとするならば、P 1・P 2・P 3が相当しようか。



第29図　SI 24 遺構・遺物実測図

P 1 は床面下54cm、P 2 は同52cm、P 3 は同45cmの深さを計る。

遺物　すべて覆土中から出土している。1～4 は杯類である。1 は口径13.3cm、器高3.7cm、底径8.4cmで、赤褐色を呈する。大きい底部から、浅い体部がやや外反して立ち上がる盤状杯である。内外面ともナデ仕上げされ、体部下端はケラケズリによって面取りされ、底部と体部の境の稜が消されている。底部外面は手持ちヘラケズリ調整である。2 は口径12.6cm、現高3.1cmで、明褐色を呈する。器体は薄く、やや長めの体部は直線的に開いている。内外面ともにナデ調整で仕上げられている。3 は須恵器である。口径12.3cm、器高3.9cm、底径7.5cmで、明褐色を呈する。大きい底部から体部が穏やかに開き、口縁付近で外反する器形である。体部外面はナデ調整で平滑に仕上げられるが、内面は回転ヘラナデの際のヘラ痕が、並行的に残っている。底部内面は無調整で、ロクロ目がよく残っている。体部下端は面取りされて、丸みを帯びている。底部外面は手持ちヘラケズリで調整されている。4 は高台付きの杯である。現高1.7cm、台高0.9cm、台径5.1cmで、暗褐色を呈する。内面は黒色処理されている。台部は小さく、台裾は僅かに開いている。接



第30図　SI 25 遺構・遺物実測図

地面は比較的広く、水平面に密着する。

5～9は甕である。5は口径12.9cm、現高4.1cmで、暗褐色を呈する。口縁は穏やかに外反して、頂部にさらに外反する口唇部を成形している。その際、口唇部の付け根がくぼんで沈線が形成される。胴部最大径は口径よりも小さい器形である。胴部外面には縦方向のヘラケズリが入る。6は口径13.5cm、器高11.8cm、底径6.8cmで、赤褐色を呈する。口縁は短く外反して、口縁端は単純に丸くなる。胴部最大径は中位近くまで下がり、底部は比較的大きい。胴部を構成する輪積粘土の接合が未熟なため、器面がゴツゴツしている。胴部外面は上半が縦方向、下部は粗い横方向のヘラケズリが施されている。7・8は常総型である。7は口径19.1cm、現高4.0cmで、明褐色を呈する。胎土には雲母が混入している。口縁は短く外反し、頂部に直立する口唇部を成形している。接合部の隙間には、沈線が形成される。また、口縁の下側に断面三角形の粘土紐を貼付して、口縁下端の稜を成形している。胴部外面はヘラナデ調整である。8は口径20.1cm、現高5.9cmで、明褐色を呈する。胎土には少量の雲母が混入している。口唇部成型法は7と同様であるが、口縁下側には粘土帯が貼付されず、口縁下端は当初の口縁端の丸みをそのまま留めている。頸部から胴部にかけて、若干屈曲しながら最大径へ向かう器形である。外面はヘラナデ調整が施される。9は須恵器である。現高3.5cm、推定底径17.6cmで、明灰色を呈する。広い底部から、胴部が直線的に開くパケツ形器形で、胴部下端は僅かに面取りされている。胴部に対して、底部は薄く作られている。胴部外面は横方向のヘラケズリ、内面はヘラナデによって仕上げられている。

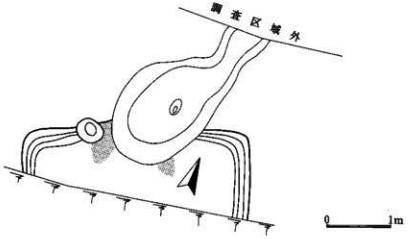
SI 26（第31図）

遺構　B3区の東部に所在する。SI 25の西に隣り合う住居跡である。SI 25同様、南側が農道で破壊され、また、電付近は後世のピットで撹乱されている。竈のある北西壁の長さは3.6mを計る。西コーナーは丸みを持っている。周溝は確認範囲では全周している。柱穴は検出されなかった。竈の状況は、撹乱のために不明である。遺物は検出されなかった。

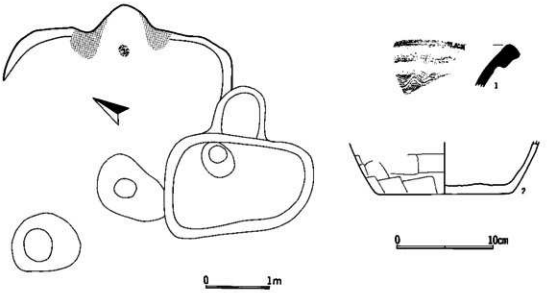
SI 27（第32図）

遺構　B2区の最南端、北部住居跡群の最南端に位置している。南西部は後世のピットによって撹乱を受けている。床面の浅い住居跡で、西側のプランは確認できなかった。ほかの住居跡とは異なり、北東壁に竈が設けられている。北東壁は長さ3.3mである。北コーナーは丸みを持っている。竈の北脇の壁が内側にせり出している。周溝、柱穴は存在しない。竈の遺存状態は不良である。両袖の山砂は壁に接する部分を中心に残されていた。煙道部の張り出しは方は普通だが、燃焼部のピットは特に掘られてはいない。また、燃焼部の焼成面積が小さいので、この住居跡が長期間使用されなかったことを推定させる。

遺物　1・2は甕で、いずれも覆土中から出土した。1は須恵器で、口縁部破片である。暗青灰色を呈する。口縁は比較的長く、穏やかに開いている。口縁端の外側に粘土帯を巻き付けて二重口縁を成形している。その直下には、櫛描き波状文が巡っている。2は現高5.4cm、底径14.3cmで、赤褐色を呈する。パケツ形甕の底部破片である。底部と体部の境は、僅かに調整されて胴部外面は横方向のヘラケズリで調整されている。



第31図　SI 26 遺構実測図



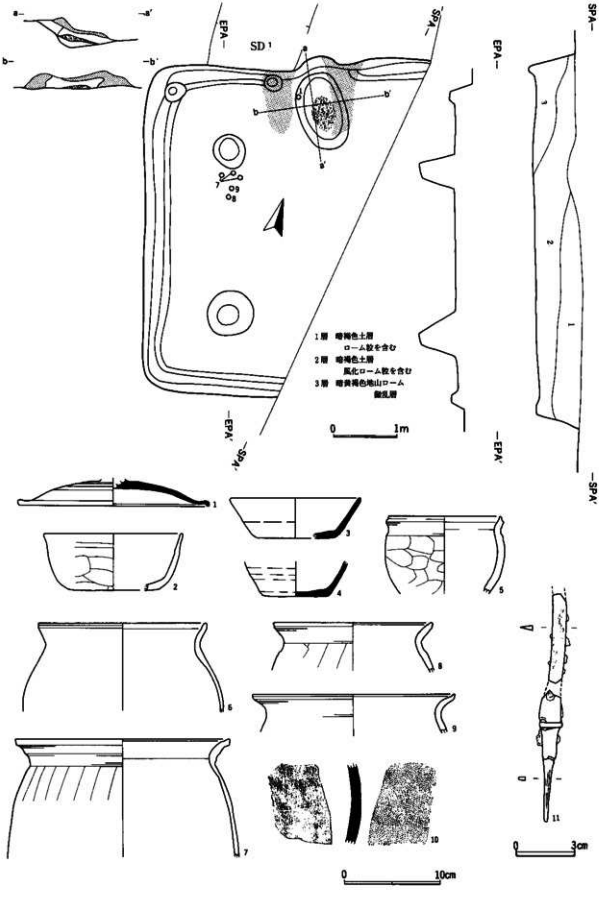
第32図　SI 27 遺構・遺物実測図

SI 28（第33図、図版８、図版14、図版18）

遺構　C2区の南西端に所在し、北部住居跡群の南東端に位置する。東側は調査区外に出ており、西北部の上位はSD 1に切られている。東壁は5.0mを計るが、全体のプランは不明であるが、南壁に対する西壁の開きが90°に満たないので、おそらく台形プランを呈すると考えられる。竈は北壁に設置されている。煙道部は北西コーナーよりも内側に位置している。北壁の煙道形成部は両側とも内側にせり出している。その外側は、西側では壁線は直線的に北西コーナーに達している。東側では緩い弧状に張り出している。周溝は確認範囲では全周している。西壁の周溝は南西コーナー手前で内側にせり出している。柱穴は２か所検出されたが、４か所セットになるものと思われる。北西コーナーの周溝内には小ピットが存在する。竈の遺存状態はやや不良である。両袖は比較的長く延びている。楕円形の船型ピットはほとんど壁面に接している。煙道部の張り出し方は未発達である。西側の袖下からは、心棒ピットが検出された。

遺物　１～４は杯類である。１は須恵器杯蓋で、竈内から出土した。口径20.0cm、現高2.8cmで、明灰色を呈する。ツマミを欠失している。口縁が一旦水平に広がってから、直角に屈折する器形である。天井部から口縁の方へ次第に薄くなり、端部で再び肥厚している。天井部は回転ヘラケズリされ、口縁は横ナデされている。２は覆土中から出土した。口径14.6cm、現高5.9cm、推定底径9.0cmで、赤褐色を呈する。深い体部が余り開かずに立ち上がる器形で、口縁部で若干外反している。底部から体部、口縁へと次第に薄くなっている。底部と体部の境は、面取りされて丸みを帯びている。体部外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキで調整されている。３は須恵器で、覆土中から出土した。口径13.8cm、器高4.2cm、底径8.3cmで、暗褐色を呈する生焼け製品である。胎土には雲母・長石を混入している。底部は外縁が面取りされて丸みを帯び、体部は直線的に大きく開く。口縁は僅かに肥厚している。体部は内外面ともナデ、底部外面もナデ調整で仕上げられている。４は須恵器で、覆土中から採集された。現高3.5cm、底径6.8cmで、明灰色を呈する。胎土に雲母・長石が混入している。底部は小さく、深い体部が直線的に開く器形である。体部外面にはロクロ目がよく残るが、内面はロクロナデによって消されている。底部外面は手持ちヘラケズリで外縁が深めに削られ、厚みを減じている。

５～９は甕である。５は覆土中から出土した。口径11.8cm、現高12.9cmで、赤褐色を呈する。器体の厚みが均質な土器である。口縁は短く、余り開かず、頂部に細い粘土紐を継ぎ足して、直立する口唇部を成形している。頸部のくびれは弱く、胴部は上位に最大径を作り、半球状に底部に至る。口縁から頸部にかけては強く横ナデされ、胴部は横方向のヘラケズリが施されている。６・７は常総型である。６は覆土中から採集された。口径17.6cm、現高7.1cmで、明褐色を呈する。穏やかに開く口縁端の内面に、粘土紐が継ぎ足されて口唇部が成形されている。その際、外側の当初の口縁端と段を生じて、装飾的な効果をもたらしている。胴部は上位に最大径を持ち、腰高の器形になる。胴部外面はヘラナデ調整されている。７は北西柱穴脇の床面直上から、散乱した状態で出土した。口径22.5cm、現高12.0cmで、明褐色を呈する。胎土には少量の雲母が混入している。厚みのある口縁は、口唇部で側面を横ナデされ、下端に稜を生じている。胴部は余り膨らまないで、中位に最大径を持つ器形である。頸部以上は強く横ナデされ、胴部にはヘラケズリが施されている。８は北西柱穴脇の覆土中から出土した。口径16.8cm、現高4.9cmで、赤褐色を呈する。外反する口縁部の頂部に口唇部を成形している。胴部は縦方向にヘラケズリされている。９は常総型で、北西柱穴脇の覆土中から出土した。口径21.4cm、現高4.0cmで、明褐色を呈する。外反する口縁は端部に、直立する口唇部を成形している。その際、口縁下側には粘土帯は貼付されず、口縁下端は当初口縁端の丸



第33図　SI 28 遺構・遺物実測図

みを帯びたままである。内外面ともに横ナデが施される。

10は須恵器甕の胴部破片である。覆土中から出土した。青灰色を呈する最大径付近の部位であるが、外面は同心円文状の当て具痕で充塡され、内面は無文で、ナデ調整が行われている。

11は刀子で、覆土中から出土した。切っ先と中間部を欠いている。関の部分には柄絞め金具が残存している。刃部は摩耗のために、やや内反りしている。茎は完存しており、扁平な断面形を呈する。表面には柄の木質部が付着している。重量8.1ｇである。

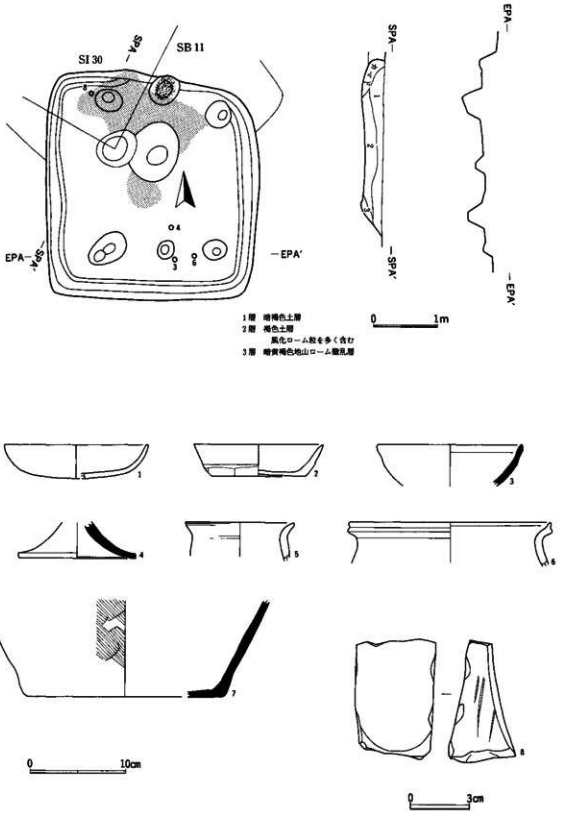
SI 29（第34図、図版９、図版14）

遺構　B2区からB3区にかけて所在する。北部住居跡群の南東に位置し、SI 28の西に隣り合って、SI 30を切っている。また、遺構の中央から竈にかけて、SB 11によって切られている。上辺（東壁）3.1m、下辺（西壁）3.4m、幅3.3mの横転台形プランを示す。北東コーナー及び南東コーナーは丸みを持っている。竈は北壁やや東寄りに設置されているが、竈の西脇の壁面が煙道状に若干袂れており、本来はこの場所に竈が構築される予定であったのかもしれない。周溝は北壁の竈周辺で途切れている。また、西壁の周溝は南西コーナー手前で内側にせり出している。柱穴は壁際に偏して４か所検出された。このうちの１か所には立て替えの痕跡がある。北東・南東柱穴は東壁にごく接近しているが、北西・南西柱穴は西壁からは距離を置いている。このほかに、南壁際やや東寄りの、あたかも竈と対向する位置にはしご穴がある。竈の遺存状態は極めて悪い。竈本体は撹乱で基部から破壊され、床面中央まで山砂が散乱していた。燃焼部には円形のピットが壁面に接して設けられて、煙道部の張り出しはほとんど確認できない。

遺物　１～３は杯類である。１は覆土中から出土した。口径15.0cm、器高3.5cmで、赤褐色を呈する。広い丸底の底部から、浅い体部が内湾しながら立ち上がる器形である。口縁端は単純に丸くなる。厚みは均質で、胴部から底部外面は、弱いヘラケズリが施され、内面はヘラナデされている。２は覆土中から出土した。口径13.6cm、器高3.4cm、底径10.0cmで、赤褐色を呈する。上げ底の広い底部から、浅い体部が直線状に大きく開く盤状杯である。体下半部はケズリが不十分で、厚みがある点が特徴的である。体部内外面はロクロナデ調整されているが、弱いロクロ目が残っている。下端部は幅広くヘラケズリされているが、底部との接合部は面取りされず、稜がはっきり残っている。底部外面は、糸ではなく、紐状の太い原体で切り離した後、周辺をヘラケズリ調整している。３は須恵器杯で、はしご穴脇の覆土下層から出土した。口径15.4cm、現高4.4cmで、青灰色を呈する。丸底の器形で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁基部が強い横ナデによってくびれている。底体部は内外面ともに横ナデされ、ロクロ目が消されている。

４は高杯の脚台部破片で、はしご穴の北、床面直上から出土した。現高3.7cm、台径12.1cmで、明灰色を呈する。脚裾は大きく開いて、末端は直立して稜を形成している。接地面は特に内外面は横ナデされている。

５～７は甕である。５は覆土中から出土した。口径11.4cm、現高3.5cmで、赤褐色を呈する。胴部が余り膨らまず、最大径が口縁にある器形である。口縁端は単純に丸くなっている。口縁部内外面は横ナデされている。胴部は残存範囲ではナデ調整が施されている。６は常総型で、南東柱穴脇の覆土中から出土した。口径21.0cm、現高4.2cmで、明褐色を呈する。胎土には雲母が混入している。短い口縁が外反して、頂部にさらに外反する口唇部を成形している。また、口縁側縁に断面三角形の粘土紐を貼付して、突帯を作り出している。口唇部と突帯間の隙間はそのまま残され、あたかも凹線を巡らせたような効果を出している。



第34図　SI 29 遺構・遺物実測図

内外面とも横ナデされている。7は須恵器で、覆土中から出土した。現高21.0cm、推定底径20.5cmで、暗灰色を呈する。広い底部から、胴部が直線的に立ち上がるバケツ形の器形である。大きさに比べて底部が薄い点が特徴的である。外面は斜めに平行タタキ目が入り、内面はナデ調整されている。胎土には雲母が混入している。

8は砥石で、北西柱穴脇の覆土下層から出土した。長さ6.2cm、最大幅3.5cm、重量85.5gで、黄白色を呈する。正面長方形、側面撥形で、2面の平滑面を持つ。図示した側面には線状擦痕が存在する。

SI 30（第35図、図版9）

遺構　B2区の南東端に所在する。北部住居跡群の南東に位置し、SI 29とSB 11によって大きく切られている。北西壁3.2m、北東壁3.7mであるが、ほかの壁の長さは不明である。北東壁に対する北西壁の開きが90°に満たないので、南西壁を上辺とする横転台形プランを持つ可能性がある。北コーナー及び西コーナーは丸みを持っている。北東壁は外側に張り出し気味で、南西壁は逆に内側にせり出し気味である。竈は残っていないが、おそらく北西壁中央に設置されていたものと思われる。周溝は検出されたが、東コーナー周辺で途絶えている。また、北西壁の周溝は、SB 11のピットに切られた南側で内側に入り込んでいる。柱穴は残存範囲では確認できなかった。遺物は検出されていない。

SI 31（第36図）

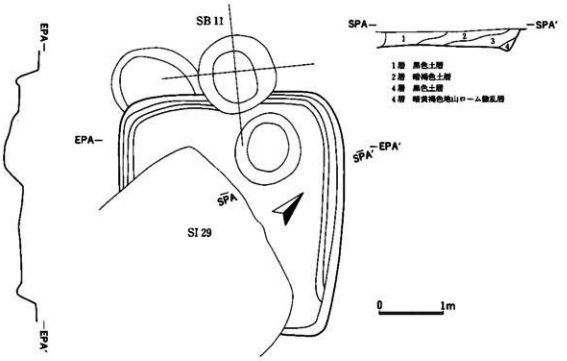
遺構　B2区からC2区にかけて所在する。北部住居跡群中の東に位置し、ほかの住居跡から孤立している。床面の浅い遺構で、確認面を露出したときには、既に壁が削除されていた。一部残っていた床面硬化面と焼けて赤変した竈燃焼部の存在から、竪穴住居跡と判断した。北西壁に竈を持っていた住居跡で、竈燃焼部のローム面は火を受けて赤変している。その南側に、床面の一部と思われる硬化面が残存していた。硬化面に接して小ピットが存在するが、はしご穴の可能性がある。周溝、柱穴に相当するピットは検出されていない。

遺物　いずれも覆土中から出土した。1は杯で、口径16.7cm、現高4.6cmで、赤褐色を呈する。体部は直線的に開いて、上位で弱く屈折する器形となる。体部外面は横方向にヘラケズリされ、口縁付近は強く横ナデされている。

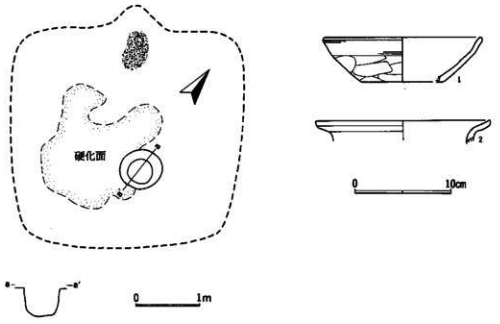
2は甕で、口径18.3cm、現高2.4cmで、赤褐色を呈する。外反する口縁の下側に薄い粘土帯を貼付して、口縁の厚みを増すとともに、下端に稜を形成している。頸部は屈曲せずに、直立気味に立ち上がる器形である。内外面とも横ナデされている。

SI 32（第37図、図版8、図版14）

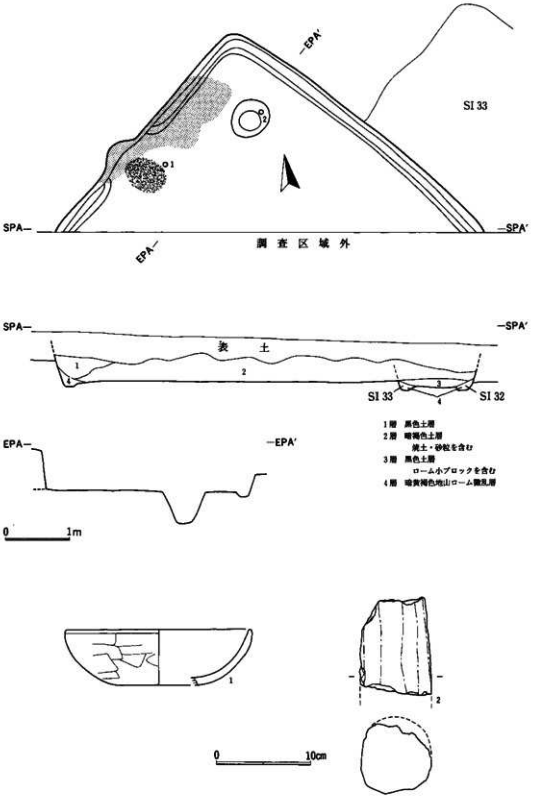
遺構　調査区南部のA4区の南東寄りの地点に所在する。南半は調査区外に出ている。また、東側でSI 33を切っている。北西壁4.2m以上、北東壁5.1m以上の規模を持つ。竈は北西壁に設置されている。北西壁はほぼ直線状だが、調査区限界付近でやや外側に張り出している。周溝は確認範囲では全周している。柱穴は北コーナー付近で1か所が検出された。竈の遺存状態は不良である。本体は崩壊して、北西方向に山砂が流れていた。燃焼部には明瞭なピットが認められず、床面が焼けて赤変していた。煙道部の張り出しは未発達である。



第35図　SI 30 遺構実測図



第36図　SI 31 遺構・遺物実測図



第37図　SI 32 遺構・遺物実測図

遺物　1は杯で、竈内から出土した。口径19.8cm、現高5.8cm、推定底径9.0cmの大型品で、明褐色を呈する。面取りされた底部から、浅い体部が内湾しながら立ち上がる器形である。器体の厚みは均質で、体部外面は横方向に粗くヘラケズリされ、内面はナデ仕上げされている。

2は土製支脚で、柱穴上の床面直上から出土した。長さ10.0cm、最大径7.2cmで、明褐色を呈する。かなり長期間火を受けた遺物で、内側には細かな亀裂が夥しく入っている。両端を欠いている。断面観察からは、1本の粘土棒を芯材にして、周囲にさらに粘土を巻き付けて成形したものと縦方向にヘラケズリで整形した痕跡がはっきり残っている。

SI 33（第38図、図版8、図版14）

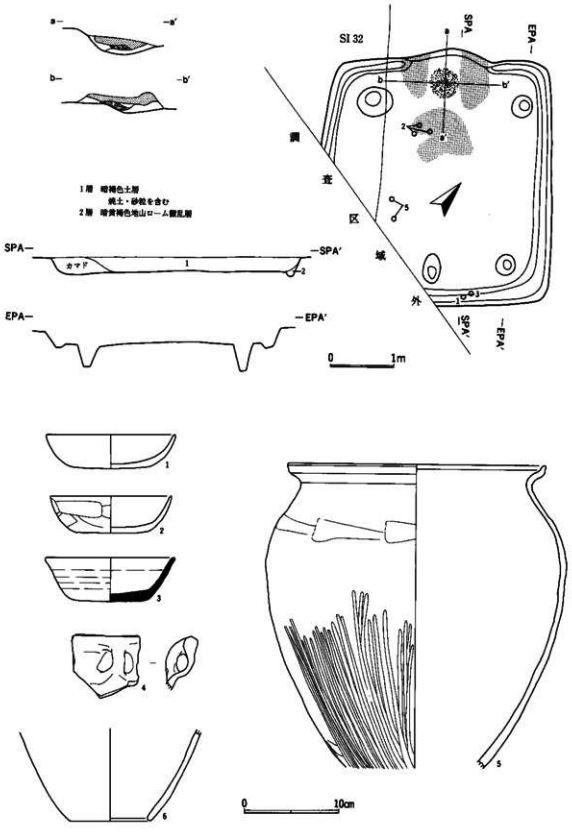
遺構　A4区の南東部に位置し、南コーナーを中心に調査区外へ出ている。また、SI 32によって南西の一部が撹乱されている。竈は北西壁中央に設置されている。上辺3.3m、下辺不明、幅3.8mの台形プランを示しているが、北西壁の北側煙道形成部がやや内側にせり出しており、そこから北コーナーに至るまでが弧状に張り出している。周溝は確認範囲では全周している。柱穴はコーナー付近に偏して3か所検出された。西柱穴は規模がやや大きい。北コーナーにおそらく、もう1か所存在し、4か所セットになると思われる。このほかに、南東壁際中央にはしご穴が存在する。竈の遺存状態は不良で、竈手前の床面に山砂が散乱していた。両袖下半部が残存し、その張り出し方は普通で、燃焼部にはピットは確認できず、床面が焼けて赤変していた。煙道部の張り出しは弱い。

遺物　1～3は杯である。1は南東壁際の覆土中から出土した。口径13.6cm、器高3.5cm、底径7.8cmで、暗褐色を呈する。面取りされ、周縁が丸くなった広い底部から、浅い体部が湾曲しながら立ち上がる器形である。内外面ともヘラナデによって仕上げられている。底部外面はナデ調整である。2は竈正面の床面直上から、破片が散乱した状態で出土した。口径12.6cm、器高3.8cm、底径6.0cmで、赤褐色を呈する。器形は1と似るが、やや体部が深く、底部に厚みがある。体部外面は横方向に粗くヘラケズリされ、内面はヘラナデされている。底部外面はヘラナデ仕上げである。3は須恵器で、南東壁際の覆土下層から出土した。口径13.6cm、器高4.6cm、底径7.3cmで、明灰色を呈し、胎土には雲母・長石が混入する。底部周縁は面取りされて丸みを持ち、体部が直線的に開く器形で、口縁は僅かに外反している。底部には厚みがある。内外面ともにロクロナデ調整されるが、外面にはロクロ目が残されている。底部外面は手持ちヘラケズリで調整される。

4は内耳鍋の内耳部分である。覆土中から出土した。現高5.6cmで、明褐色を呈する。口縁内面直下に短い粘土紐を貼り付けて把手としている。口縁は端部が極端に厚く作られ、直下の把手の部位が外方に膨らんでいる。口縁は横ナデされ、体部外面はナデ、内面はヘラナデ調整である。胎土には雲母が混入する。

5は常総型の甕で、中央南寄りの覆土中から出土した。口径27.3cm、現高31.2cmで、赤褐色を呈し、胎土には雲母が混入する。口縁は短く開いて、頂部にさらに外反する口唇部を成形している。胴部最大径はかなり上位にあり、腰の高い器形となる。頸部から胴部にかけては、装飾的な横方向のヘラケズリが一巡し、胴部外面はヘラナデの後、下半部が細い工具によって縦方向にヘラミガキされている。

6は甑で、覆土中から採集された。現高9.6cm、底径8.5cmで、赤褐色を呈する。下端部は単純な面をなして、内削ぎはされていない。胴部外面はヘラナデ仕上げである。



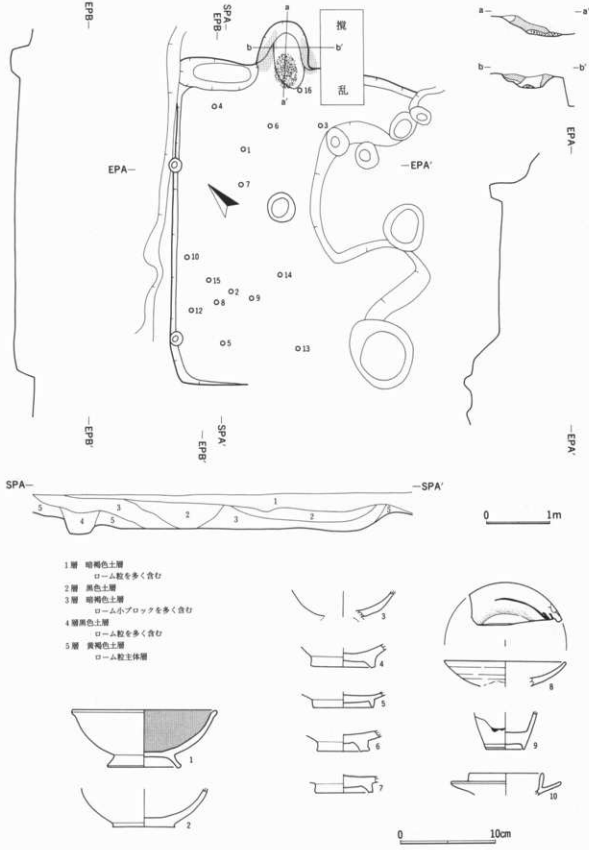
第38図　SI 33 遺構・遺物実測図

SI 34（第39図、第40図、図版14、図版18）

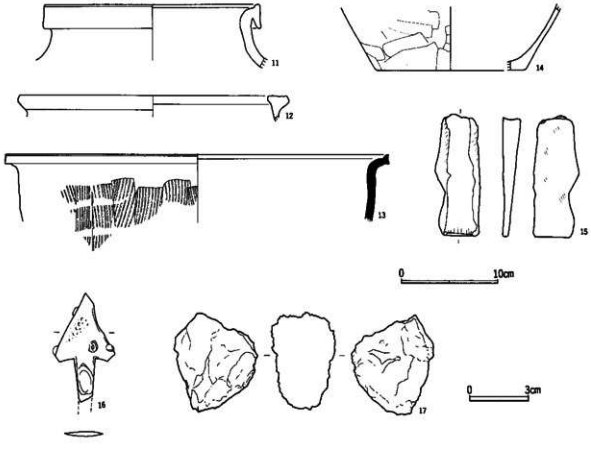
遺構　調査区最南端の住居跡で、A5区からB5区にかけて所在する。台地傾斜面に立地し、東側は後世の遺構によって大きく撹乱を受けている。北西壁の規模がかろうじて判明し、4.7mの長さである。竈は北東壁やや北寄りに設置されている。この北西壁は竈の南側では、やや内側に入り込んでいる。周溝は確認されなかったが、あるいは、北西壁際の竈の北側部分に存在する長楕円形ピットが、周溝に相当する遺構かもしれない。柱穴は保存状態の良好な北西側には存在しない。北西壁上に2基の小ピットが確認されたが、本来この住居跡が伴っていた施設の可能性がある。竈の遺存状態は不良である。両袖部の張り出しは極めて短い。燃焼部には浅い船型ピットが壁面に食い込んで掘られており、煙道部の張り出しはこの遺跡としては大きい。

遺物　1～7は高台付きの椀である。1は竈手前の覆土下層から出土した。口径15.0cm、器高6.1cm、台径6.1cmで、明褐色を呈し、内面は黒色処理されている。胎土にはスコリアが目立つ。椀形を呈し、体部が内湾しながら立ち上がり、口縁が外反する。台部は径が大きく、裾が大きく外反気味に開いて、接地部は平面化している。台部の平面形は正円ではなく、歪んでいる。体部内外面ともに、手持ちでヘラナデされている。底部外面には回転糸切り痕が残る。2は西コーナー寄りの覆土中から出土した。現高3.9cm、台径6.4cmで、赤褐色を呈し、胎土は精緻である。椀形の底部に、扁平な円盤を貼り付けて、台部とした器形である。体部内外面はロクロナデ調整され、台部底面は回転糸切り後、無調整である。体部下端には、円盤を貼り付けた際に、粘土を引き延ばしたヘラ痕が残る。3は竈手前の覆土下層から出土した。現高2.7cmで、赤褐色を呈する。胎土は1と似て、スコリアが多い。口縁で外反する器形である。口縁付近は器壁が急激に薄くなる。内外面ともに手持ちヘラナデ調整されている。4は北コーナー付近の覆土下層から出土した。現高2.4cm、台径6.8cmで、乳灰色を呈し、内面が黒色処理されている。胎土は精緻である。体部外面はロクロナデ、内面は条痕状のヘラミガキで充填されている。底部外面には回転糸切り痕が残っている。高台は太く、短い。外見は直立するが、内面は八字状に開いている。台裾の接地面は広く面取りされている。5は陶器で、西コーナー付近の覆土中から出土した。現高1.6cm、台径6.4cmで、灰白色を呈する。高台は裾に向かうにつれ細身になり、ほぼ直立する。狭い接地面は無調整である。体部内外面ともロクロナデされている。底部外面は回転ヘラケズリで調整されている。底部内面には、白色自然釉の飛沫が付着している。6は竈手前の覆土中から出土した。現高2.2cm、台径5.6cmで、赤褐色を呈する。胎土には微細な雲母粒が混入している。高台は太く、短い。外見は直立するが、内面は八字状に開いている。付け根の内側には、細い工具で締め付けた痕跡が巡っている。接地面は非常に広く、その中央には沈線が1条巡っている。平面形は、楕円に近く歪んでいる。底部内面はナデの後に、条痕状にヘラミガキされている。底部外面はヘラケズリで調整される。7は床面残存部中央付近の、覆土中から出土した。現高1.8cm、台径6.2cmで、明褐色を呈し、胎土には微細な雲母粒が混入する。底部内面は黒色処理されている。高台は太く、短い。外見は直立するが、内面は八字状に開いている。接地面には幅広い沈線が巡っている。平面形は歪んでいる。底部内面はナデの後、条痕状にヘラミガキ調整される。底部外面にはヘラケズリの痕跡がある。

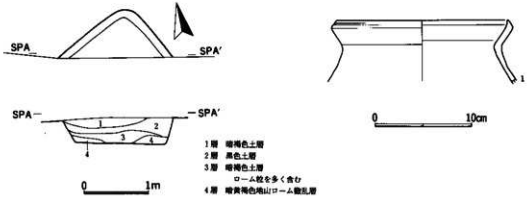
8・9は肥前染め付けである。8は皿で、西コーナー寄りの覆土中から出土した。口径12.8cm、現高2.5cmである。底部から口縁へ、次第に器壁が薄くなる。口縁端は丸く仕上げられている。内面外周には藍色の条線が下絵付けされ、底部を除く内外面に、青白色を帯びた釉薬がかかっている。釉のかかり方から、台部をつかんで漬け掛けたものと思われる。9は高台付きの碗利で、西コーナー寄りの覆土中から出土



第39図　SI 34 遺構・遺物実測図



第40図　SI 34 遺物実測図(2)



第41図　SI 35 遺構・遺物実測図

した。現高3.9cm、台径4.0cmである。体部から台部のラインは直線的で、底部に厚みのある点が特徴的である。高台の接地面は小さい。体部外面には対照的な位置に２か所、何らかの文様があり、高台外面には２条の条線が巡っている。すべて藍色で下絵付けされている。青白色を帯びた釉薬が、内外面とも全体にかかっているが、高台の接地面のみ釉がかかっていない。

10は受け皿付きの燈明皿で、北西壁際の覆土中から出土した。口径9.0cm、受け皿口径11.5cm、現高2.2cmである。暗褐色を呈し、胎土は緻密である。全体的に薄手に作られており、油溜まりは直立し、受け皿は大きく開いている。端部はいずれも丸く仕上げられている。横ナデ調整が主体だが、底部外面の中心部はヘラケズリされている。受け皿内面は煤が付着している。

11・12は常滑製の甕である。11は覆土中から出土した。口径22.6cm、現高5.8cmで、暗茶褐色を呈し、外面は光沢がある。口縁は大きく外反して二重口縁となる。二重口縁の幅広い側面はほぼ直立し、下半が僅かに外に開く。口唇直下の内面には、粘土帯接合の際に生じた沈線が明瞭に残っている。口縁部は横ナデ、頸部両面はヘラナデされている。胎土には白色の小礫が混入している。12は北西壁際の覆土中から出土した。口径27.8cm、現高2.6cmで、茶褐色を呈し、内外面とも光沢がある。胎土には白色の小礫が混入している。口縁は幅広い水平面が形成され、その面上には、粗い櫛状具で調整されたために、３条の沈線が同心円状に周回している。頸部以下は口縁に比べ、著しく薄くなる。

13は須恵器甕で、南西壁際の覆土下層から出土した。口径42.0cm、現高9.8cmで、暗灰色を呈する。短い口縁が大きく開いて、端部に粘土紐を継ぎ足して二重口縁を形成する。二重口縁は側面からの強い横ナデで本体と密着している。接合部の上面は指先で横ナデ調整されるが、下面は無調整である。胴部は膨らまずに、バケツ形の器形となる。胴部外面には縦方向の平行タタキ目が施されている。14は甕で、床面中央から西寄りの覆土下層から出土した。現高6.7cm、推定底径15.0cmで、赤褐色を呈する。バケツ形の大きな底部から、胴部が直線的に立ち上がっている。胴部外面の下端部は、横方向にヘラケズリされている。底部外縁はヘラケズリによって僅かに面取りされている。

15は素焼きの瓦で、北西壁寄りの覆土中から出土した。丸瓦の破片で、現長15.0cmを計り、赤褐色を呈する。末端部から基部へ行くほど、厚みを増している。外面は布目をナデで消去し、内面は横方向のヘラナデが見られる。胎土には微細な雲母粒が混入している。

16は鉄鏃で、鏃脇の覆土中から出土した。現長5.7cm、重量10.6ｇである。有茎三角鏃で、返しがあるが、両端とも欠失している。刃部の１辺は磨滅しており、転用されていたことを窺わせる。

17は鍛冶滓で、覆土中から採集された。重量44.4ｇである。

SI 35（第41図）

遺構　調査区の西端、A4区の南西部に位置し、大半が調査区外に出ている。検出されたのは北コーナー付近である。住居跡覆土は人為的埋土を示している。調査範囲では周溝は伴っていない。

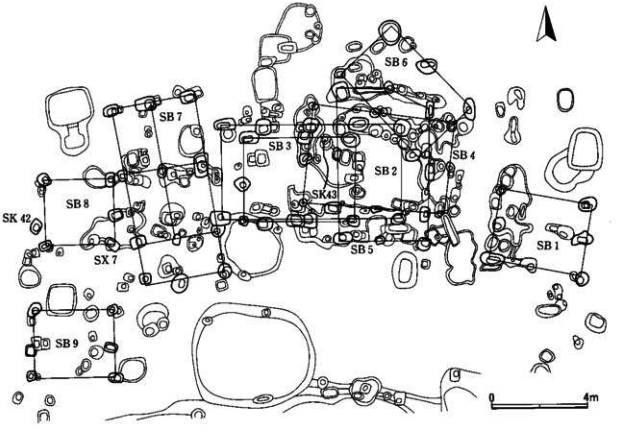
遺物　１は甕で、覆土中から出土した。口径18.0cm、現高6.3cmで、赤褐色を呈する。口縁の開きは小さく、その端部内側に断面三角形の、内傾する口唇部を作り出している。口唇部周辺は粘土紐を密着させるために、内外面とも強く横ナデされている。胴部外面はヘラケズリされている。

2　掘立柱建物跡と出土遺物（第２図、第42図）

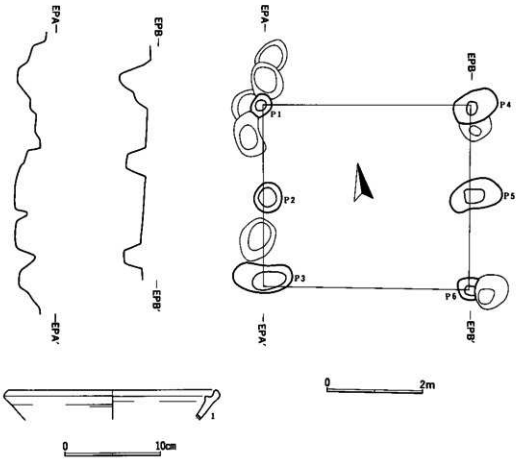
調査区中央部からは、12棟の掘立柱建物跡群が検出された。北側に点在するSB 10・SB 11・SB 12はB2区南部からB3区北部にかけて分布し、南側に密集するSB 1～SB 9はB3区中央部に集中している。前者は遺跡の所在する舌状台地のほぼ中央、後者は南側斜面寄りに、やや偏して位置している。両群は建物方位と柱穴プランを異にしており、時期や性格の相違が考えられる。なお、南側密集域には柱穴列を取り込むように、10～20cm程の浅い落ち込みが検出されたが、建物に対しては部分的であり、プランも規格性が認められない。このほか、この周辺には、建物の構成要素にならない柱穴状小ピットが少なからず存在する。また、既述のように、竪穴住居跡はこれらの掘立柱建物跡群の外縁に分布している。

SB 1（第43図）

遺構　南側の密集群中の東端に位置し、孤立している。柱配置は１間×２間で、桁行4.3m、梁行3.8mの規模である。建物方位はN－7°－Eである。P１からP２にかけて、浅い皿状の落ち込みが掘られ、そ



第42図　掘立柱建物跡集中地区



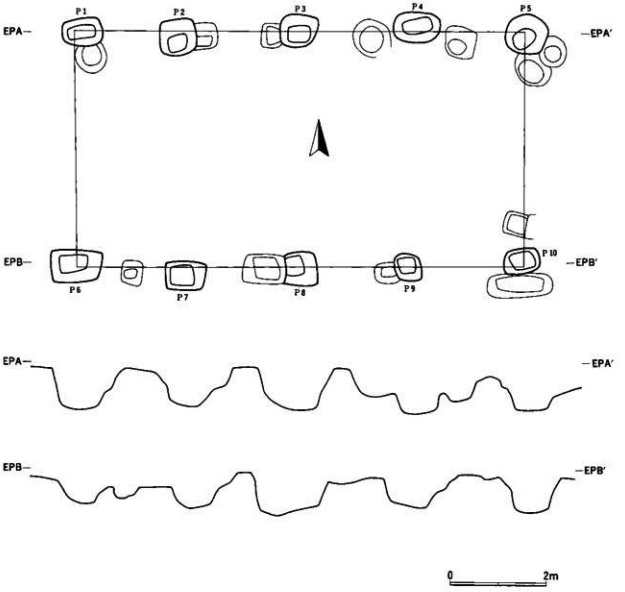
第43図　SB 1 遺構・遺物実測図

の中にＰ１も含めて、柱穴状ピットが並んでいる。また、Ｐ４・Ｐ５も同様なピットと重複しているので、少なくとも１回の立て替えは想定できる。柱穴プランはＰ２は円形となるが、ほかは不整楕円形が多く、深さは遺構確認面から30～40cm掘り込まれている。

遺物　１は遺構確認面の精査中に出土した。古瀬戸の擂鉢の口縁破片である。推定口径21.7cm、現高3.1cmを計る。内外面ともに、表面は暗褐色を呈するが、胎土は明黄灰色である。体部は直線的に大きく開いて、口縁端の内側とその直下に粘土紐を周回させ、断面蒲鉾形の口唇部と突帯を作り出している。内外面とも横ナデ調整で、口縁外側には鈍い稜が形成される。15世紀後半に比定される。

SB 2（第44図）

遺構　南側密集域の中心に所在し、SB 3～SB 6と重複している。本調査区中、最大規模の建物跡である。柱配置は１間×４間で、桁行9.4m、梁行4.9mを計る。建物方位はN－0°で、正南北（座標値）に面している。建物の東側はほかの建物と重複するので、多くの柱穴が混在しているが、西側柱穴のＰ１・Ｐ２にも重複が見られるので、立て替えをしていると思われる。柱穴プランはＰ１・Ｐ４・Ｐ６・Ｐ７・Ｐ10

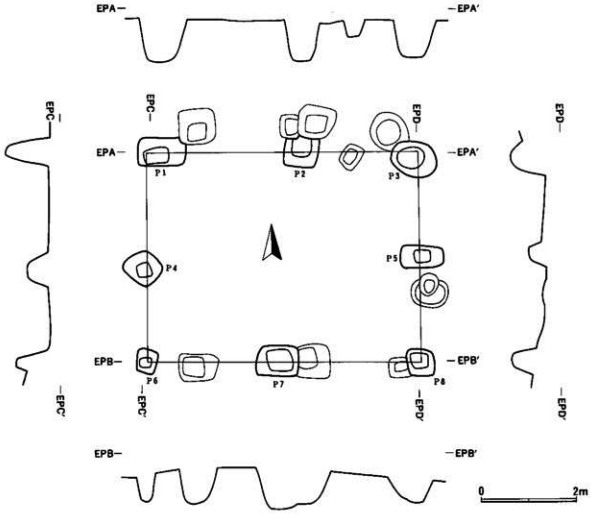


第44図　SB 2遺構実測図

等、略長方形が主体的である。その深さはP 1が25cmと浅いが、ほかは40cm前後である。出土遺物はまとめて後述する。

SB 3（第45図）

遺構　南側密集域の中央に位置し、SB 2・SB 4・SB 5と重複している。柱配置は2間×2間であるが、P 2の位置はやや東に偏している。桁行5.8m、梁行4.4mを計る。建物方位はN－0°を示し、正南北に面している。本遺構は建物方位を同じくするSB 2に包囲されているので、各柱穴が接近もしくは重複して

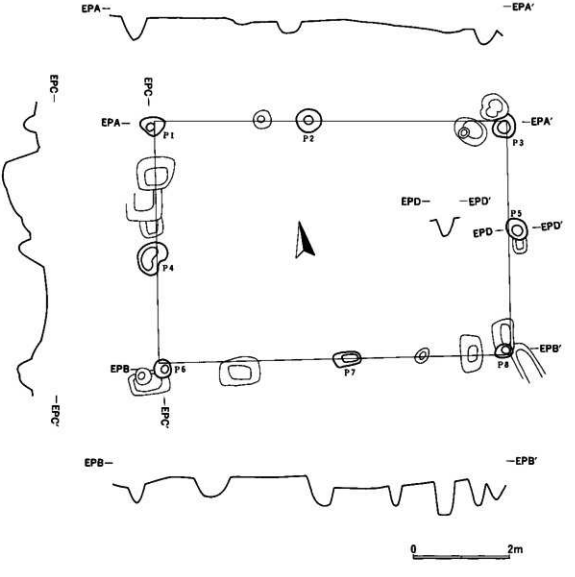


第45図　SB 3 遺構実測図

いる場合が多い。P1～P3、P7・P8がそれに該当する。したがって、多くの柱穴の重複現象を、そのまま建物の建て替えと結びつける訳には行かない。柱穴プランはP1・P2・P5・P7等、略長方形が中心であり、P4・P6・P8も略方形を呈している。柱穴の深さはP4・P5が20cmと浅いが、ほかは30～40cmの間である。出土遺物はまとめて後述する。

SB 4（第46図、図版9）

遺構　建物密集域の東側に位置し、SB 2・SB 3・SB 5・SB 6と重複している。柱配置は2間×2間で、桁行7.4m、梁行5.0mを計る。建物方位はN－7°－Eを示し、SB 1と一致する。柱穴プランはP2・P3・P5・P6・P8等、円形が中心になる。柱穴の重複はP3・P5・P6・P8に見られるが、P5・P6・P8の重複分は長方形プランであり、ほかの建物に関係する遺構である。したがって、本遺構は建

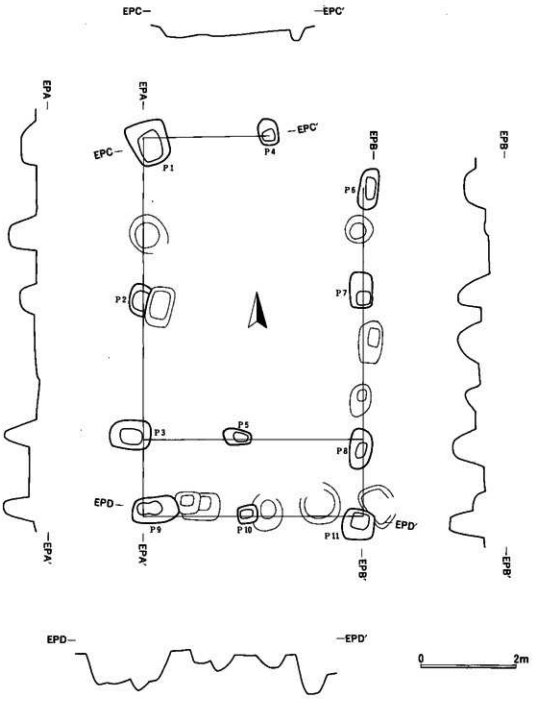


第46図　SB 4 遺構実測図

て替えされていない、と考えたい。柱穴の深さは僅かな傾斜地に立地しているが、P 2 が23cmで浅く、P 1 が40cmで深いほかは、30cm前後でまとまっている。出土遺物はまとめて後述する。

SB 5 （第47図、第48図、図版9 、図版18）

遺構　建物密集域の東側に位置し、SB 2 ・SB 3 ・SB 4 ・SB 6 と重複している。SB 7 とともに庇付き建物跡である。庇は南面する梁行に取り付けられ、建物の正面を示唆している。母屋の柱配置は 2 間×2 間であるが、変則的である。梁行P 1 －P 4 と桁行P 8 －P 7 との延長上の交点に、あるべき柱穴が存在しない。それに代わって、その交点より南にずれた位置にP 6 が掘られている。これらの柱穴を棄直に結



第47図　SB 5　遺構実測図

ぶと、一角の欠けた長方形プランの建物が復原されるが、現実的ではない。何らかの理由によって、あるべき位置からずれた場所に柱穴が掘られたが、実際に建てられたのは、桁と梁が直行する普通の長方形プランの建物であろう。桁行6.2m、梁行4.6mの規模で、此行は1.6m、全長は7.8mである。建物方位はN－90°である。柱穴プランはP3・P5・P6～P9等、略長方形が中心になり、残りの柱穴も略方形を呈している。柱穴の深さはP1・P4の25cmからP11の78cmまでばらつきがあって、一定していない。母屋部分の各柱穴は、P2のみが重複を示しているので、建て替えは行われなかったと思われる。

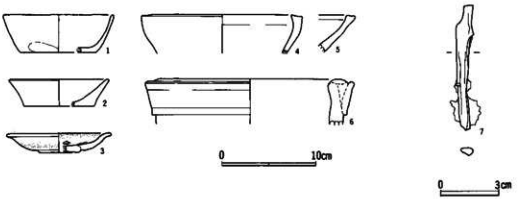
遺物　SB 2～SB 5の遺構検出面精査の際に、遺物が出土した。

1は土師器杯で、口径11.4cm、器高2.8cm、推定底径8.0cmで、赤褐色を呈する。広い底部から、内湾気味に体部が立ち上がる器形である。底部と体部との境の稜はほっきりと残っている。体部内外面はロクロナデ調整によって、ロクロ目が消されている。底部外面は回転糸切り後、ヘラケズリによって調整されている。なお、体部下端は部分的にヘラケズリされ、厚みと器形を調整している。2はカワラケ皿で、口径10.0cm、器高2.8cm、推定底径7.3cmで、赤褐色を呈する。面取りのされない底部から、浅い体部が直線的に大きく開く器形で、底部から口縁へと器体は急激に薄くなる。口唇部は僅かに面取りされて、平坦面を形成している。体部内外面ともにロクロナデ調整され、底部外面は回転糸切り無調整である。3は灰釉の台付き皿である。口径10.8cm、器高2.0cm、台径4.3cmで灰白色を呈する。厚みのある器体にめり込むように、扁平な高台が貼付されている。大きく開いた体部は、口縁でさらに水平に延びている。高台は粘土円盤を素材にしたもので、周縁を残して浅く削りだして脚部調整している。体部は内外面ともにロクロナデ調整されているが、底部外面は台部周辺を回転ヘラケズリしている。内外面に淡緑色の釉薬がかかっている。また、内面の2か所には、焼成時のトチリ付着痕が残っている。古瀬戸製の腰折皿と呼ばれる器種で、15世紀後半に比定される。4は内耳鍋で、推定口径14.8cm、現高4.2cmで、外面は暗褐色、内面は赤褐色を呈する。直線的に開いた体部は屈折して口縁部となる。口縁端内側に断面三角形の突帯を成形して蓋受けとしている。蓋受け部分は強く横ナデされ、先端が尖っている。内外面ともに横ナデ調整されている。胎土には雲母が多量に混入している。5は灰釉の深皿の口縁部破片である。直線的に開いた体部は僅かに屈折して口縁部となる。口唇部は僅かに外反し、その内側に突帯を設けて蓋受けを成形している。端部はいずれも丸みを持っている。内外面とも横ナデ仕上げだが、外面にはロクロ目が残っている。胎土は灰白色を呈し、内外面ともに淡黄灰色の釉薬がかかっている。古瀬戸製の折縁深皿で、15世紀前半に比定される。6は常滑製の甕である。口径18.2cm、現高4.8cmで、暗褐色を呈する。肥大して直立する口縁に、幅広い粘土帯を巻き付け、二重口縁としている。口唇部は丸く調整され、口縁帯よりも上位に突出している。内外面ともに横ナデされている。15世紀後半に比定される。

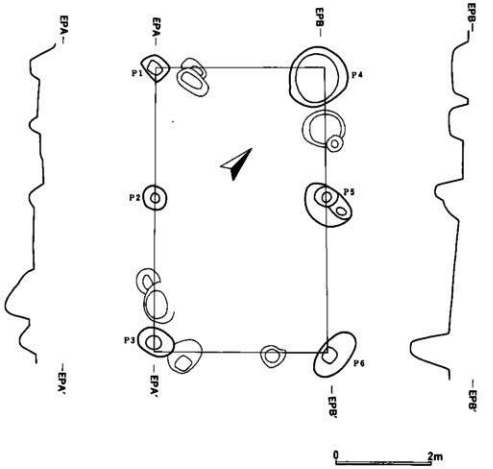
7は鉄器片で、錆が進行し、原型を留めていない。図示した上部の断面形は扁平な長方形で、下部のそれは正方形に近くなっている。中位よりやや下部に段差があり、その部分にはかすかに糸を巻き付けた痕跡が残っている。鉄鏃であろうか。現長6.6cm、重量12.0gである。

SB 6（第49図、図版9）

遺構　建物密集域の東側に所在し、南側建物群中最北に位置する。SB 2・SB 4・SB 5と重複している。柱配置は1間×2間であるが、桁行の中柱は僅かに西にずれている。桁行5.9m、梁行3.6mの規模である。建物方位はN－43°－Eを示している。柱穴プランは統一がなく、略円形がP2・P4、楕円形がP3・P



第48図　SB 2～SB 5　周辺出土遺物実測図



第49図　SB 6　遺構実測図

5・P6、不整方形がP1である。このうち、P4の規模が格段に大きい。深さはP6が78cm、P5が60cmと深いが、ほかは35cm前後でまとまっている。柱穴の重複はP3・P5に認められるだけであり、建て替えはなかったものと思われる。なお、遺物は検出されなかった。

SB 7（第50図、図版15）

遺構　建物密集域の西側に位置し、SB 2の南西角と接触している。SB 5とともに庇付き建物跡である。庇は南面する梁行に取り付けられ、建物の正面を示唆している。母屋の柱配置は2間×2間の総柱造りで、桁行6.8m、梁行4.1m、庇行2.1mを計り、全長8.9mの規模を有する。建物方位はN－78°－Eである。柱穴プランはP1・P3・P4・P6・P8等、略長方形が中心で、P2・P10等の略方形、P9・P11・P12等の不整円形が混在している。立地面はやや南に傾斜し、柱穴の深さは北で深く、80cm前後を計り、南に行くにつれ浅くなり、庇部分では35cm前後になっている。また、P3・P5・P10以外の柱穴は重複しているので、建て替えを一度していると思われる。

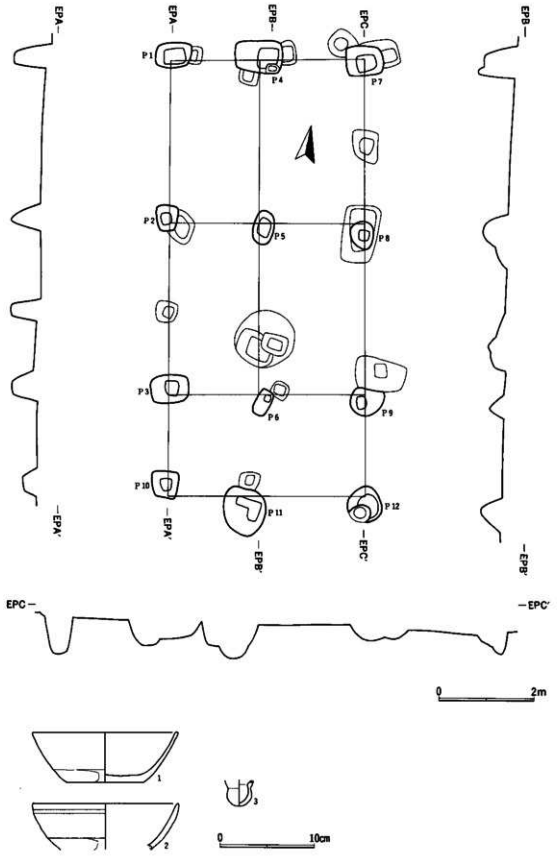
遺物　遺構確認面の精査中に出土した。1は土師器杯で、口径15.3cm、器高5.1cm、底径8.2cmを計り、赤褐色を呈する。体部が内湾しながら開く器形で、底部の厚みに比べて、体部は薄い。底部と体部の境は面取りされず、稜が明確に残っている。体部は両面ともロクロナデされ、下端部はヘラケズリされている。底部外面は糸切り後、回転ヘラケズリ調整されている。2は土師器杯で、推定口径15.4cm、現高4.8cmで、暗褐色を呈する。体部は内湾しながら、穏やかに開く器形である。口縁は体部に比べて厚みがあり、それを散らすために、口縁部は強く横ナデされている。体部両面はロクロナデ調整されている。体部下端にはヘラケズリが入る。3は丸底壷形ミニチュア土器で、現高2.7cmを計り、明褐色を呈する。丸底で、球形の胴部を持ち、頸部から口縁が直線的に開く器形で、口唇部を欠いているが、破損部でやや立ち上がり気味になっている。最大径は口縁にある。全体にナデ調整され、器壁の厚みも配慮されている。胎土は精選されている。

SB 8（第51図、図版17）

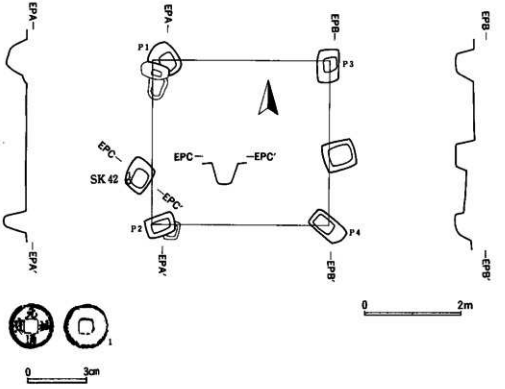
遺構　SB 9とともに、建物密集域の西端に位置し、北東角がSB 7と接近している。柱配置は1間×1間で、3.4m×3.6mの規模である。P1－P2間にSK 42、P3－P4間に同様な柱穴状ピットが存在するが、両ピットとも南に偏しており、特にSK 42は梁行軸線上からはずれているので、本遺構の柱穴とはみなさなかった。建物方位はN－0°で、正南北（座標値）に面している。この方位はSB 2・SB 3・SB 5と一致している。柱穴のプランは略長方形で、深さは35cm～42cmの間である。柱穴の重複はP1・P2に認められるが、建て替えの有無は不明である。

遺物　SK 42の遺物について、ここで記述しておく。SK 42は42cm×60cmの不整方形プランを示す柱穴状ピットで、深さは44cmを計る。

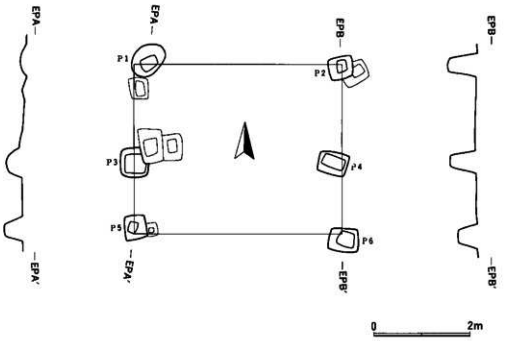
1は青銅銭の元祐通宝で、覆土下層から出土した。全体に緑青がかかり、遺存状態は比較的良好である。陽鋳された文字が明瞭に拓出された。直径2.3cm、厚さ2.0mmである。北宋の哲宗が1,086年に初鋳した銭貨である。



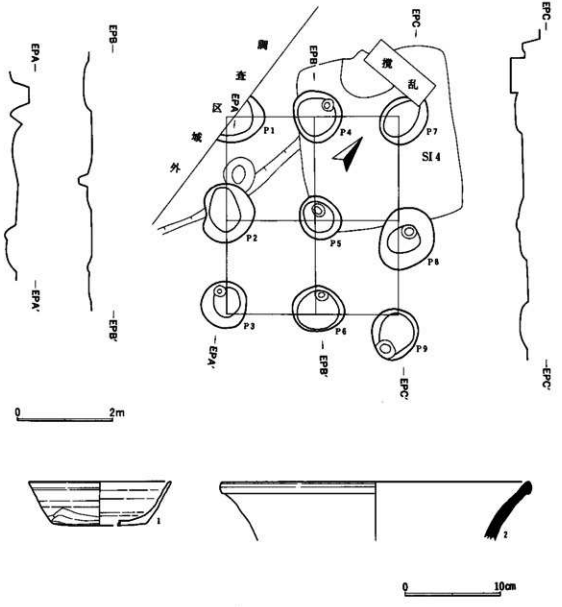
第50図　SB 7 遺構・遺物実測図



第51図　SB 8・SK 42 遺構・遺物拓影図



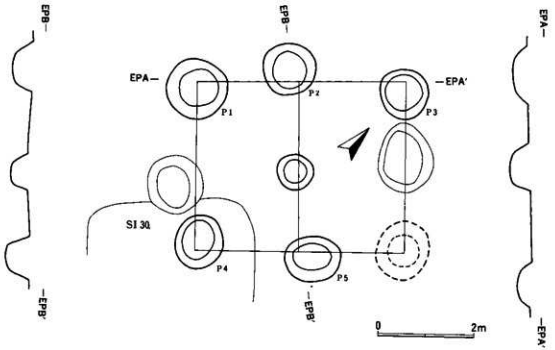
第52図　SB 9 遺構実測図



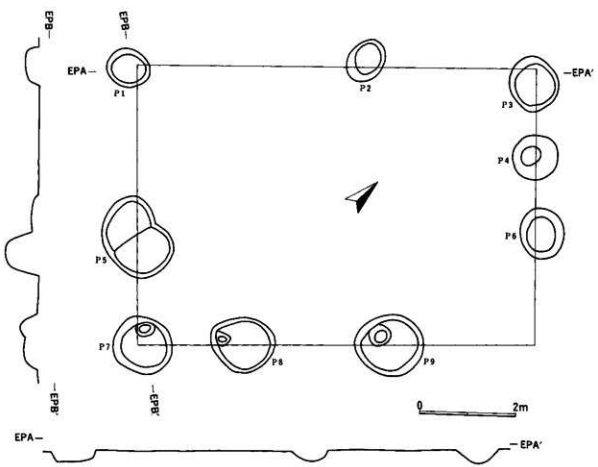
第53図　SB 10 遺構・遺物実測図

SB 9（第52図）

遺構　建物密集域の南西端に位置し、ほかの建物とは孤立している。柱配置は１間×２間で、桁行4.4m、梁行3.6mの規模を有する。梁中柱のＰ３・Ｐ４は、やや南に偏している。建物方位はＮ－1°－Ｗである。柱穴プランはＰ２・Ｐ３・Ｐ５・Ｐ６が略方形を呈し中心的で、Ｐ４が略長方形、Ｐ１は不整円形となる。深さはＰ１が15cmと格段に浅く、ほかの柱穴も32cm～62cmの間でまとまりがない。Ｐ２・Ｐ３・Ｐ５で重複が見られるが、建て替えの有無は不明である。遺物は検出されなかった。



第54図　SB 11 遺構実測図



第55図　SB 12 遺構実測図

SB 10（第53図、図版9、図版15）

遺構　B3区の北西部、掘立柱建物群密集域の北側に散在する1棟で、西角が調査区外に出ており、北側でSI 4を切っている。柱配置は2間×2間の総柱造りで、4.0m×3.6mの規模を有する。P 8とP 9はやや南東にずれている。建物方位はN－40°－Eである。P 3～P 6、P 8・P 9において、柱痕がよく残っていた。柱穴プランは不整円形である。その深さはP 6が6cmと最も浅く、P 1が40cmと最も深いが、ほかは20cm前後でまとまっている。P 2以外は重複が見られないので、建て替えはなかったものと思われる。

遺物　遺構確認面の精査中に出土した。

1は土師器杯で、口径14.8cm、器高4.5cm、底径10.4cmで、赤褐色を呈する。広い底部から、直線的な体部が穏やかに立ち上がる器形で、体部の器壁は薄い。底部と体部の境は面取りされずに稜を残している。体部内外面は強いロクロ目が残り、下端はヘラケズリで調整される。底部外面は静止糸切り後、周辺を手持ちヘラケズリしている。2は須恵器甕で、推定口径32.4cm、現高6.1cmで、青灰色を呈する。長い口縁を有するタイプで、外反しながら穏やかに立ち上がる口縁が、端部で二重口縁を形成する器形である。口縁端の外側に粘土帯を巻き付けて、下端に稜を伴う二重口縁を作り出している。内外面とも横ナデ調整されている。

SB 11（第54図、図版10）

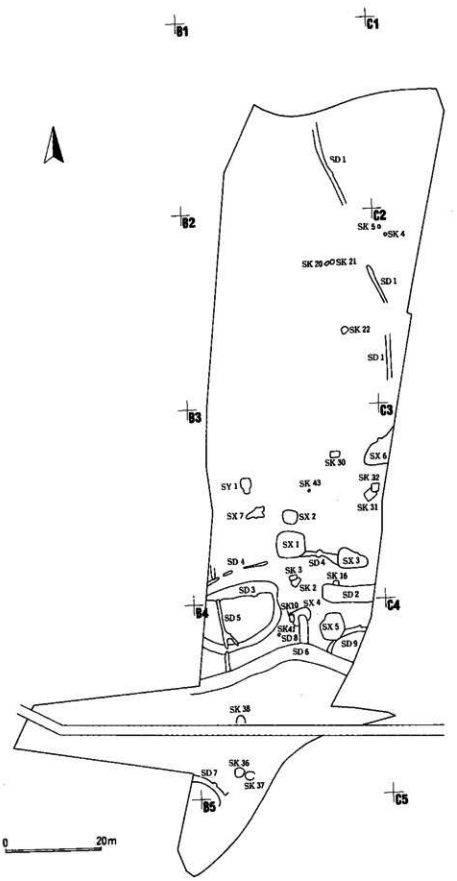
遺構　B2区の南東端に所在し、調査区中央部に散在する建物群中、最も東に位置している。東角にあるべき柱穴を確認できなかったが、その柱穴は本来浅かったために、既に削平されてしまったのであろう。南角がSI 30を攪乱している。柱配置は紛らわしい要素があるが、1間×2間の総柱造りであろう。P 1・P 4の間、P 3と東角の間に、それぞれ柱穴状ピットが存在するが、これらは一方に偏り過ぎており、P 2やP 5のごとく中柱とみなすことには無理がある。桁行4.4m、梁行3.6mの規模を有する。建物方位はN－47°－Wである。柱穴プランはP 5が楕円形である以外は、略円形である。その深さは30cm～50cmの間である。なお、遺物は検出されなかった。

SB 12（第55図）

遺構　B2区の南部、SB 10とSB 11の中間に所在している。本遺構はSB 11以上に柱穴が浅いため、柱配置の復原には困難が伴うが、確認された柱穴状ピットがすべて1棟の建物を構成しているという前提に立てば、3間×3間の構造を想定することができよう。既に消滅している柱穴は、P 1・P 5間に1か所、P 1・P 2間に1か所、東角に1か所の計3か所である。規模は桁行8.4m、梁行5.6mを計る。建物方位はN－48°－Wである。柱穴プランは略円形でそろっている。P 7・P 8・P 9には柱痕が残っている。その深さはP 5が65cmと格段に深いほかは、20cm前後でばらつきが少ない。また、P 5以外には重複が認められないので、建て替えはなかったものと思われる。なお、遺物は検出されなかった。

3　土坑類と出土遺物（第56図）

土坑類の分布はB3区以南に偏在している。特に掘立柱建物跡密集域から、SD 6に至るまでの範囲に集中する傾向が窺われる。SY 1・SX 2・SX 7・SK 30等は、その位置的な近さからみて、掘立柱建物群と関



第56図　土坑類・溝等配置図

連づけて差し支えないであろう。SD 6は台地上の傾斜変換線をトレースしており、土坑類の分布状況について、何らかの規制的な役割を果たしていたものと考えられる。

SY 1（第57図、図版11）

遺構　B3区の北西部に位置し、掘立柱建物密集域の北西に、SB 7とSB 8に囲まれるように位置する地下式壙である。全長3.5m、最大幅2.5m、深さ2.0mを計る。不整方形の主室と前庭部からなり、南向きに開口している。前庭部が深いので、両者の高低差は小さい。前庭部の形状は、主室との接続部が幅狭くなっており、形式的な羨道部を表現している。主室の一角はオーバーハングしている。主室の床面は壙圧されてよくしまっている。主室の覆土は、黒色土とローム粒を含む暗黄褐色系土との互層になっており、人為的に埋め戻されたことを示唆している。

遺物　1は鍛冶炉の炉壁片で、覆土中から出土した。赤錆色の大きな鍛冶滓の外縁の一部に、下半部と思われる湾曲した壁材が溶着している。壁材は黒色を呈し、胎土に長石を多量に混入している。その断裂面には、多数の小気孔が見られる。重量は710.8gである。

SX 1（第58図、図版17）

遺構　B3区の中央部やや南寄り、掘立柱建物密集域のすぐ南に位置し、SD 4と重複している。長方形の1辺が丸みを帯びたプランを示し、壁が斜めに立ち上がる非常に浅い土坑である。周縁部の3か所に小ピットが散在している。全長6.4m、幅5.2m、深さ0.2mの規模である。

遺物　1は青銅銭の洪武通宝で、東寄りの床面直上から出土した。緑青がかかり、外縁部から腐食が進行している。陽鋳された文字も、かろうじて判別できる。直径2.0cm、厚さ1.2mmである。明の太祖が1,368年に初鋳した銭貨である。

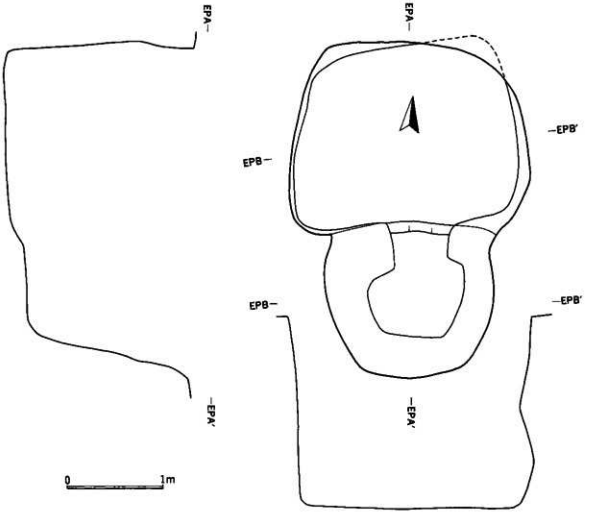
SX 2（第59図）

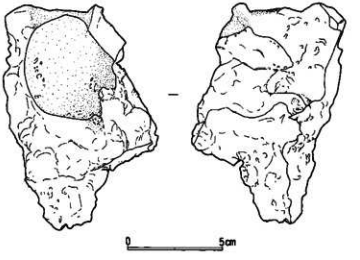
遺構　B3区の中央に所在する。SX 1の北に位置し、掘立柱建物密集域と接している。小竪穴状の遺構で、不整長方形プランを示し、3.5m×3.1mの規模を有する。中央付近に楕円形の小ピットがあり、北西縁辺部には円形小ピットが散在している。遺物は検出されなかった。

SX 3（第60図）

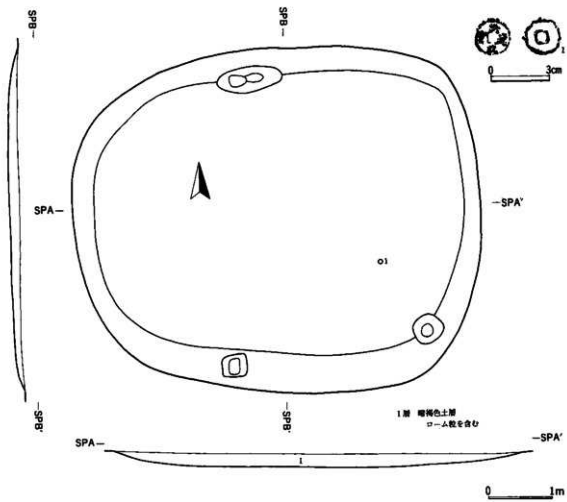
遺構　B3区の南東部に所在し、SX 1の東方にあり、SD 4と重複している。不定形プランを呈し、全長7.3m、最大幅4.4mを計る。浅い遺構で、床面は南に傾斜し、壁は斜めに立ち上がっている。南側中央に楕円形のピット、北東隅に円形の小ピットがある。

遺物　1は内耳塝で、覆土中から出土した。外面は暗褐色、内面は赤褐色を呈する。直線的な体部が、口縁で肥大し、外方に鋭く稜を形成する器形である。口縁付近は横ナデ、胴部外面はナデ、内面はヘラナデされている。

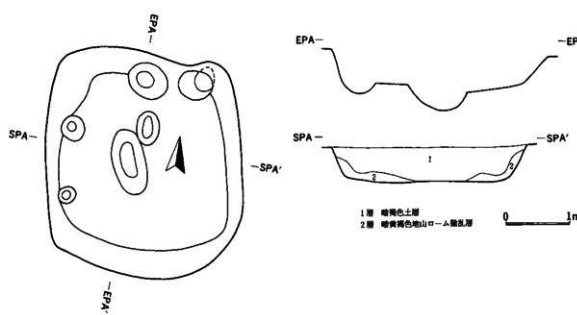




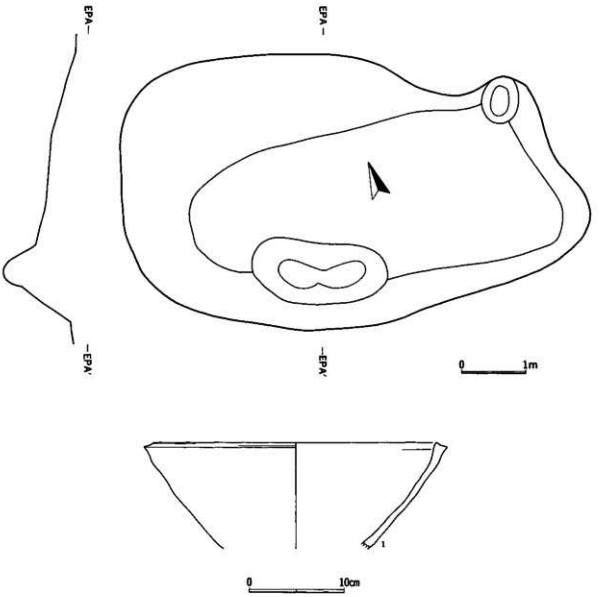
第57図　SY 1　遺構・遺物実測図



第58図 SX 1 遺構・遺物拓影図



第59図 SX 2 遺構実測図



第60図　SX 3 遺構・遺物実測図

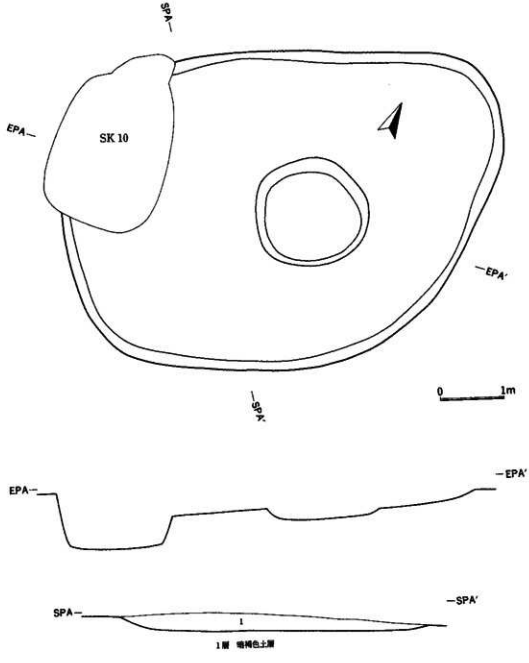
SX 4 （第61図）

遺構　B4区の北端中央部に位置し、西側でSK 10と、南側でSD 8 と重複している。不定形なプランを呈する、浅い遺構である。全長7.0m、最大幅5.0mの規模がある。中央に円形のピットが掘り込まれている。

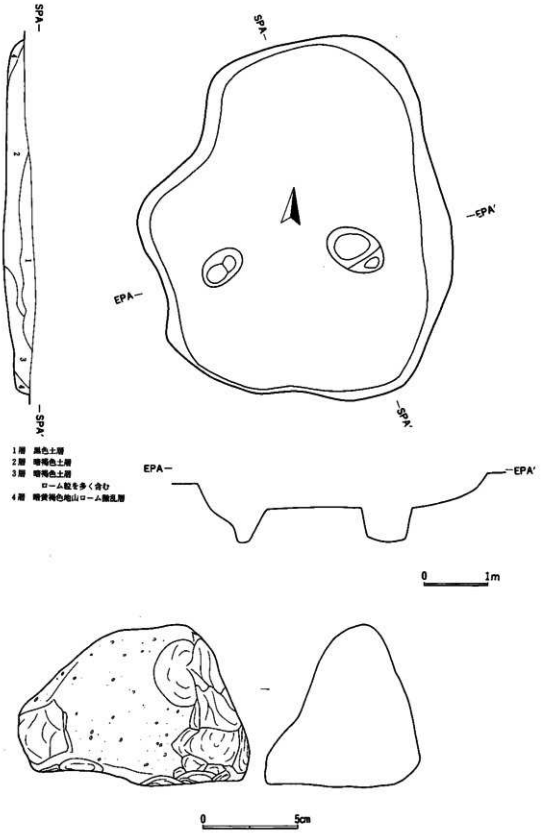
遺物は検出されなかった。

SX 5 （第62図、図版10）

遺構　B4区の北西端に所在する。SX 4 の南東に位置し、SD 9 と重複している。不定形なプランを示し、



第61図　SX 4　遺構実測図



第62図　SX 5　遺構・遺物実測図

全長5.8m、最大幅4.9mを計る。中央南寄りに2基の円形ピットが存在する。

遺物　1は磨石で、覆土中から出土した。凝灰岩で、灰色を呈している。末端部がことごとく欠損している点が特徴的である。残存する自然面の表面には、多数の小気孔が存在し、どの面も非常に滑らかに磨滅している。重量は1,105gを量る。

SX 6（第63図、図版10）

遺構　B3区北東部からB4区北西部にかかる遺構で、東側は調査区外に出ている。不定形の浅い土坑で、確認長7.2m、確認幅4.7mを計る。床面は凹凸があり、壁は斜めに立ち上がっている。北壁には2基の小ピットが存在する。遺物は検出されなかった。

SX 7（第64図、図版17）

遺構　B3区の中央部やや西寄り、掘立柱建物密集域中の西部に所在する。東側でSB 7、西側でSB 8と重複している。不定型なプランの浅い土坑で、全長3.7m、最大幅2.2mを計る。壁は斜めに立ち上がっている。本遺構内には、SB 7・SB 8以外にも、柱穴状ピットが混在している。

遺物　1は青銅銭の祥符元宝で、東寄りの床面直上から出土した。全面に緑青がかかり、外縁部から腐食が進行している。陽鋳文字は表面が潰れて、識別が困難となっている。直径2.4cm、厚さ0.9mm出ある。北宋の真宗が1,008年に初鋳した銭貨である。

SK 2（第65図、図版11）

遺構　B3区の南部中央に所在し、SX 1とSX 4の中間に位置している。北側がSK 3に切られている。隅丸方形プランの浅い土坑で、1.9m×1.7mの規模を有する。床面は凹凸があり、壁ははっきりしない。遺物は検出されなかった。

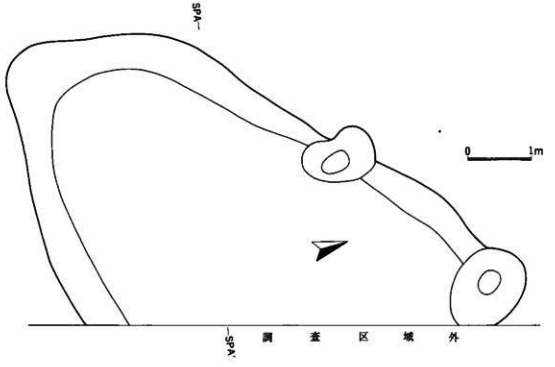
SK 3（第65図、図版11、図版14、図版17）

遺構　B3区の南部中央に位置している。南側でSK 2を切っている。楕円形に近いプランで、長径1.9m、短径1.3mを計る。覆土はローム粒を多量に含む土で充填されており、人為的に埋め戻されたことを示唆している。

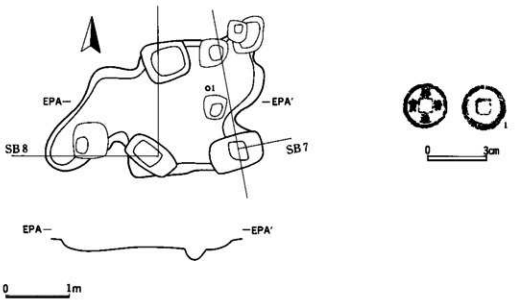
遺物　馬骨・土器・石器等が出土した。

馬骨は床面付近から歯や脚骨等が出土している。

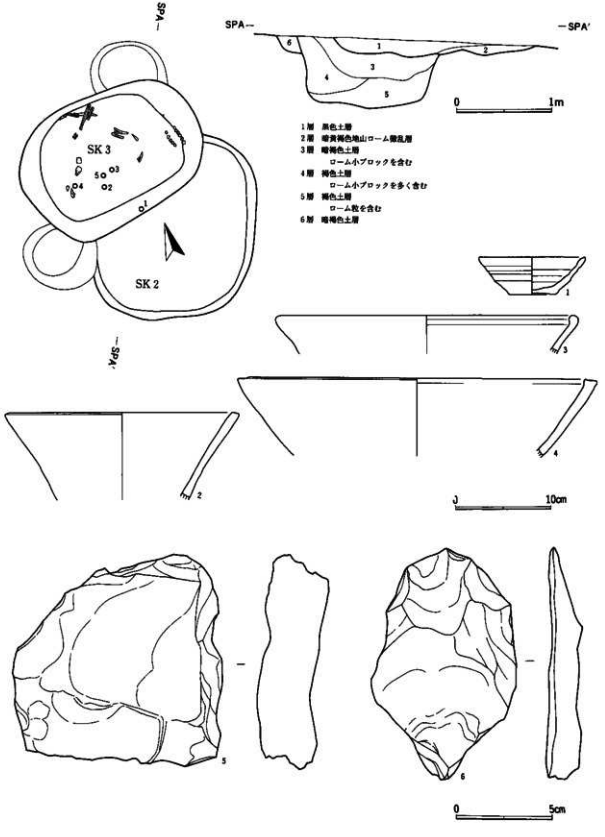
1はカワラケで、南縁の覆土中から出土した。口径11.1cm、器高3.8cm、底径5.0cmで、明褐色を呈する。小さい底部から、体部が直線的に開く器形である。底部中央は比較的薄くなり、口縁はやや肥厚している。体部両面にはロクロ目が強く残っている。底部は上げ底となり、回転糸切り後、無調整である。2は内耳鍋で、中央覆土中から出土した。口径22.9cm、現高9.0cmで、暗褐色を呈する。胴部は外反してラッパ状に開きながら肥厚した口縁に至る。口縁端は平面をなし、内外面に稜を形成している。外面はナデ、内面はヘラナデで仕上げられる。また、外面には煤が付着している。3は擂鉢で、中央覆土中から出土した。推定口径30.5cm、現高4.0cmで、黄白色の胎土に錆釉がかかっている。口縁はやや外反して、端部内側に粘土紐を貼付して、蒲鉾形断面の内傾する口唇部を成形している。胴部外面はロクロ目が残り、内面はナデ調



第63図　SX 6　遺構実測図



第64図　SX 7　遺構・遺物拓影図



第65図　SK 2・SK 3 遺構、SK 3 遺物実測図

整されている。4は内耳鍋で、中央覆土中から出土した。口径35.2cm、現高8.0cmで、茶褐色を呈する。大きく開いた体部は、厚みを増して口縁に至る。口縁は内面に蓋受け用の粘土紐を貼付している。端部はいずれも丸く仕上げられる。内外面ともにナデ調整である。

5・6は雲母片岩で、中央覆土中から出土した。青灰色を呈し、扁平で一様な厚みがある。2～3㎜四方大の雲母片が密に混在している。使用痕は認められない。重量615.4gを量る。6は中央覆土中から出土した。大きな剝片で、青灰色を呈する。微細な金雲母粒が密に混在している。図面の右上辺が磨滅している。重量182.0gを量る。

SK 4（第66図）

遺構 C2区の北西端に所在する。最大径0.8mの不整円形プランを示す浅い土坑である。壁は斜めに立ち上がってはっきりしない。

遺物 1は椀形滓で、遺構中央部から出土した。赤錆色を呈し、中央がくぼんでいる。所々に小気孔が見られる。重量104.9gである。

SK 5（第67図、図版10）

遺構 SK 4とともに、C2区の北西端に所在する。長径0.75mの略円形の浅い土坑である。遺物は検出されなかった。

SK 10（第67図、図版11）

遺構 B4区の北端中央部に所在し、SX 4を撹乱している。長辺1.7mの不整長方形プランを持つ。北端の小ピットは、後世の撹乱である。

遺物 床面付近から馬の下顎骨と歯が出土した。

SK 16（第67図）

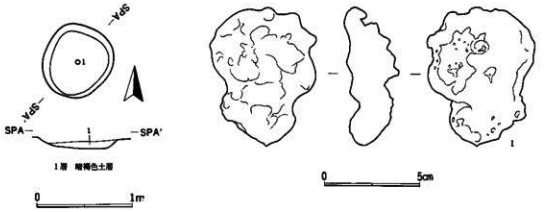
遺構 B3区の南西部に位置し、SD 2と重複している。直径1.3mの円形の浅い土坑である。壁は斜めに立ち上がっている。土坑底には青灰色粘土が厚く敷き詰められていた。上層にはローム含有土が堆積しているので、人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物は検出されなかった。

SK 20（第68図、図版11、図版15）

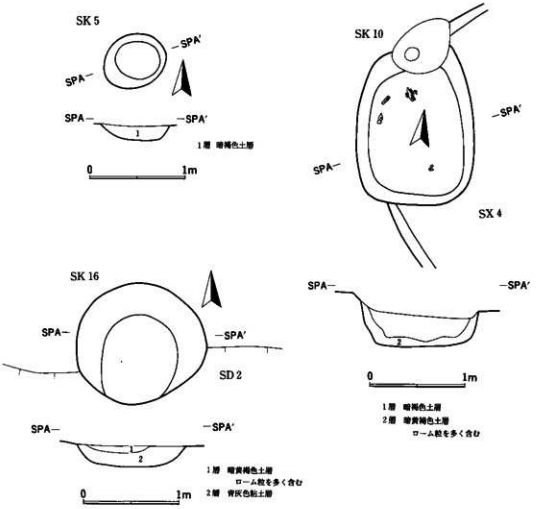
遺構 B2区の北部に位置し、SI 11と重複している。北側の部分は確認できなかった。残存範囲では径1.3m程の規模である。壁は斜めに立ち上がり、床面には浅いピットが掘られている。

遺物 床面近くから下層にかけて、多量の遺物が出土した。

1～6は高台付きの杯である。1は口径11.9cm、現高3.5cmで、赤褐色を呈する。高台部分が剝離している。椀形の器形で、体部は内湾気味に大きく開き、口縁で外反する器形である。体部内外面はヘラナデで仕上げられ、下端はヘラケズリされている。2は口縁部を欠いている。現高4.8cm、台径7.0cmで、赤褐色を呈する。椀形の器形で、体部下端のヘラケズリによって、体部は屈折して口縁へ向かう。高台の径は大きく、台裾は外へ開いている。接地面は広く面取りされている。内面調整で細身に作られている。体部外



第66図　SK 4 遺構・遺物実測図



第67図　SK 5・SK 10・SK 16 遺構実測図

面はヘラナデ、内面はナデ後、底部に格子状のヘラミガキを施す。3は口径12.8cm、現高5.1cmで、赤褐色を呈し、内面が黒色処理されている。高台部分が剝離している。深身の椀形で、体部から口縁にかけて緩いS字状に開く器形である。高台径は小さい。体部外面にはロクロ目が残り、内面はヘラミガキされている。胎土には雲母・石英が混入している。4は口径14.9cm、現高5.1cmで、赤褐色を呈し、内面が黒色処理されている。椀形を示し、口縁では外反している。体部下端の回転ヘラケズリによって、体部は屈折している。体部外面にはロクロ目が残り、内面は体部・底部とも細い工具によって粗くヘラミガキされている。5は口径13.0cm、器高6.5cm、台径8.7cmを計り、赤褐色を呈する。広い底部から、浅い体部が外反しながら大きく開いて口縁で外反し、足高の高台が外反気味に外に開く器形である。底部内面には緩い凹凸が観察される。体部外面はヘラナデ、内面はナデによって仕上げられ、台部内外面は横ナデされている。台部端は僅かに面取りされている。杯部と高台を密着させるために、ヘラ状工具で接合部をなぞっているが、その軌跡はきれいな円ではなく、かなり歪んでいる。このことから、少なくとも調整段階では、ロクロは使用されていなかったことが判明する。6は5と同様な足高高台である。現高3.3cm、台径9.5cmで、赤褐色を呈する。5に比べて台の開きは小さい。内外面ともに横ナデ処理されている。接地面は大きく面取りされている。7は甕で、口径19.3cm、器高29.0cm、底径10.8cmで、赤褐色を呈する。胴部中位に最大径を持つ倒状の器形で、器体の厚みは均質である。口縁は直線的に開き、口縁端はやや角ばっている。口縁調整は内外面ともヘラナデにより、胴部外面は上位が縦方向に弱いヘラケズリが施され、下端には横方向にヘラケズリされている。内面はヘラナデされている。

8は須恵器甕の胴部破片を素材にした転用硯である。青灰色を呈し、内湾している。外面には平行タタキ目が施されるが、内面は無文である。内面中央は磨滅して、平滑になっている。

SK 21（第69図、図版15）

遺構　SK 20とともにB2区の北部に所在し、SI 11に一部切られている。長径1.1m、短径0.7mの楕円形プランを示し、壁は緩やかに立ち上がり、南側には小ピットを伴っている。

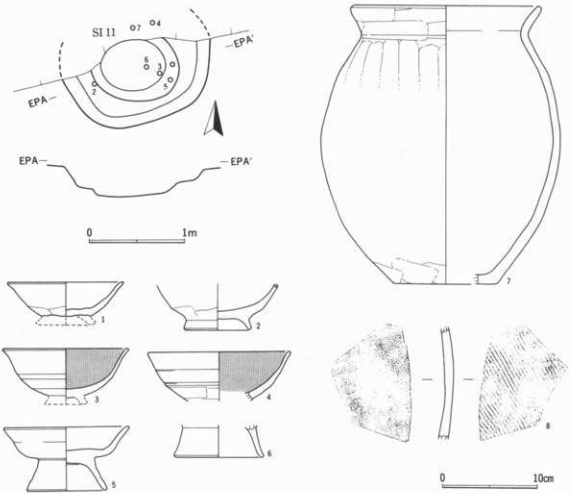
遺物　1は杯で、小ピット覆土中から出土した。口径12.8cm、現高4.1cmで、赤褐色を呈する。椀形に近い器形で、内湾気味の体部は口縁で外反する。体下部においても、器壁が薄い点が特徴的である。外面はヘラナデ、内面はナデで仕上げられている。2は甕で、北側の覆土中から出土した。口径13.5cm、現高11.0cmで、赤褐色を呈する。胴部は最大径が中位にあって、屈曲している。球形に近い器形で、器体の厚みは均質であるが、輪積粘土の接合がまずく、全体にゴツゴツしている。口縁は穏やかに開き、端部が肥大して、外反している。頸部内面には稜を生じている。胴部外面は上部は縦方向、中位は横方向にヘラケズリされている。

SK 22（第70図）

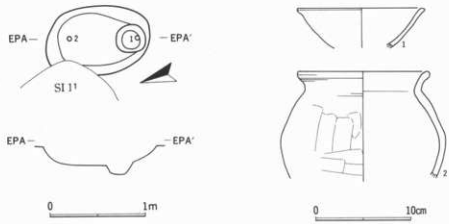
遺構　B2区の北西部に所在する。1辺1.2mの方形プランの土坑である。確認面の最上層には、炭化粒が薄く堆積していた。遺物は検出されていない。

SK 30（第71図）

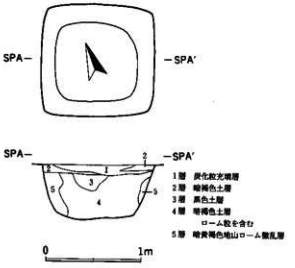
遺構　B3区の北東部に所在する。遺構は長辺2.8m、短辺1.5mの不整長方形プランを示す。床面は浅く、



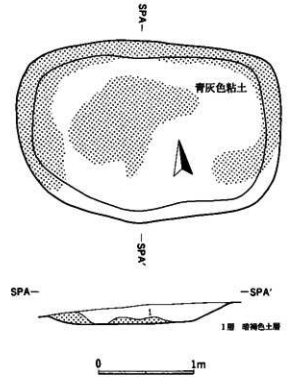
第68図　SK 20 遺構・遺物実測図



第69図　SK 21 遺構・遺物実測図



第70図　SK 22 遺構実測図



第71図　SK 30 遺構実測図

凹凸があり、壁は斜めに立ち上がっている。床面中央と、南側を除く周縁部には、青灰色の粘土塊が残存していた。周縁部の粘土は南東部を除き、壁に密着していたが、中央の粘土は凹凸が目立ち、填圧されていた形跡は認められない。遺物は検出されなかった。

SK 31（第72図）

遺構　B3区の東端中央部に所在する。東側がSK 32に切られている。不整楕円形プランで、短径が2.0mを計る。床面には小ピットが存在する。壁は斜めに開いている。覆土の状況から、人為的に埋め戻されたと判断される。遺物は出土しなかった。

SK 32（第72図、図版17）

遺構　B3区の東端中央部に位置し、南側でSK 31を切っている。長さ2.2mの台形を呈する土坑である。

遺物　1は琥珀玉で、西壁寄りの覆土中から出土した。直径1.6cmで、中央に口径1.5mmの細孔が貫通している。淡黄褐色を呈し、腐食が進んで表面が剝離している。3.5gを量る。

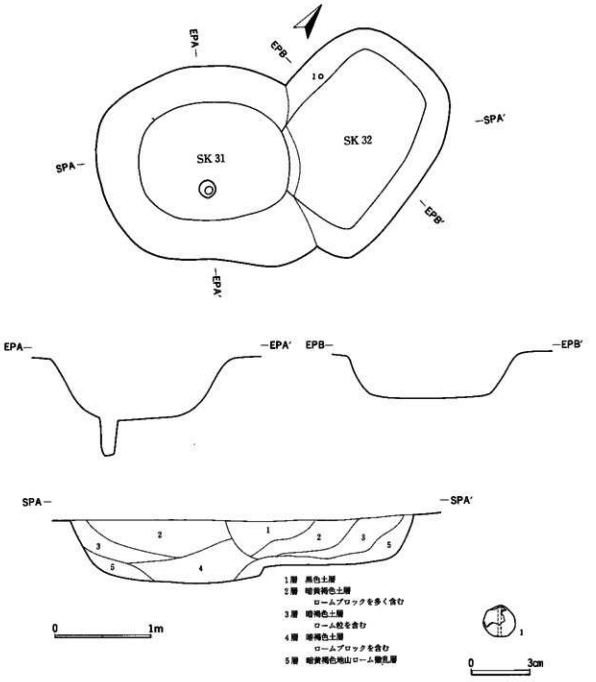
SK 36（第73図、図版11）

遺構　B4区の南西部に位置している。不整円形プランで、長径2.1mを計る。床面中央が熱を受けて赤変している。遺物は出土しなかった。

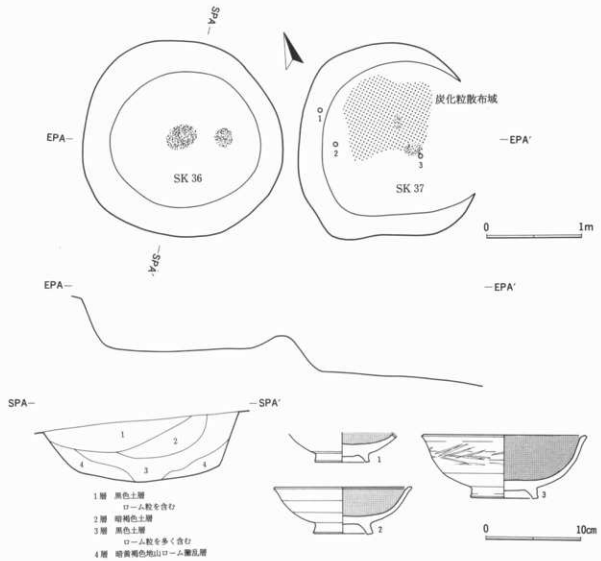
SK37（第73図、図版11、図版15）

遺構　B4区の南西部に位置し、SK 36の東側に隣接している。不整円形プランで、SK 36とほぼ同規模である。東側は台地斜面にかかるために、流失していた。床面中央に熱を受けた赤変部分があり、周辺には炭化粒が散布していた。

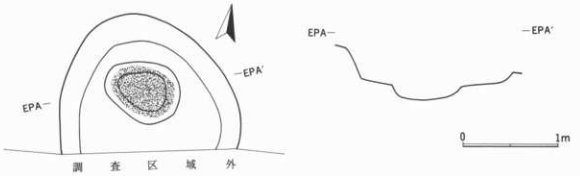
遺物　1～3は高台付きの杯である。1は西辺の覆土中から出土した。現高3.1cm、台径6.8cmで、赤褐色を呈するが、内面は黒色処理された痕跡を残している。体部は椀形で、外面はロクロナデされ、底部は回転ヘラケズリで調整されている。内面はヘラミガキされているが、表面が荒れている。高台は付け根が太く、外見は外反気味に直立するが、内面ではかなり開いた形状を呈する。接地面には沈線が巡っている。2は西寄りの覆土中から出土した。口径13.9cm、器高4.8cm、台径6.2cmで、赤褐色を呈する。内面が黒色処理されているが、外面にもその痕跡が残っている。椀形の器形で、体部は浅く、体部から口縁にかけて緩くS字状に大きく開いている。外面はロクロナデされ、内面はヘラナデで調整される。底部外面は回転ヘラナデ処理されている。高台は厚みがあり、比較的径が大きく、台裾は外に開いている。接地面は幅広く作られている。3は中央の床面直上から出土した。口径16.9cm、器高6.6cm、台径7.2cmで、赤褐色を呈し、内面は黒色処理されている。椀形の器形で、深い体部から口縁が外反する。体部外面はロクロナデの後、中位が細い工具で綾杉文状にヘラミガキされ、内面は同じく横方向にヘラミガキされている。口縁端は面が形成され、稜線が生じている。底部外面はヘラナデ処理されている。高台は付け根が太く、外見は直立して台裾でやや張り出している。内面は開いた形状を呈する。接地面は幅広い。



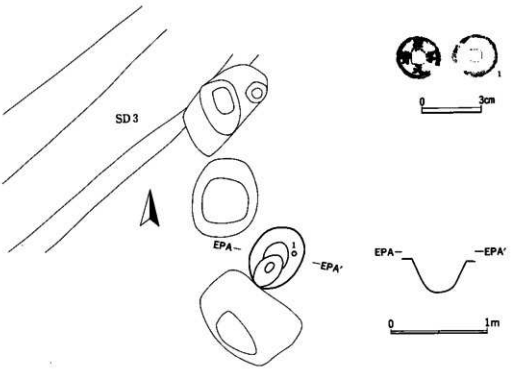
第72図　SK 31・SK 32 遺構・遺物実測図



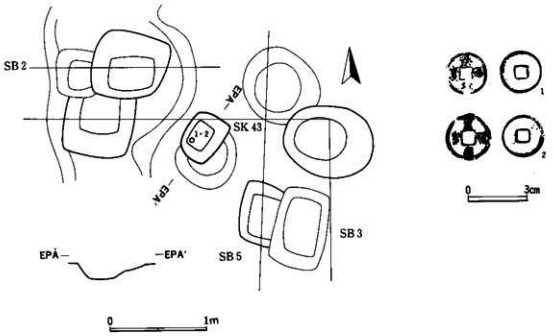
第73図　SK 36・SK 37 遺構・遺物実測図



第74図　SK 38遺構実測図



第75図　SK 41 遺構・遺物拓影図



第76図　SK 43 遺構・遺物拓影図

SK 38（第74図）

遺構　B4区の南西部に位置する。SK 36の北方にあり、南側は農道があるため、完掘していない。遺構プランは不整円形と思われ、確認域で2.0m程の幅がある。東側は台地斜面に近いために、壁の遺存状況は良くない。床面には浅いピットが掘り込まれ、その中に焼土が詰まっていた。遺物は検出されていない。

SK 41（第75図、図版17）

遺構　B4区の北部中央に位置する。SX 4の南西にあり、SD 6の北に位置している。楕円形プランの小土坑で、長径0.7m、短径0.5mの規模を持ち、床面は段差がある。

遺物　1は青銅銭の熙寧元宝で、覆土中から出土した。全体に緑青を帯び、遺存状態は悪く、一部欠失している。直径2.2cm、厚さ0.9mmを計る。陽鋳文字の鋳上がりは悪い。北宋の神宗が1,068年に初鋳した銭貨である。

SK 43（第76図、図版17）

遺構　B3区の中央部やや北東寄りに所在し、掘立柱建物密集域中に位置する。長辺0.5m、短辺0.4mの略長方形プランの柱穴状のピットで、深さは20cmと浅い。

遺物　覆土中から2枚の青銅銭が膠着状態で出土した。2枚とも全面に緑青を帯びているが、膠着面は赤錆色を呈している。遺存状態は良好である。1は洪武通宝で、直径2.2cm、厚さ0.8mmを計る。陽鋳文字の鋳上がりは元々不良だが、膠着部分の潰れが著しい。明の太祖が1,368年に鋳造した銭貨である。2は皇宋元宝で、直径2.4cm、厚さ1.0mmを計る。陽鋳文字の鋳上がりは不良で、ぺったり潰れている。また、周縁の一部にバリが残されている。南宋の理宗が1,253年に初鋳した銭貨である。

4　溝跡と出土遺物（第56図）

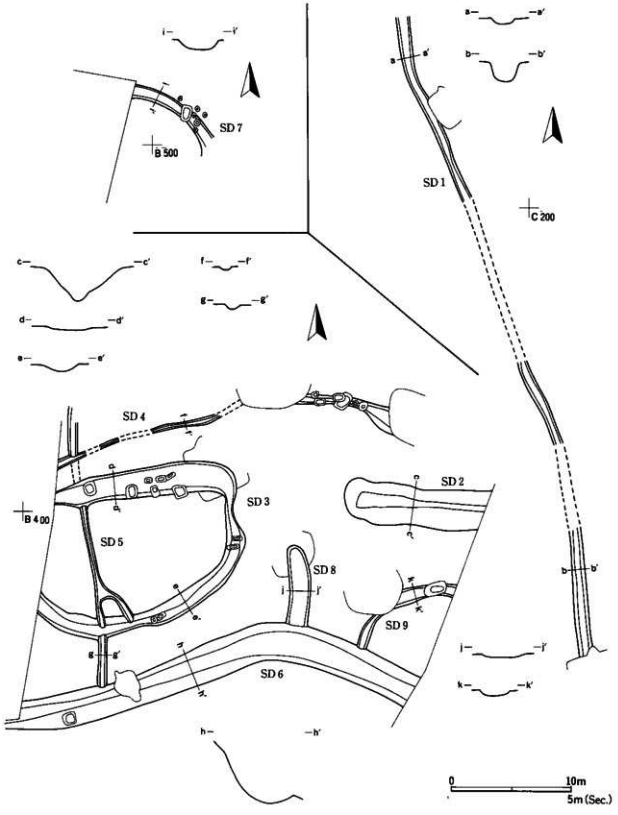
溝跡の分布状況は北部のB1区・C2区にSD 1が、南部のB4区にSD 7が孤立的に所在する以外は、B3区からB4区にかけての、掘立柱建物密集域の南側に集中している。この区域は土坑類の分布密度も高く、両者間に何らかの関連が考えられる。

SD 1（第77図）

調査区北部のB1区からC2区にかけて所在し、調査区中で最も長い。南北方向に断続的に延びている。北端はSI 24のところで、南端はSI 28のところで途絶えている。全長58.0m、幅1.2m前後である。深さは遺構確認面で北部は20cmと浅く、南部で60cmと深くなっている。北端は舌上台地付け根の谷頭に面している。

SD 2（第77図、図版11）

B3区の南東端に位置し、多くの溝跡とともに、掘立柱建物密集域の南側に所在する。東西方向に延びる溝で、東側は調査区外に出ている。確認長10.1m、幅3.0m、深さ2.3mを計る。断面の形状はV字形の最深部がさらに掘り込まれて薬研状を呈している。



第77図　溝 遺構実測図

SD 3（第77図、図版10）

B3区の南西端からB4区の北西端にかけて所在する。SD 2の西方にあって、SD 5と交錯し、西側は調査区外に出ている。この溝は調査区外で連絡し、D字状に閉じる可能性が高い。直線状部分の長さは13.0mあり、確認部分の全長は37mである。幅は最大で2.0m、最小で0.6m、深さは直線状部分が10cmと浅く、曲線部分で40cmを計る。遺構中には小ピットが散在するが、本来この溝に伴っていたのかどうか不明である。また、この溝によって画された内側にも小ピットは散在するが、掘立柱建物として復原され得るものは存在しなかった。

SD 4（第77図）

B3区の南部に所在し、SD 2・SD 3の北に位置する、東西方向に延びる溝である。西側は調査区外に出ており、東側はSX 3で途絶えている。途中、断続しながら大きな弧を描いている。全長27.5m、平均的な幅0.4m、深さ20cmである。遺構の東部では小ピットと重複している。

SD 5（第77図）

B3区の南西端からB4区の北西部にかけて位置する。南北方向に延びる溝で、SD 3・SD 4と交差している。北端は自然消滅し、南端はSD 6で途絶えている。また、途中で分枝するが、SD 3で途絶えている。全長22.0m、幅0.4～0.6mで、深さ25cmである。

SD 6（第77図）

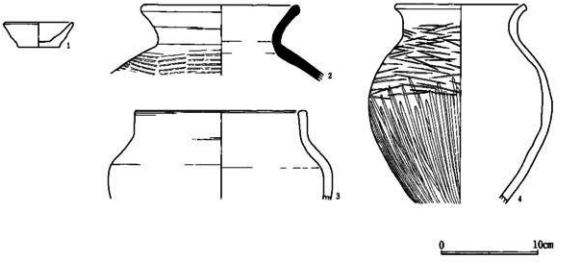
B4区の北部に位置し、中小規模の溝や土坑類が集中する区域の、南限を画するように、東西方向に延びている溝跡である。台地の傾斜変換線上に占地していることからも、何らかの地境的な機能を果たしていたことが想定できる。北へ「へ」字状に屈曲する形状は、SD 4が弧状に曲がっていることに対応するかのようである。全長35.0m、幅1.4mあり、深さは傾斜地にかかっているために、南北でかなり落差がある。北から計れば1.8m、南から計れば25cmである。底部は明瞭な平面を形成することなく、底面と壁の境ははっきりしない。

SD 7（第77図）

調査区南端に近いB4区の南西端に位置し、溝跡としては孤立的に所在する。台地斜面上に掘られた溝跡である。東西方向に円弧を描いており、その東端は不定形に拡大して、消滅している。西側は調査区外に出て、南でSI 34と接している。全長3.5m、幅1.4m、深さ30cmを計る。小ピットが介在しているが、本来この遺構に伴っていたか不明である。

SD 8（第77図）

B4区の北部に位置する。SD 6の屈曲部に接している、南北方向に延びる溝跡である。北端はSX 4で途絶え、南端はSD 6で途絶えている。全長6.0m、幅1.7m、深さ15cmの規模を有する。



第78図　溝 遺物実測図

SD 9（第77図）

B4区の北東部にSD 6の北で接している、円弧を描く溝跡である。西はSD 6で途絶え、東は調査区外に出ている。全長8.5m、幅1.1m、深さ20cmを計る。東部に小ピットが介在しているが、本来この遺構に伴っていたか不明である。

溝跡出土遺物（第78図、図版15）

溝跡の覆土中から次のような遺物が出土している。

1はカワラケの杯で、SD 1から出土した。口径7.0cm、器高2.6cm、底径5.7cmで、明褐色を呈する。体部が直線的に開く器形である。体部下端の面取りはなされず、底部と体部の境が分厚くなっている。また、体部は上下で厚みに相違があり、そのため中程で弱く屈曲している。口縁端は明瞭な平面を形成している。体部内外面はロクロナデ仕上げ、底部外面は回転糸切り後、無調整である。

2～4は甕である。2は須恵器甕で、SD 2から出土した。口径15.8cm、現高7.3cmを計り、黄灰褐色を呈する生焼け製品である。口縁は穏やかに外反して、端部の外側に粘土帯を貼付して口唇部を成形している。上端は丸みを帯びるが、外側は鈍い稜を生じている。頸部は「く」字状に強く屈曲し、胴部上位に最大径があることを窺わせる。なお、口縁には粘土帯の接合痕が残っている。口縁内外面は横ナデされ、胴部外面には平行タタキ目が施される。胎土は緻密である。3はSD 2から出土した。口径17.0cm、現高9.1cmで、赤褐色を呈する。胎土は緻密で、雲母を混入している。弱く肩を張る胴部から、広い頸部が直立して、そのまま口縁となる。胴部最大径を屈曲する肩部に持つ器形である。口縁端は横ナデされ、平面を形成し、胴部外面はナデによって調整されている。器体の厚みが均一な点が特徴的である。4は常総型の甕で、SD 7から出土した。口径13.2cm、現高20.6cmで、明褐色を呈する。胎土には少量の雲母が混入している。口縁は緩く外反し、外側に稜を作っている。頸部は短く直立する。胴部は穏やかに膨らんで、中位やや上部に最大径を持つ。器体の厚みは比較的均質である。胴部外面はヘラナデされた後、上半はごく細い

工具で粗い横方向のヘラミガキが装飾的に施され、下半は縦方向の密なヘラミガキが加えられる。

第3節　遺構外出土遺物

1　グリッド出土遺物（第79図）

確認調査や遺構確認面の精査中に、表土中から出土した遺物を報告する。遺物量は調査区の南側が多く、特に台地南斜面にかかるB4－44、B4－52、B5－10、A5－29の4か所のグリッドからはまとまって出土している。また、量的には少ないが、縄文土器が広範囲にわたって確認された。

縄文土器（第80図、図版19）

1～12は撚糸文土器である。1～4は井草Ⅰ式で、そのほかは井草式である。1は口唇にRL2段で、端部が肥厚して外反する。2・3はRL2段を施文し、口縁には縦縄文（条縦走）が見られる。端部が肥厚して外反する。胎土には白色礫が含まれる。4は上部が横縄文、下位が縦縄文（条縦走）で、無節Rである。5・6はRLまたはRの縦縄文である。7～11はRL縦縄文である。12は縦位撚糸文Rである。

13～42は沈線文系土器である。この土器群はさらに、細沈線主体のもの、太沈線主体のもの、凹線文のもの、の3類に分類できる。

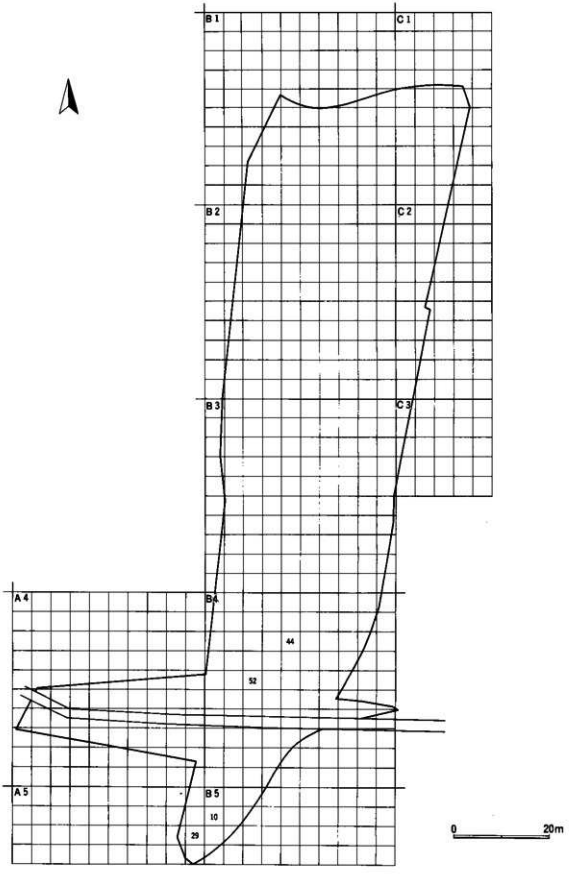
13～17は細沈線主体のものである。13は上下を横位条線を配し、その間に斜格子文様が縦に施文されている。14は細沈線が斜行している。15は方向を変えた斜行条線で、一部縦方向に施文される。鋸歯状あるいは菱形区画の一部であろうか。16は横位条線である。17は上下に縦太条線、横位細条線、爪形連続刺突文が配されている。

18～36は太沈線主体のものである。18は横位沈線の口縁で、円頭である。19は縦太沈線の口縁で、外削ぎ調整されている。20は縦、斜め、横弧状の沈線が見られる。鋸歯状の条線区画と弧状沈線が組み合わさる文様になる。下位には刻み目入り横位沈線が配される。21は縦短沈線、斜位沈線、横位条線の組み合わせである。22は連続短沈線である。23は縦条線の下位に横沈線が配されている。24は横位沈線間に縦位短沈線が巡っている。25は横沈線の上位に鋸歯状の短沈線列が見られる。26は横条線の下位に縦細条線が配される。27は横条線の下位に斜位細条線が配される。29～33は横位条線である。34は横位弧状沈線である。35・36は縦位条線である。

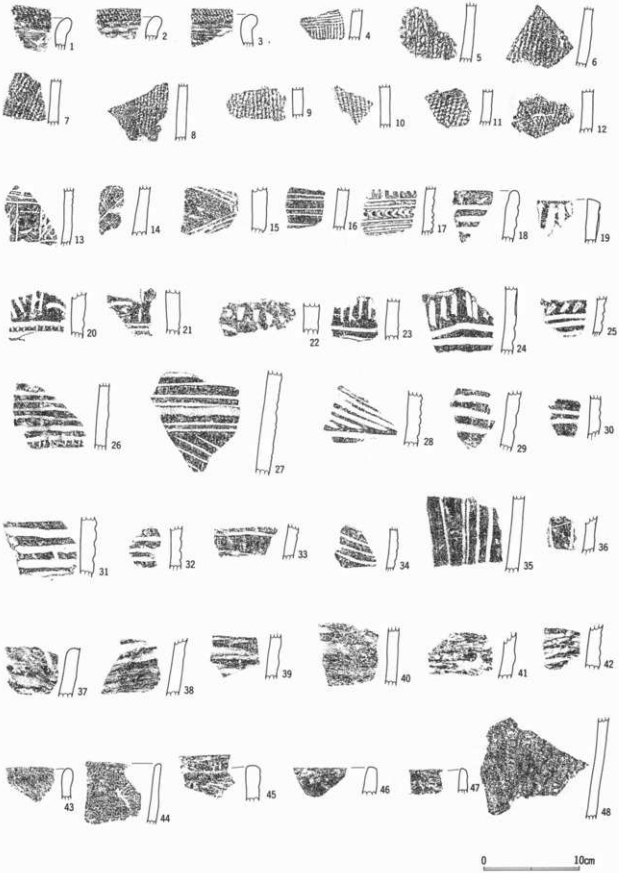
37～42は凹線文土器である。37～40は横位の、浅く太い凹線である。41・42も横位の凹線で、胎土に長石を多量に含み、器面がざらついている。

43～48は無文土器である。43は口縁が肥厚し、やや外反する撚糸文系である。44の口縁は肥厚せず、直線的な断面を呈する。外面に削り痕を残している。これも撚糸文系である。45の器面は皺や小凹凸が目立ち、調整不十分である。46・47の口唇は角張っており、ミガキが顕著に見られる。48は胎土に繊維が含まれている。沈線文系である。

出土土器片中、無文土器は大半が沈線文系とみられ、有文と合わせて沈線文系土器が8割以上を占めている。そのほとんどは田戸下層式である。それに次いで多いのは、井草式主体の撚糸文系土器である。



第79図　グリッド配置図



第80図　グリッド出土遺物拓影図

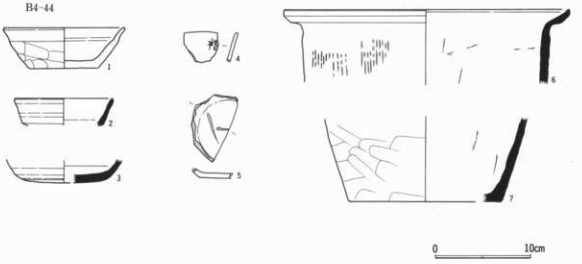
B4－44出土遺物（第81図、図版16）

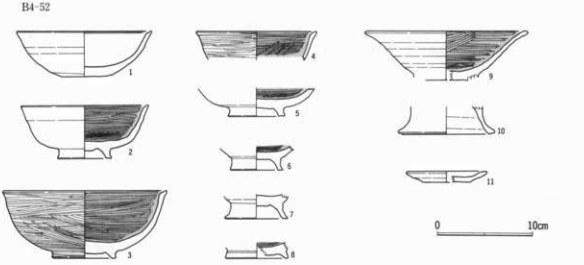
1～5は杯である。1は口径13.3cm、器高4.3cm、底径7.0cmで、赤褐色を呈する。体部は直線的に大きく開くが、口縁で厚みが減じるために、屈曲しつつ外反する。底部と体部の境が面取りされず、明瞭な稜を形成している。口縁部は強い横ナデ、体部外面は横方向のヘラケズリで調整される。底部外面はヘラケズリ処理されている。器壁の厚い点が特徴的な土器である。内外面ともに器壁が荒れている。2・3は須恵器である。口径10.2cm、現高2.9cmで、明灰色を呈する。広い底部から、体部が直線的に立ち上がる器形である。口縁はやや肥大して丸みを帯びている。底部と体部の境は面取りされず、明瞭な稜を残しているので、元々高台付きであった可能性が高い。体部内外面はロクロナデされているが、弱いロクロ目がまだ残っている。底部外面は回転ヘラケズリ調整されている。3は現高2.4cmで、明灰色を呈する。底部が若干膨らみ、体部との境が十分面取りされて、丸底の面影を残している。体部内外面はロクロナデ調整、底部外面は器壁が荒れている。4・5は墨書土器である。4は口縁部破片で、赤褐色を呈し、器壁が薄い。墨書は口縁直下に書かれている。示偏にツクリの上部は草冠であろうか。5は底部破片で、赤褐色を呈する。薄い墨書が底部内面に書かれている。文字ではなく、符号の可能性もある。

6・7は須恵器壺である。6は口径29.6cm、現高7.8cmで、明黄褐色を呈する生焼け製品である。胎土に砂粒が多く、表面は磨滅している。短い口縁は外反して、下側に粘土帯を巡らせて二重口縁を形成している。頸部は強い横ナデによってくびれている。胴部は頸部直下から、そのまま底部に至るバケツ形である。胴部外面には縦方向の平行タタキ目が施されている。7は胎土の色調や磨滅の度合いからみて、6と同一個体になると思われる。現高9.2cm、推定底径16.0cmを計る。胴部外面・底部外面はヘラケズリされている。

B4－52出土遺物（第81図、図版15、図版16）

1～10は杯類である。1は口径14.0cm、器高4.2cm、底径4.6cmで、赤褐色を呈する。小さい底部は厚みを持ち、体部が湾曲しながら開く器形である。口縁部は強く横ナデされ、外反気味になり、口唇部は内面に段を形成している。体部外面はヘラナデされている。底部外面は静止糸切り後、周囲を手持ちヘラケズリで調整している。2～8は高台付きの杯である。2は口径13.2cm、器高5.5cm、台径5.5cmで、赤褐色を呈し、内面は黒色処理されている。椀形の器形で、体部は直線的に立ち上がり、口唇部は引き締められて細身に仕上げられ、内面に段を形成している。高台は付け根が太く、外反しながら直立する。接地面は広く面取りされている。体部内外面はロクロナデされた後、内面には底部まで細い工具によるヘラミガキが加えられる。3は口径16.8cm、器高7.0cm、台径6.7cmで、暗褐色を呈し、内面は黒色処理されている。椀形の器形で、底部に厚みがあり、体部は湾曲しながら立ち上がり、口縁は口唇部で引き締められ、外反気味に処理されて内面に稜を作っている。高台は短く、付け根の両側がヘラ先で押さえられている接地面は面取りされている。口縁以下は内外面ともに、細かくヘラミガキが加えられている。4は推定口径12.6cm、現高3.0cmで、暗褐色を呈し、内面は黒色処理されている。体部は内湾気味で、口縁はやや肥大して外反し、内面に鈍い稜を形成する。口縁以下、内外面とも細い工具による横方向のヘラミガキがかけられる。5は現高2.9cm、台径6.0cmで、赤褐色を呈し、内面は黒色処理されている。椀形の器形で、底部は厚い。高台は開きが大きく、付け根の内側がヘラ先で押さえられている。接地面は調整され、中央に凹線が巡っている。体部内外面はロクロナデされ、内面は底部まで、さらにヘラミガキがかけられる。6は現高2.4cm、台径5.6cmで、明褐色を呈し、内面は黒色処理されている。高台の径は小さく、やや開き気味で、接地面は平





第81図　グリッド出土遺物実測図(1)

坦に面取りされている。体部外面はロクロナデされ、底部内面はヘラミガキされている。7は現高2.6cm、台径6.5cmで、赤褐色を呈する。高台は小さく、高く作られている。付け根に比べて裾部は薄く、直立気味で、端部付近で大きく開く。接地面は調整され、中央に沈線が巡っている。内外面ともにロクロナデ調整である。8は現高1.6cm、推定台径6.7cmで、赤褐色を呈し、内面は黒色処理されている。高台は短く、外に開く。接地面は僅かに面取りされている。付け根の内側はヘラ先で押さえられている。底部内面はヘラミガキが入り、外面中央には回転糸切り痕が残っている。9・10は足高高台付きの杯である。9は口径16.4cm、現高5.0cmで、赤褐色を呈し、内面は黒色処理されている。胎土には少量の雲母が混入している。高台部との接合部で剝離している。体部は湾曲気味に大きく開いて、口縁で外反している。内外面ともにロクロ目が強く残されている。さらに、内面には口縁から底部に至るまで、細い工具によるヘラミガキがかけられる。10は現高2.9cm、台径10.0cmで、赤褐色を呈する。胎土には少量の雲母が混入している。色調や胎土からみて、接合はしないものの、9と同一個体であると思われる。高台は端部付近で大きく開いている。接地面は調整されて、中央に凹線が巡っている。内外面ともにロクロナデ調整されている。

11はカワラケの皿で、口径8.5cm、器高1.1cm、底径4.8cmで、明褐色を呈する。上げ底の底部から、浅い体部が大きく開く器形である。体部は中央部が肥厚し、単純な口縁を持つ。体部内外面ともにロクロナデされ、底部外面は回転糸切り後、無調整である。

B5－10出土遺物（第81図、図版17）

1は須恵器杯で、推定口径9.8cm、器高4.9cm、推定底径5.0cmで、暗灰色を呈する。小ぶりの土器で、体部は湾曲しながら開く器形である。底部から口縁へと、器体の厚みが次第に減じている。口縁は僅かに外反している。体部外面はロクロ目がよく残るが、内面はロクロナデで消されている。上げ底気味の底部外面は、回転糸切り後、無調整である。

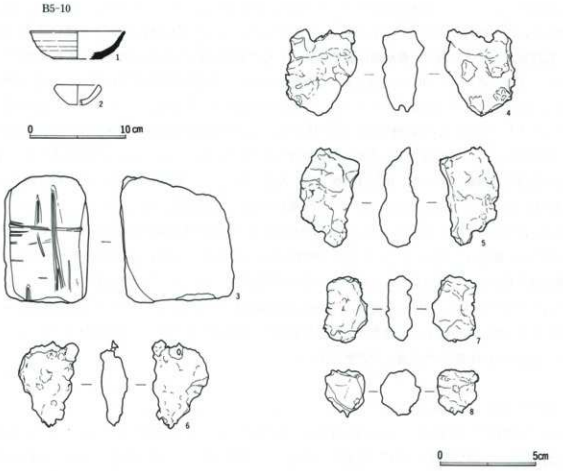
2は手捏ね土器で、口径5.0cm、器高2.1cmを計り、明褐色を呈する。手捏ねとしては、調整が丁寧で、底部を平坦に整え、口縁の厚みを整えている。

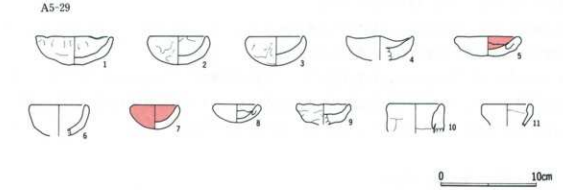
3は砥石である。砂岩製で、直方体に近い形状を呈する。活用面は図示した1面に限られている。浅い刃器擦痕が直交方向に観察される。重量261.2gである。

4～8は鍛冶滓である。いずれも赤錆色を呈し、表面には多数の小気孔が存在する。このうち、4には青灰色で気孔が少なく、滑らかな表面を持つ面がある。また、6には砂質粘土が溶着した面がある。4は41.9g、5は39.0g、6は22.2g、7は10.1g、8は10.4gを量る。

A5－29出土遺物（第82図、図版16）

1～11は手捏ね土器である。1は口径8.1cm、器高2.9cmで、明褐色を呈する。一群中で最も大型品であるが、底部と体部の造形上の区別が意識されていない。掌上の粘土円盤の縁を、軽く持ち上げただけで体部を形成している。口縁部では薄くなるが、指で押さえた部分とそうでない部分がはっきり分かれており、大きなムラが生じている。全面にナデ調整が施される。2は口径6.5cm、器高2.8cmで、明褐色を呈する。粘土円盤を掌上で廻しながら、体部を立ち上げ、口縁は内湾気味に作っている。成形後は全体的にナデ調整され、平滑になっている。各所に焼成時の亀裂が入っている。3は口径6.3cm、器高3.0cmで、明褐色を呈する。作りや調整は2と基本的に変わらないが、体部から口縁にかけての厚みが薄くなり、特に口唇部





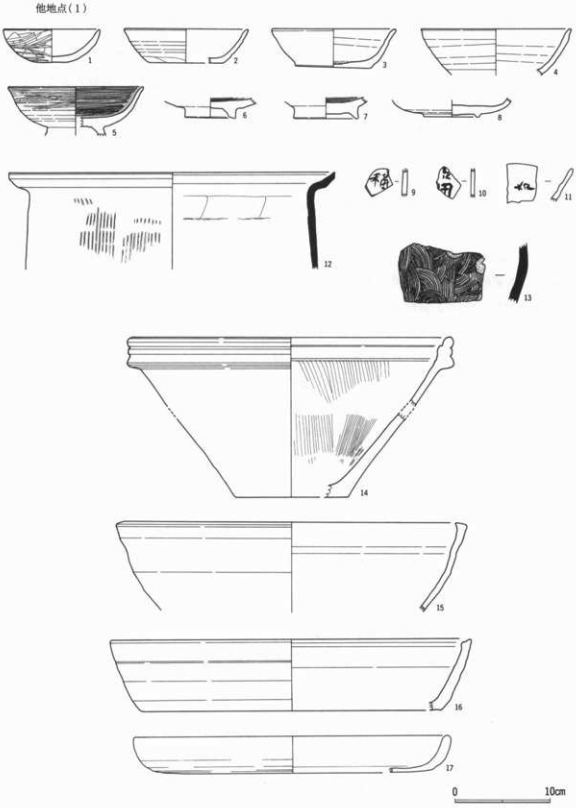
第82図　グリッド出土遺物実測図(2)

を摘み出して、全体にシャープな感じを引き立たせている。外面の各所に焼成時の亀裂が入っている。4は口径7.0cm、現高2.4cmで、赤褐色を呈する。1と同様に扁平な器形で、体部は十分に立ち上がらず、口縁は波打っている。口唇部は粘土を摘み出して稜を形成している。ナデ調整は全面になされ、表面が平滑になっている。5は口径6.8cm、器高2.0cmで、赤褐色を呈する。内面は赤色塗彩の痕跡がある。1～4とは異なり、底部よりも口縁の方が厚くなっている。内面や断面の様相から、口縁が内側に折り返されて、厚みを増していることが確認できる。成形後は全体にナデ調整され、平滑になっている。なお、底部外面にはヘラナデ痕が存在する。6は口径6.0cm、現高3.2cmで、明褐色を呈する。5と同様に、口縁が折り返され、厚みを増している。この土器の場合は、その結果、全体的に均一な厚みを確保している。ナデ調整は丁寧に行われている。7は口径4.8cm、器高2.5cmで、赤褐色を呈し、内外面に赤色塗彩の痕跡がある。作りや調整は2・3と同様である。体部を立ち上げてから、口縁を内湾気味にまとめ、口唇部で稜を形成している。ナデ調整は全体に行われるが、外面には粘土を延ばした際の皺が残っている。8は口径4.8cm、器高1.9cmで、明褐色を呈する。扁平な器形で、底部よりも口縁の方が厚くなっているが、胎土が砂っぽいことと、ナデ調整のために、成形法は不明である。9は口径5.8cm、現高2.1cmで、暗褐色を呈する。扁平な器形で、作りは基本的に1・4と変わらない。外面はナデ調整が行われているが、手捏ねの際の凹凸がよく残っている。口縁も口唇部が直立することなく、厚みや高さにムラがある。底部内面は指頭によってナデ調整され、平滑になっている。なお、器体を横断する粘土接合痕が観察され、内面ではそこから亀裂が生じている。10は口径5.8cm、現高3.0cmで、明褐色を呈する。胎土は砂っぽく、スコリアを多量に混入している。上記の土器群とは異なって、当初の口縁の上に粘土帯を貼り足して、最終的な口縁を成形している。弱いナデ調整が行われているが、外面には粘土接合痕が残り、内面には貼り足した粘土帯の端部が、そのまま放置されている。11は口径5.3cm、現高2.2cmで、赤褐色を呈する。作りや調整は5と同様である。口縁を折り返すことによって、底部よりも口縁の方が厚みがある。このタイプの土器は、2・3・7に比べて、元々薄い粘土円盤を素材に用いている。最終的なナデ調整によっても、折り返された口縁端は消されていない。

その他のグリッド出土遺物（第83図、第84図、図版16、図版17、図版18）

以上の4地点以外からも、遺物は散発的に採集されている。

1～8は杯類である。1はB4－35から出土した。口径11.8cm、器高3.0cm、底径3.2cmの小ぶりな土器で、赤褐色を呈する。小さい底部は僅かに上げ底になり、底部と体部の境は丸みを帯び、体部が湾曲しながら立ち上がる器形である。口縁は外反せず、単純に処理されている。体部外面は横方向のヘラケズリの後、細い工具による粗いヘラミガキが加えられ、内面は横ナデ調整されている。底部外面は体部とともに、ヘラケズリの後、ヘラミガキされている。体部に厚みがある点が特徴的である。2はB4－42から出土した。口径13.0cm、器高3.6cm、底径7.7cmで、暗褐色を呈する。浅い体部は湾曲気味に立ち上がり、口縁は僅かに外反している。口唇部は僅かに面取りされている。体部外面はロクロ目がよく残るが、内面はロクロナデで消されている。体部下端はヘラケズリで面取り調整されているが、底部と体部の境の稜は明確に残される。底部外面は静止糸切り後、周囲を手持ちヘラケズリしている。3はB4－65から出土した。口径13.0cm、器高3.9cm、底径7.9cmで、明褐色を呈する。体部は湾曲気味に立ち上がり、口縁は僅かに外反している。端部は丸く処理されている。成形時における底部粘土円盤と体部下端粘土紐との接合部が全くヘラケ



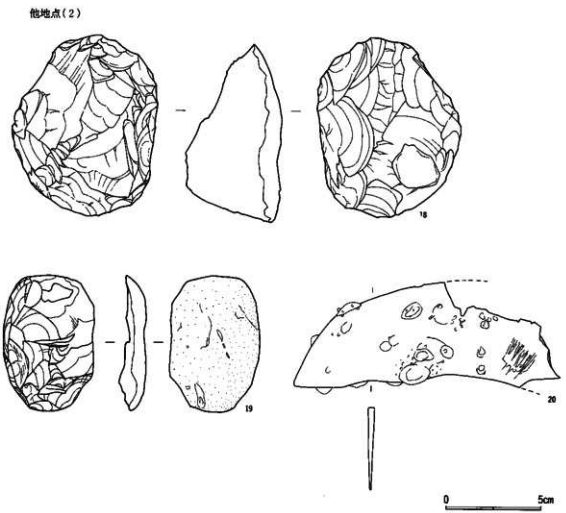
第83図　グリッド出土遺物実測図(3)

ズリされず、接合時の段差をそのまま残している。体部はロクロナデがかけられるが、内面にはまだロクロ目が残っている。底部外面は、回転糸切り後、無調整である。4はB4－45から出土した。推定口径15.6cm、現高4.9cmで、暗褐色を呈する。湾曲気味の体部は、口縁で摘み出され、僅かに外反している。体部はロクロナデされているが、内外面ともロクロ目を残している。外面下端はヘラケズリされている。5～8は高台付きの杯である。5はB4－51から出土した。口径14.0cm、現高5.2cmで、赤褐色を呈し、内面は黒色処理されている。椀形の器形で、底部が厚く、口縁が外反している。口唇部内面は僅かに段を形成している。高台は付け根が太く、開きは少ない。付け根の内側はヘラ先で押さえられている。体部内外面はロクロナデの後、細い工具によって横方向にヘラミガキされている。底部はナデ調整されている。6はA5－19から出土した。現高2.1cm、底径5.2cmで、赤褐色を呈し、内面は黒色処理されている。体部下端・底部外面はヘラケズリ調整され、内面は細い工具によってヘラミガキされている。高台は短いが、比較的太く、直立している。接地面は調整されて、中央に凹線が巡っている。7はB4－42から出土した。現高2.2cm、底径6.8cmで、赤褐色を呈し、内面は黒色処理されている。底部が厚い土器で、高台は短く、やや開き気味である。体部下端はロクロナデ調整され、内面は細い工具でヘラミガキされている。接地面は僅かに面取りされている。8はB4－64から出土した。現高2.1cm、底径5.8cmで、暗赤褐色を呈する。椀形の器形に、矮小な高台が伴っている。底部中央で厚みを増している。体部内外面ともにロクロナデされている。高台は削り出されて成形され、接地面はしっかり面取りされている。

9～11は墨書土器である。9はB4－65から出土した。赤褐色を呈する土師器杯の体部破片である。墨書は外面に書かれており、「稲」と読める。ツクリにおいて、上半最終画と下半第1画を、一筆で表現している書体である。10はB4－55から出土した。赤褐色を呈する土師器杯の体部破片である。墨書は外面に書かれている。2文字分確認できるが、第1字の上半と第2字の下半を欠失している。第2字は「田」であろうか。11はB1－76から出土した。赤褐色を呈する土師器杯の口縁部破片である。墨書は外面に、横向きに、小さく書かれている。2文字分あり、第2字下のスペースの広さからみて、これで完結しているのであろう。第1字目は「大」である。第2字は第1画の縦線が不必要に延びているが、くにがまえの文字になるであろう。すると、くにがまえに「丶」という字はあり得ないから、「日」と読むべきであろう。すなわち、この墨書は「大日」である。訓みは「オホヒ」または「ダイニチ」と読める。前者ならば地名の可能性が高い(例えば、太日川のように)。また、後者ならば、大日如来もしくは大日経を意味している。特定の仏尊名もしくは経典名が墨書された例としては、県内では、千葉市鐘つき堂遺跡から出土した「釈迦寺」に次いで2例目となる。

12･13は須恵器甕である。12はB4－67から出土した。口径17.0cm、現高9.9cmで、黄褐色を呈する生焼け製品である。短い口縁は外反して、下側に粘土帯を貼り付け二重口縁を成形している。その際、横ナデによって粘土帯の上下の稜を強調している。また、口唇部も鋭く稜をなしている。頸部を作らずに、口縁直下から胴部になるバケツ形の器形である。胴部最大径は上位にくる。胴部外面は平行タタキ目が施され、内面はヘラナデされている。13はB1－77から出土した胴部破片である。青灰色を呈する。外面は同心円文状のタタキ目が密に施され、内面はナデ調整され、無文である。

14は擂鉢で、B4－44、B4－80から出土した。口径33.0cm、推定底径12.0cmで、暗褐色を呈するが、底部内面は黄褐色になっている。底部と体部の境の稜は明瞭で、体部は直線的に開く。口縁は外面下端に断面三角形の粘土帯を巡らせ、手掛かりとし、その上位には凹線が2条巡っている。内面には蓋受けの小突起



第84図　グリッド出土遺物実測図(4)

を付している。端部はいずれも丸く処理されている。体部外面は回転ヘラケズリで仕上げられ、内面には底部に至るまで、縦方向のハケ目が施される。底部外面には回転糸切り痕が残っている。

15・16は内耳鍋である。15はB4－14から出土した。口径37.0cm、現高9.1cmで、暗褐色を呈する。体部は湾曲しながら立ち上がり、口縁下で内側へややくびれる。口縁は肥厚して、頂部に平坦面を形成し、口唇部は内側に短く突起している。口縁部周辺は横ナデされ、体部は内外面ともにロクロナデ仕上げである。なお、外面には煤が付着している。16はB4－43から出土した。口径38.0cm、現高7.3cmで、暗褐色を呈する。平底の底部から、体部が内湾気味に立ち上がる。口縁は単純で、内側には蓋受けが小さく突き出している。端部は丸く処理されている。体部はロクロナデ調整されているが、下端はヘラケズリされている。底部外面にはヘラケズリの痕跡が残っている。なお、体部内面には成形時の段差が残っている。

17は焙烙（ほうらく）で、B4－34から出土した。口径32.8cm、器高3.8cmで、暗褐色を呈する。大きく、

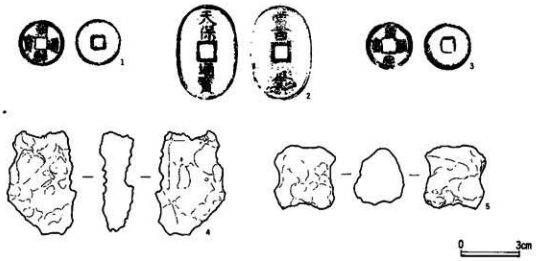
薄い底部から、浅い体部が湾曲しながら立ち上がる。口縁端は丸く処理されている。底部と体部の接合部は僅かにくぼんでいる。体部内外面ともにロクロナデされている。

18・19は打製石器である。18は握斧で、B2－77から出土した。表面は階段剝離によって成形し、基部は高さを残し、輪郭に丸みを持たせ、先端にはスクレイパー状の片刃を付けている。裏面はほぼ平坦である。砂岩製で、369.8ｇである。19はフレークで、B2－88から出土した。母岩表面を横方向から剝離した剝片である。チャート製で、57.0ｇである。

20は鏃で、B5－11から出土した。現長14.2cm、幅4.7cmで、重量53.5ｇを量る。先端部の破片だが、刃幅が広い点が特徴的である。刃部は摩耗している。残存部の基部寄りに、木質部の痕跡が融着している。

2　表面採集遺物（第85図、図版17）

1～3は青銅銭である。1は朝鮮通宝で、B3区から採集された。直径2.4cm、厚さ1.0㎜で、全面に緑青がかかっているが、遺存状況は良好である。陽鋳された文字の鋳上がりも良く、鮮明に判読できる。李氏朝鮮の世宗が、1,423年に初鋳した銭貨である。2は天保通宝で、B3区から採集された。長さ4.9cm、幅3.2cm、厚さ1.5㎜で、全面に緑青がかかっているが、遺存状態は良好である。陽鋳文字も鮮明だが、裏面は若干磨滅している。3は皇宋通宝で、A4区から採集された。直径2.5cm、厚さ0.9㎜で、全面に緑青がかかっているが、遺存状態は良好である。陽鋳文字は鮮明だが、文字の縁は丸みを帯びている。なお、中央の方孔とその縁帯の位置がずれている。南宋の理宗が1,253年に初鋳した銭貨である。



第85図　表採資料拓影図及び実測図

第4節　小　結

1　竪穴住居跡の土器編年（第86図）

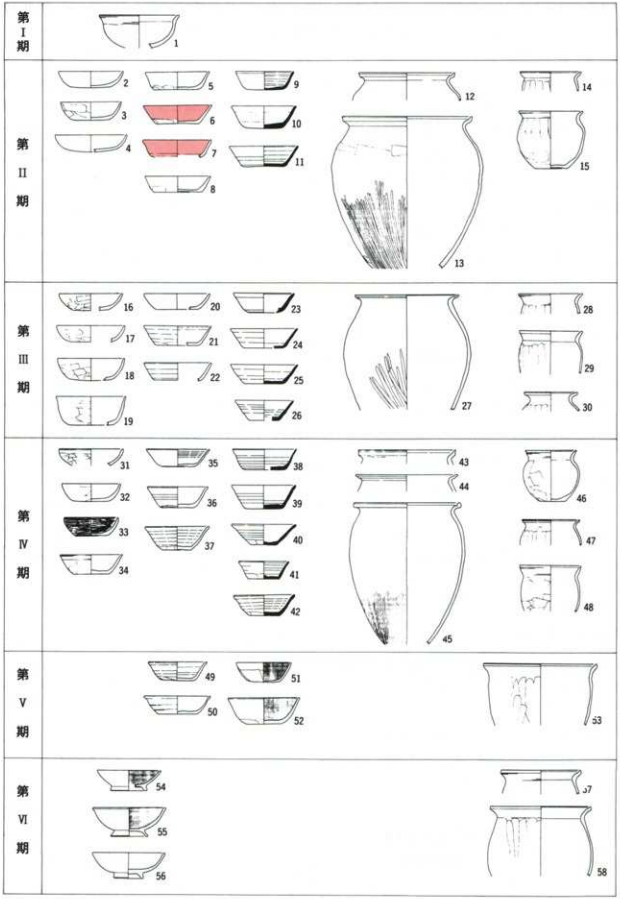
青山富ノ木遺跡における今次調査で検出された35軒の竪穴住居跡を時期分類する前提として、竪穴住居跡から出土した土器の編年は欠かせない作業であることはいうまでもない。土器の器種は多岐にわたっているが、系統的にその変遷を跡づけることのできる器種は比較的限定されている。土師器杯・須恵器杯(身)・土師器常総甕・土師器小型甕等がその中心となっている。ここでは、まずそれらの編年観を組み立てたうえで、付随する他器種や他遺物の時期的な特徴を概観してみたい。

第Ⅰ期　SI 24の1軒のみである。土師器杯(1)は深い椀形で、口縁が短く開いて、全体がヘルメット形を呈している。古墳時代後期初頭の一類型であり、5世紀後葉に比定できる。この時期の竪穴住居跡が1軒のみ孤立して建築されることは考えにくく、調査区外の周辺部に同時期の遺構が潜在している可能性が高い。

第Ⅱ期　SI 6・SI 17・SI 25・SI 29・SI 33等が該当する。第Ⅱ期・第Ⅲ期は今次調査区中で、竪穴住居が最も多く建てられる時期になっている。土師器杯は、丸底ないし丸底に近い平底を持つ、前代以来の製作技法を引き継いだA群(2～4)と、盤状杯と呼ばれる平底で体部の浅いB群(5～8)が併存している。前者は、体部が深く、ヘラケズリ調整されるもの(3)と、皿に近く、ナデ調整されるもの(4)がある。後者は、ナデ調整で、底部外面から体部下端がヘラケズリされるが、8にみるように、ロクロを使用して成形されていると考えられる。口縁端が外に開くもの(5)や、赤色塗彩されるもの(6・7)がある。須恵器杯は、体部と底部の境が丸みを帯び、ナデ調整が行き届くA群(9・10)が主体的である。また、盤状杯の祖型とみなされるような、底部が大きく、体部が浅いB群(11)も含まれている。土師器大型甕は、本期からⅣ期まで常総型が卓越している。本期の常総型の口縁は、口唇部が直立するタイプに限られている(12・13)。胴部最大径は、前代よりも概して上位にあるものが多い。土師器小型甕は、最大径が口縁にある長胴型(14)と、胴部が球形に近いもの(15)が併存している。口縁は強く横ナデされるものと、単純に丸みを帯びるものがある。本期は8世紀初頭から前葉にかけての時期に比定できる。

本期にはこのほかに、土師器甑・須恵器高杯・同甕等があり、土器以外では砥石が伴出している。

第Ⅲ期　SI 4・SI 14・SI 16・SI 19・SI 23・SI 28等が該当する。土師器杯は、前代同様、A群・B群の両系統が存続している。A群系では、前代同様、体部の浅い一群(16・17)と、深い一群(18・19)に分かれるが、ともに丁寧なナデ調整は省略されている。一方B群系では、前代以来の盤状杯も残存しているが(20)、主体は底部が僅かに縮小して、体部も僅かに深くなる器形(21・22)に変化する。このタイプは、A群系がナデ調整を省略されたことと対応して、ロクロ上で回転したままナデ調整が加えられている。須恵器杯も、前代のA群・B群の両系統が存続しているが、主体はB群系に移行する。本期のA群系は体部が大きく開く器形(23)に変化する。一方B群系では、顕著な変化を示さず、底部が若干縮小する程度に留まっている(24・25)。常総型甕は、口唇部が直立せずに、横に大きく開くもの(27)が現れる。土師器小型甕は、前代同様、長胴型(28・29)と、球形型(30)が併存している。前者の口縁は単純で、丸みを帯びるが、後者の口唇部は直立している。本期は8世紀前葉から中葉に比定できる。



第86図　主要器種編年図

本期にはこのほかに、土師器甑・須恵器杯蓋・同高台付盤・同長頸壺・同甕・小型台形土器・墨書土器片等があり、土器以外では、二面風字硯・転用硯・土製紡錘車・土製支脚・刀子・鉄鏃・釘・スラグ等が伴出している。

第Ⅳ期　SI 9・SI 20・SI 22等が該当する。土師器杯は、A群系では浅い皿形が後退し、底部と体部の境に稜を持つもの(33・34)が現れる。33はヘラミガキが多用され、34は口縁に強い横ナデが加えられる。B群系は前代以来の器形(35)も存続しているが、底部がさらに縮小して、体部もさらに深くなるもの(36・37)が主流を占める。このうち、体部が緩いS字状に開く37は後出的な要素である。このタイプは口縁直下が強く絞められ、口縁部が肥厚する傾向がみられる。須恵器杯は、A群系が消滅し、B群系のみになる。本期のB群系は底部がさらに縮小し、体部は外反度を強めて曲線的になる。本期中においても、39は古式に属し、40・42は後出的である。常総型甕は様々な口唇形態が林立している。直立するもの(43)、横に開くもの(44)、紐に押しつけているもの(45)等が存在する。土師器小型甕は、前代同様、長胴型と球形型が併存している。口縁形態は単純に丸みを帯びるものは消滅し、口唇部が何らかの形で変化を見せている。中でも46は口唇部外側に紐を押しつけて成形されており、常総型甕45とその点で共通している。本期は8世紀中葉から後葉に比定できる。

本期にはこのほかに、土師器薬壺・同甑・須恵器杯蓋・墨書土器等があり、土器以外では、鉄鏃・刀子・鎌等が伴出している。

第Ⅴ期　SI 2・SI 8等が該当する。土師器杯はA群系が消滅し、新たに内面が黒色処理されたC群が登場する。B群系(49・50)は体部が浅くなり、緩いS字状カーブを描いて大きく開き、厚みにムラが生じている。底部周縁から体部下端にかけてのヘラケズリ調整は存続している。C群(51・52)は内面が黒色処理され、体部から底部にかけて均質な厚みを持ち、体部と底部の境が丸みを帯びる点に特徴がある。大型品と小型品に分けられる。須恵器杯・常総型甕・土師器小型甕は本期以降消滅している。常総型甕と入れ替わるようにして、本期から土師器大型甕が登場する。53は口縁に最大径を持ち、口唇部が直立する長胴型である。本期は内面が黒色処理された土師器杯がメルクマールになり、9世紀中葉を中心とする時期を想定しておく。

本期にはこのほかに、墨書土器が伴出している。

第Ⅵ期　SI 5・SI 7・SI 34等が該当する。土師器杯は消滅して、高台付き椀(54・55・56)に入れ替わっている。内面が黒色処理された製品が混じっている。55・56のように、体部下半が膨らむ器形が標準的である。土師器大型甕は口唇部が直立し、58は最大径は、胴部中央やや上位にある。本期は土師器椀がメルクマールになるが、10世紀前半を想定しておく。

本期にはこのほかに、須恵器甕が伴出している。

2　竪穴住居跡の形態の変遷（第87図）

前項における土器編年を踏まえて、ここでは竪穴住居跡の形態変遷の過程を跡づける。その際、第Ⅰ期はSI 24の1軒のみで、絶対年代も第Ⅱ期以降とは大きく隔たっているので除外しておく。また、第Ⅴ期・第Ⅵ期についても、前後に連続する資料を欠いて時期的に孤立しており、例数の少ないことも相俟って、変遷過程における位置付けが困難になっている。したがって、いきおい第Ⅱ期から第Ⅳ期までの連続する期間の分析が中心とならざるを得ない。

第87図は時期別に該当する住居跡を掲げたものだが、上段は前項で検討した土器を出土した住居跡で、前項の結論が大過無ければ、その編年的位置付けにまちがいはないと思う。下段は遺物の出土をみない、または、編年資料に足る土器が出土しなかった住居跡を、上段を参考しながら組み込んだものである。検討方法は、まず上段資料から変遷過程の基調を読みとり、編年観を把握したうえで、下段資料の位置付けを説明していきたい。

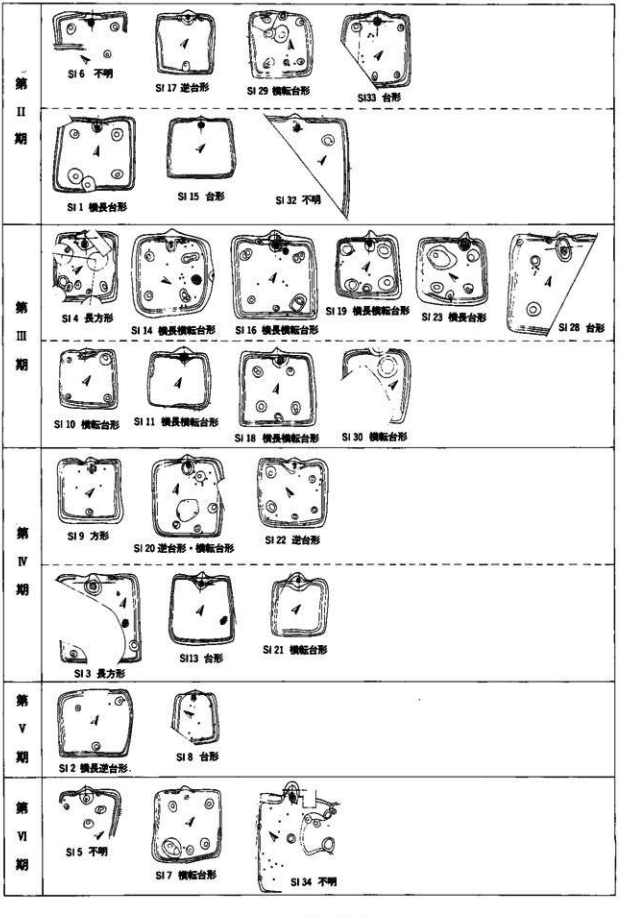
この図を一瞥して直ちに気づく点は、方形プランを持つ住居跡が1軒しか存在せず、ほかはすべて台形のバリエイションをもって表記されうることである。従来あまりにも安直に使用されてきた「方形」なる用語は、事実に反する不適切な表現であることが理解されよう。そして、第Ⅱ期から第Ⅳ期までの変遷過程の基調は、－対称性の喪失－という言葉で表すことができるかと思う。この時期以前にも、竪穴住居跡の対称性は、貯蔵穴の存在や変則的な竈配置等によって乱されてきた。しかし、ここで問題にしているのは、竪穴住居跡の平面プランそのものである。

第Ⅱ期の竪穴住居跡は形態変化に富み、標準形を定めがたい。その中で、SI 17の逆台形は第Ⅳ期に多出しており、また、SI 29の横転台形は第Ⅲ期の標準形になっている。こうした消去法的処理から、本期の標準形となりうるのはSI 33の台形ではなかろうか。その竈左脇（煙道部から見て）の壁が僅かに内側へ食い込んでいるが、平面プランの全体的な対称性はまだ保持されている。

第Ⅲ期は横長横転台形が主流を占めており、この形態が本期の標準形であることが理解される。SI 23は横長台形であるが、周溝によって画される床面プランは横長横転台形になっている。また、SI 14の竈は当初北西壁に設置されていたが、それを基準にしてこの住居跡の形態をとらえると台形となって、第Ⅱ期に属することになる。この事例は、第Ⅱ期では正台形プランの上辺に竈が設置されていたのが、第Ⅲ期に入ると、正台形プランそのものは崩さずに、その側辺に竈が付設されるように変化したことを証明するものではあるまいか。第Ⅱ期には健在であった対称性の喪失は、正台形を横転させることによって引き起こされたと考えられる。そして、この時期から竈周辺の壁線に微妙な変化が現れる。すなわち、SI 19にみられるように、竈脇の壁が内側に食い込み、そこからコーナーまでの壁は、逆に外側へ張り出す現象が発生する。この変化は次期に至ってますます顕著となる。なお、本期はSI 19やSI 23にみるように、竈が壁中央部をはずれて設置される場合が少なくない。

第Ⅳ期の特色は逆台形プランの登場である。SI 9は掘込みプランは方形だが、床面プランは逆台形になっている。また、SI 20は掘込みプランは逆台形とも横転台形ともみなせるが、床面プランは横転台形を呈し、前期以来の古式を伝えている。竈周辺の壁線に出入りがみられないことも、そのことを支持していよう。本期の典型例はSI 22によって示されている。逆台形プランを持ち、竈左脇の壁線の出入りが、前期のSI 19よりもさらに顕著になり、波状を呈するに至る。この現象はSI 9にも共通して現れているが、張り出し部がSI 22よりも直線的である。ところで、平面プランが横転台形から逆台形に移行したことによって、対称性が回復されたとは一概には言えない。それは、本期においては波状壁線が、竈の両側に等しく現れるのではなく、いずれか一方に偏って形成される例が多いからである。本期の後続期にそれがどのように変化していくかは、今次調査ではその時期が欠落しているので、残念ながら不明である。

第Ⅴ期・第Ⅵ期については、前述のように時期的に孤立し例数も少ないので、大まかな傾向を述べるにとどめたい。平面プランについては、第Ⅴ期のSI 2や第Ⅵ期のSI 7は第Ⅲ期・第Ⅳ期の系譜を引くものであろう。第Ⅴ期のSI 8は対称性を回復しているが、これがどこまで一般化できるのかはわからない。また、



第87図　竪穴住居跡編年図

壁線の波状化現象は第Ⅴ期以降は消滅していると考えてよいかもしれない。

次に、遺物の出土をみない、または、編年資料に足る土器が出土しなかった竪穴住居跡の時期分類について説明する。第Ⅱ期には、SI 1・SI 15等の台形プランを持つ一群が所属すると思われる。このうち、SI 1の竈左壁が外に張り出しているが、この点を重視して次期に含ませる可能性もある。第Ⅲ期には、SI 10・SI 11・SI 18・SI 30等の横転台形、もしくは横長横転台形プランを持つ一群が相当するであろう。これらの住居跡には、竈の壁線にまだ顕著な出入りがみられないことも次期には下らせない理由となっている。第Ⅳ期には、SI 3・SI 13・SI 21等が含まれるであろう。これらは平面プランはまちまちであるが、いずれも壁線の波状化が発達している点を重視した。

最後に、以上に検討してきた竪穴住居跡の編年と、土器編年との相関関係について論じておこう。土器編年から時期確定された竪穴住居跡の中には、竪穴住居跡自体の編年観からみれば、その時期には適合しない事例が含まれていた。たとえば、土器編年上第Ⅱ期に比定されるSI 17・SI 29等は、平面プランの形態からは、第Ⅲ期に比定されなければならない。また、同じく土器編年上第Ⅳ期に比定されたSI 20は、壁線の波状化が未発達な点から、第Ⅲ期に含ませるべきである。こうしたずれは、土器編年と竪穴住居跡編年という2つのスタンダードを駆使した場合、ある程度は必然的に発生する事態であろう。SI 17・SI 29の場合は、土器の方が古く、住居跡の方が新しい。この場合は、第Ⅲ期に新築された住居に、第Ⅱ期の古い土器がそのまま持ち込まれたケースである。一方、SI 20の場合は、土器の方が新しく、住居跡の方が古い。この場合は、土器の様相が第Ⅲ期から第Ⅳ期へ更新しても、住人は相変わらず第Ⅲ期の古い住居を使用していたケースである。これを竪穴住居跡の存続期間の問題として一般化すれば、土器様相の変化を基準として、前者は短期間で廃絶され、後者は長期間使用されていたということができる。この原理を集落跡調査における単位集団の分析に応用すれば、集団内部の消長－構造変化を展望する有力な手段となるであろう。

3　掘立柱建物跡群について

掘立柱建物跡は12軒検出されたが、第3章で述べたように、これらはSB 10～SB 12の北群とSB 1～SB 9の南群から構成されている。両群の特徴は、柱穴については、北群は基本的プランが円形で、直径が1mを超えるものが多いのに対して、南群は基本的プランは長方形または隅丸長方形で、長辺でも1mを超えるものは僅かである。また、建物方位については、北群は西に傾くものが多いのに対して、南群は正南北、または東に傾く物が多数を占めている。

さらに、建物方位から両群の建物跡を細分して、同時期に併存していたグループを検出してみよう（第1表）。北群についてはSB 11・SB 12がほぼ向きを同じくしており、重複もしていないので同時性が考えられる。南群については正南北を向くSB 2・SB 3・SB 8がグループを形成する。これにほぼ等しいSB 9も含めることができる。また、SB 5もこれらと直交するので、同一グループとみなすことができよう。これらの建物跡の重複関係をみると、SB 8・SB 9は孤立しているが、SB 2・SB 3・SB 5は重複している。したがって、SB 8・SB 9とSB 2・SB 3・SB 5のうちいずれか1棟が同時期に併存していたのであろう。南群のもう一つのグループはSB 1・SB 2である。この2棟の柱穴プランは、さきのグループのそれと比べて丸みを帯びている。これらは重複していないので、同時性が考えられる。両グループは重複しているが、その先後関係は不明である。これら二つのグループに属さないのがSB 6とSB 7である。こ

SB 1	N—7°—E	SB 7	N—78°—E
SB 2	N—0°	SB 8	N—0°
SB 3	N—0°	SB 9	N—1°—W
SB 4	N—7°—E	SB 10	N—40°—E
SB 5	N—90°	SB 11	N—47°—W
SB 6	N—43°—E	SB 12	N—48°—W

第1表　掘立柱建物跡方位表

のうちSB 6は北群のグループと直交している。この建物の北コーナーの柱穴プランは大口径の円形であり、ほかの柱穴についても、この周辺は削平されているので、本来の規模や形態をそのまま残しているかはっきりしない。したがって、SB 6が北群に属する可能性は十分あると考えられる。

次に掘立柱建物群の建築時期についてふれておく。北群については伴出資料が乏しく、出土遺物から時期を推定することは困難である。SB 10は第Ⅲ期のSI 4を、また、SB 11は同じく第Ⅲ期のSI 30を切っている。このことから、その上限が第Ⅲ期すなわち8世紀前葉から中葉にあることがわかる。また、竪穴住居跡の竈が北西を向くものがほとんどで、北群の掘立柱建物群も北西に面していることから、竪穴住居跡の新しい一群と北群の掘立柱建物群が同時期に併存していた可能性は考えられる。ここではその時期を第Ⅳ期以降第Ⅵ期までの期間、すなわち8世紀中葉から10世紀前半のある時期と推定する。一方、南群については伴出資料に比較的恵まれている。SB 1には15世紀後半の古瀬戸擂鉢が、SB 2～SB 5には15世紀前半の古瀬戸折縁深皿、15世紀後半の古瀬戸腰折皿・常滑甕がそれぞれ伴出した。このことから南群の主要建物群が建設された時期は15世紀後半と考えられる。

青山富ノ木遺跡の南西に接して、現在の青山集落が位置している。今回検出された南群の掘立柱建物群は、開発初期の青山集落の一部と考えられる。

第３章　鎌部長峯遺跡

第１節　調査の概要（第88図、第89図）

鎌部長峯遺跡は、鎌部集落のある舌状台地の、集落から700m程北方の、突端に近い支丘上に展開する遺跡である。今回の調査地は遺跡の中央付近を占めるが、支丘上の最高所を既にはずれた細尾根の付け根付近に所在する。そのため、調査区内では平坦地には恵まれず、北西・北東・南西の３方向への傾斜面を包摂している。遺跡の周囲は南側を除いて谷津田が入り込んでいる。この谷津田を挟んで北東に対向する名木の台地上には、本事業に関連して調査された一連の遺跡が点在している。また、西側の台地には青山富ノ木遺跡が所在している。

調査対象区には、公共座標に基づいて40mピッチで基準杭を打ち込み、グリッドを設定した。大グリッドは40m×40mで、それを４m×４mの小グリッドに100分割した。

発掘調査は、平成３年度に実施され、調査対象面積は3,380㎡である。上層確認調査は448㎡（13.3%）発掘し、その結果、遺物包含層と竪穴住居跡周辺の660㎡が上層本調査対象区域とされた。また、下層確認調査は120㎡（3.6%）発掘したが、旧石器時代遺物包含層は検出されず、本調査の必要性は認められなかった。

上層本調査の成果は、縄文時代早期を中心とする遺物包含層１か所、平安時代竪穴住居跡２軒、土坑５基である。

第２節　縄文時代遺物包含層と出土遺物

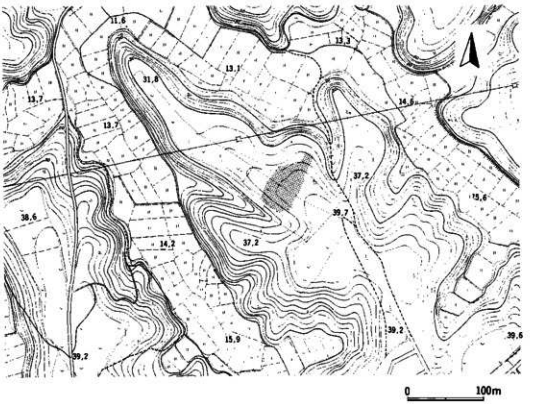
１　遺物包含層の状況（第90図、図版20）

上層確認調査中に、調査区南東部のグリッド群において、第Ⅱ層中から縄文時代早期土器片や焼礫が出土したので、遺物包含層として認定し、包含層範囲については、第Ⅲ層直上まで手掘りで発掘し、遺構の有無を確認するとともに、遺物の検出につとめた。

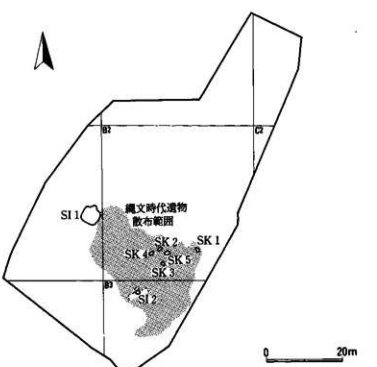
遺物包含層は調査区内の台地最高所を中心に、北西－南東方向の尾根上に広がっている。北西側ではその末端を確認し得たが、南東側では調査区外にまだ延びていることが想定される。

遺物分布の状況は、南東部の調査境界線付近が最も濃密で、北西に向かって次第に希薄になっている。また、包含層の南北では、台地斜面にかかり、標高が下がるので、遺物分布は希薄になる。

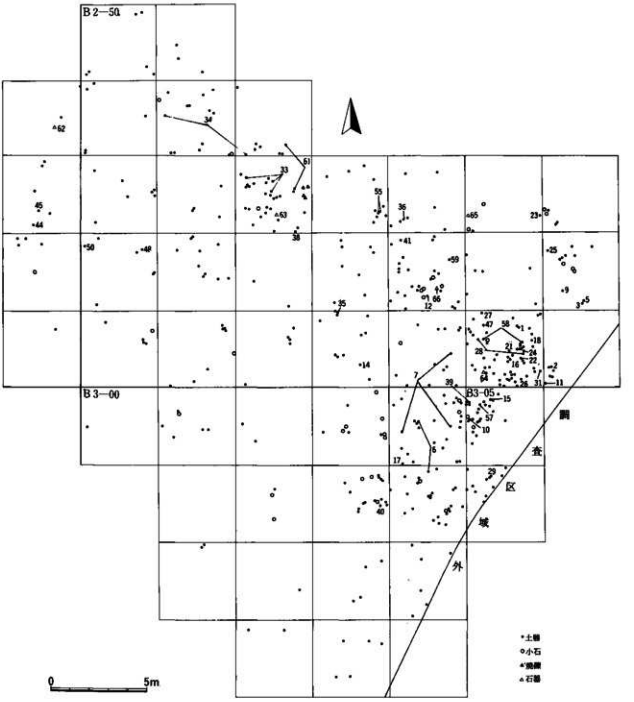
遺物の内容は、縄文時代土器片、石器、小石、焼礫等である。その内訳は、土器片564点、石器５点、小石38点、焼礫４点となっている。それぞれの分布傾向としては、土器片は最も普遍的な遺物で、全域を網羅している。時期別では早期が主体的であり、その中に中期・後期の土器片が散発的に混入している。石器は１点１点が孤立しており、少数ということもあって、特定の傾向を把握することはできない。小石は全般的には土器片の分布様相と軌を一にするが、B2－84、B3－03等にある程度の集中性を見せている。ま



第88図　遺跡周辺の地形図



第89図　遺構等配置図



第90図　縄文時代遺物出土状況

た、焼礫はB2－72から集中的に出土している。

2　出土遺物（第91図、第92図、図版23、図版24、図版25）

1～41、57～61は縄文時代早期の土器群である。

1～32は田戸下層式である。

1～5は口縁部破片である。1～3は太沈線で口縁上端を横位沈線を巡らせて区切り、以下に縦条線と弧条線が施文されている。内面はミガキがかかっている。4は口縁に鋸歯状の太沈線が配された例である。5は同じく口縁に、縦の太条線が巡っている。6・7は太条線の下位に横位の細条線が、さらにその下位に、横長の鋸歯状太沈線が見られる。8は縦位太条線の下位に横位条線が、さらにその下位に、連続爪形文が配されている。9は斜行太沈線と横位条線が組み合わされている。10は斜行と弧状の太条線文帯の下位に、横位太条線が巡っている。11は鋸歯状太条線の一部である。12～14は横位区画に、弧状短沈線が充塡されている例で、14には貝殻腹縁文も観察される。15・16は横位太沈線と綾杉状刻文の組み合わせでる。17は連続刺突文と横位太沈線、18は綾杉状刻文と横位条線の組み合わせでる。19は横位条線間に横位刻文が挿入された例で、胎土に白色礫が混入している。。20は口縁上部文様に刺突文を配し、横位条線で区画している。21～24は横位沈線区画に、貝殻腹縁文を横位に充塡した例で、21は胎土に白色礫が混入している。22には連続刺突文、23には縦位刻文を伴っている。25・26は横位沈線の例である。27～30は口縁部破片である。27～29は波状口縁の口唇に沿って二本組沈線が施されている。このうち、27・28の波頂付近には、縦位刻文が見られる。30は綾杉状の沈線文である。31・32には横位沈線の下位に格子目沈線を配している。

33～38は無文土器群で、いずれも口縁部破片である。

33は口径25.8cmで、外反せずに直線的に立ち上がる。口唇部には連続刻文を巡らせている。胎土には繊維が混入している。34は口唇部が外削ぎ状で、内縁に刻み目を有する。断面形状は直線的で、外面には横方向のナデツケ痕が残されている。35は口唇部に連続刺突文を巡らせている。36は口縁が外反し、断面形状はやや外削ぎとなる。内外面ともにミガキがかかっている。37は直線的に立ち上がる口縁で、口唇部は角頭状を呈し、内縁はやや削がれている。38は36同様、口縁が外反している。

39は三戸式の条痕文土器である。40・41は子母口式で、内外面に擦痕を有し、胎土に繊維を含んでいる。

57～61は縄文時代早期の土器底部破片である。

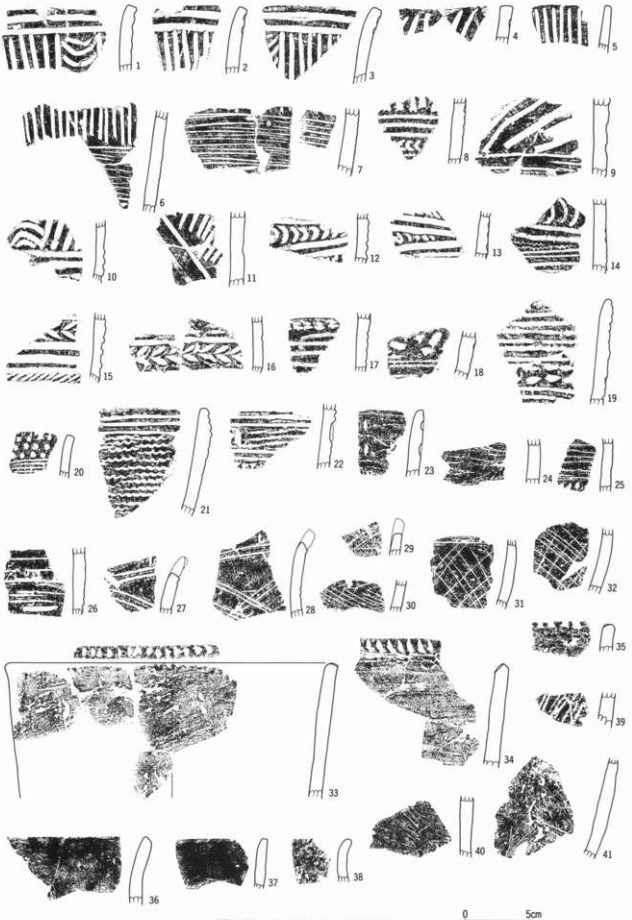
57は田戸下層式の、天狗の鼻状を呈する尖底である。58～60は砲弾形を呈する尖底である。58の胎土には白色礫が混入し、59の胎土には繊維が含まれている。61は平底で、推定底径15.0cmを計る。胎土には若干の繊維が含まれている。

42～51は縄文時代中期の土器群である。

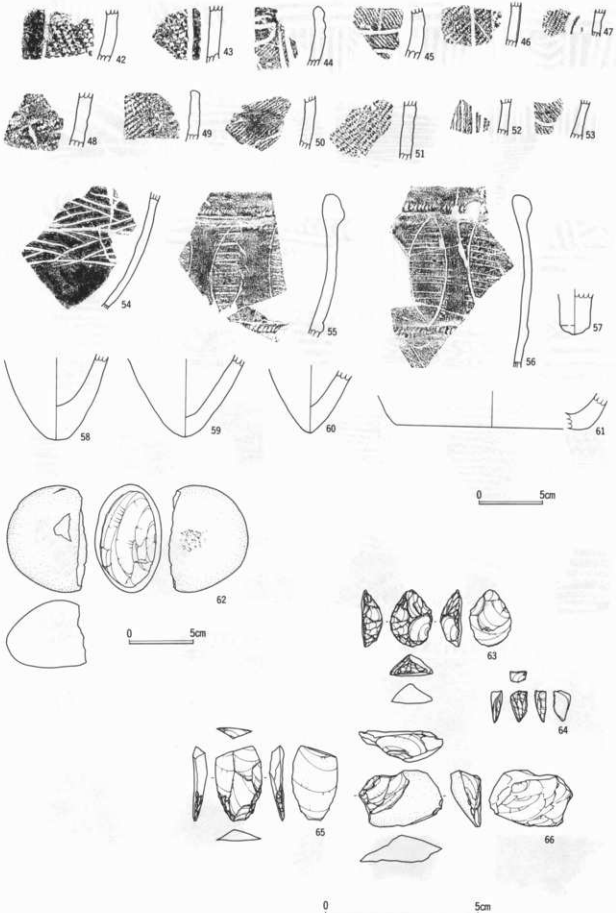
42・43は縦方向の斜縄文を地文とし、縦走する無文帯が沈線によって区画されている。加曽利ＥⅡ式併行の土器群である。44～46は横位斜縄文の地文上に、沈線が施される土器群である。44は口縁部破片で、口縁直下に横位沈線が巡り、その下位は縦位沈線で区画され、波状線が垂下している。器形はやや膨らむキャリパー状となる。45は44と同一個体である。46は縄文の地文に、断面円形の隆起線が貼付されている。46～51は地文に斜縄文が施文されている。

52～56は縄文時代後・晩期の土器群である。

52・53は条線文を地文とする土器群である。52では条線は縦走し、53では斜行条線上に弧状沈線が観察



第91図　包含層出土遺物(1)



第92図　包含層出土遺物(2)

される。54は大きく開く器形で、鋸歯状条線が2段にわたって横走している。内面には粗い縦方向のミガキ痕が残されている。加曽利B式の鉢形土器である。55・56は後期安行式の紐線文土器群である。口縁を外側に折り返して二重口縁を形成し、その下端に連続刻み目を巡らせている。横位条線を地文とし、レンズ形弧線によって区画して、その間を磨消して縦長の木の葉状文を形成している。胴部には斜行条線が見られる。また、胎土には白色礫が混入している。

62～66は石器である。62は縄文時代、63～66は旧石器時代に属している。

62は敲石で、裏面の平坦面に浅い敲打痕が観察される。砂岩製で、104.7gを量る。63はスクレイパーで、黒曜石製である。尖頭部を作り出した円形スクレイパーである。裏面には素材となった剝片の主要剝離面が残されているが、素材は斜位に用いられているようである。急角度調整は丁寧に、左側縁から下縁にかけて施されているが、右側縁にはやや大振りな剝離痕が、丁寧な細かい剝離面を切っている。5.2gを量る。64は黒曜石製の細石刃核である。小型で稜柱形を呈する。打面は作業面方向からの剝離によって形成され、打面調整は施されていない。作業面には5～6枚の細石刃剝離痕が観察され、一部打点の見られないものもあることから、打面再生が行われていたことがわかる。作業面の頭部には、細石刃剝離痕の稜を潰すような頭部調整が施されている。背面は自然面が残り、打面・作業面以外には左側面に一部素材時の剝離痕が観察されるのみである。いわゆる「野辺山型」の範疇に入る。0.9gを量る。65はナイフ形石器で、頁岩製である。上半部を欠損したナイフ形石器である。縦長剝片を素材とし、基部両側縁にやや浅い調整が施されている。6.1gを量る。66は安山岩製のフレークである。背面に自然面を有する幅広の剝片である。17.8gを量る。

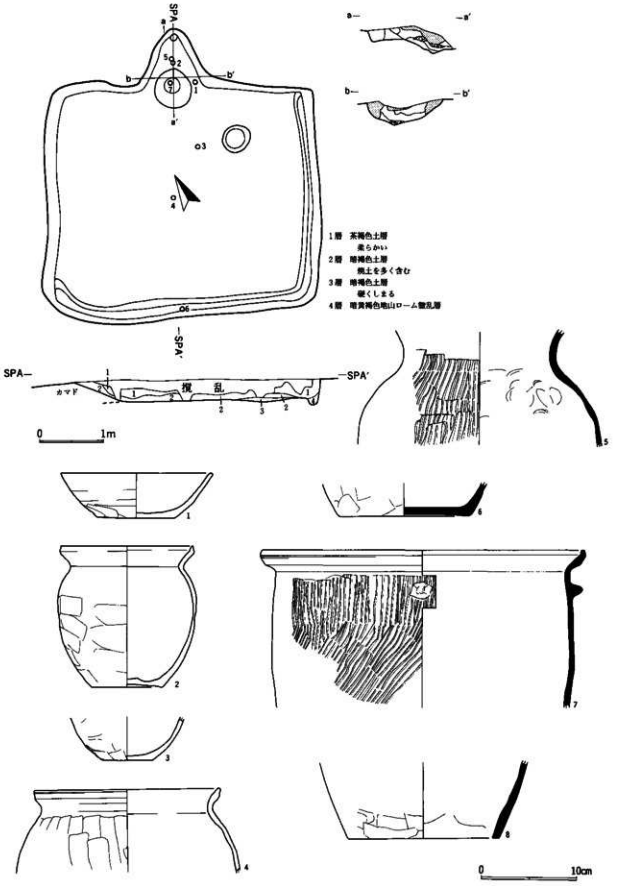
土器の様相について総括しておく。出土した縄文土器片総数は564点に達する。その内訳は、早期538点（95.4%）、中期16点（2.8%）、後・晩期10点（1.8%）であり、早期が圧倒的多数を占めている。早期の内訳は、田戸下層有文土器175点、繊維入り無文土器13点、子母口式土器4点、無文土器346点となっている。このうち、無文土器の大半は田戸下層式と思われ、その有文土器を合わせると、総点数の92.4%を占めることになる。したがって、本包含層は田戸下層式の時代を中心に形成されたものと考えられる。

なお、焼礫は熱を受けて赤変した自然石が破砕した礫片で、自然面を保ち、現状では3cm前後の大きさである。また、小石には破砕礫と自然石が含まれている。破砕礫の大きさは5cm前後が中心であり、自然石の大きさは2～3cmの小型のものが多い。

第3節　平安時代竪穴住居跡と出土遺物

SI 1（第93図、図版21、図版25）

遺構　縄文時代遺物包含層の北西部に接した位置に所在し、台地の細尾根上に立地している。南東壁を上辺とし、北西壁を下辺とする横転台形プランを呈し、竈は北東壁のやや北寄りに設置されている。北東壁の北側煙道形成部は内側にせり出している。西コーナーは丸みを持っている。上辺3.3m、下辺3.5m、幅4.2mの規模を有する。周溝は南側の2壁で確認された。柱穴は東コーナー寄りに1か所のみ検出されている。住居跡覆土は大きく撹乱を受けていたが、床面付近には焼土が一面に堆積しており、火災を被っていることを示している。竈の遺存状態はやや不良である。両袖部は基部が残存し、燃焼部の円形ピットは壁



第93図　SI 1　遺構・遺物実測図

より外側に出ており、煙道部の張り出しは長く延びている。

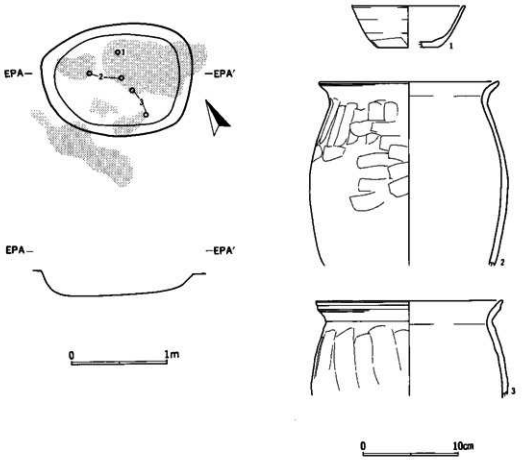
遺物　1は杯で、竈内から出土した。口径15.9cm、器高4.6cm、底径8.1cmで、赤褐色を呈する。広い底部から、体部が湾曲しながら大きく開く器形で、口縁は単純に処理されている。体部内外面はロクロナデで調整されるが、外面にはまだ弱いロクロ目が残っている。下端部はヘラケズリによって厚みを減じている。底部外面は手持ちヘラケズリで切り離し痕を消している。

2～6は甕である。2は竈内から出土した。口径13.8cm、器高14.5cm、底径7.3cmで、赤褐色を呈する。口縁は端部付近で内屈し、頸部は「く」字状に強くくびれて胴部に至る。胴部最大径は上位にあって腰高の器形を呈し、底部は上げ底となっている。口縁部は強い横ナデによって、口唇部は短く直立する。胴部外面はナデの後、中位以下を粗い横方向のヘラケズリで調整されている。胴部上半と下半の接合部では、器壁が薄くなっている。底部内面は調整不十分で、凹凸が目立つ。3は竈正面の覆土下層から出土した。現高4.5cm、底径5.1cmで、赤褐色を呈する。胴部は底部から湾曲しながら立ち上がる。外面は粗く、横方向にヘラケズリされるが、下端部は丁寧に調整されて厚みを減じている。内面はナデられている。4は床面中央付近の覆土下層から出土した。口径19.3cm、現高8.4cmで、暗褐色を呈する。短い口縁は穏やかに外反してから、屈折して直立し、外面には稜線を形成する。口唇部は僅かに外反している。胴部は大きく膨らんで最大径に至る。胴部外面には縦方向のヘラケズリが施されている。5・6は須恵器である。5は竈内から出土した。現高11.6cmを計り、明褐色を呈する。頸部が絞られて、長い口縁が穏やかに開くタイプである。胴部はなで肩気味で、最大径を上位に持つ腰高の器形となる。口縁部は横ナデされ、頸部以下は平行タタキ目が、縦方向に密に施されている。肩部内面には、指頭圧痕が観察される。また、胎土には雲母が混入している。6は南西壁際中央の覆土中から出土した。現高3.4cm、底径14.0cmで、明褐色を呈する。上げ底の底部から、胴部が直線的に開いている。胴部外面はヘラケズリがみられ、内面はナデ仕上げ、底部外面もナデ調整されている。

7・8は須恵器甑である。7は竈内から出土した。口径33.8cm、現高16.2cmで、赤褐色を呈する生焼け製品である。残存部分の胴部最上位に、1個の把手が貼付されている。短い口縁は直線的に開き、口唇部で直立する。口縁の外側には、断面三角形の粘土帯を巡らせ、二重口縁の効果を引き出している。胴部はほとんど膨らまず、最上位に最大径を作って、緩やかに下端へ移行する。把手は指頭によって円錐状に成形され、胴部の器面調整後に貼付されている。胴部外面は平行タタキ目調整が行われ、最上位は縦方向、以下は斜め方向に施される。8は覆土中から採集された。現高7.9cm、底径15.8cmで、赤褐色を呈する生焼け製品である。7と同一個体の可能性はあるが、接合はしない。胴部は下端部付近で、厚みを増している。下端部内面には、面取り調整は行われず、単に接地面を平滑に仕上げているのみである。胴部内外面はヘラナデ処理されており、外面下端部付近は、横方向にヘラケズリされている。

SI 2（第94図、図版21、図版25）

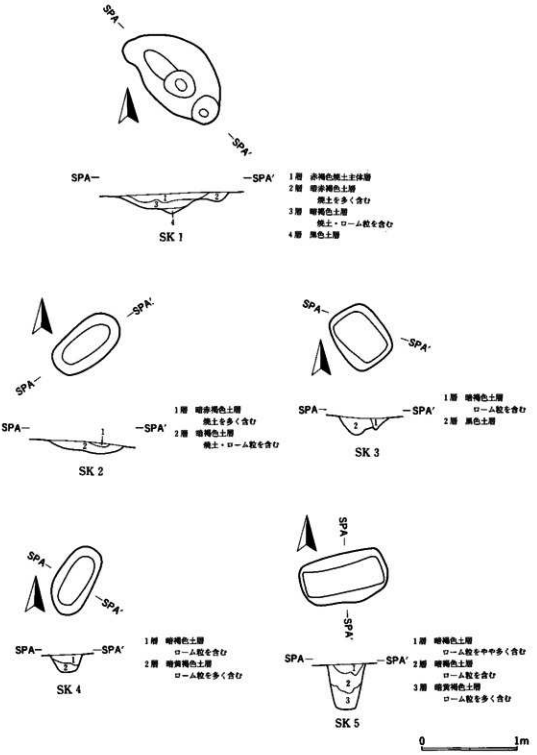
遺構　調査区の南東に所在し、南側は台地傾斜面にかかっている。遺存状態は極めて不良で、竈の一部を検出し得たにとどまる。明確な遺構は竈燃焼部の船型ピットである。遺構の所在は、竈材である焼土混じりの山砂散布域の発見を通して確認された。山砂は遺構直上、及び南西側縁に沿って帯状に散布している。このことから、消滅した竈は船型ピットを中心にして、南西側と北東側に袖を構築し、北西に煙道部を作っていたことが推定される。



第94図　SI 2 遺構・遺物実測図

遺物　船型ピット内からは、遺物が検出された。1は杯で、口径11.8cm、器高4.4cm、底径6.4cmで、赤褐色を呈する。深い体部がやや内湾気味に立ち上がる器形である。口唇部は僅かに面取りされている。体部調整はロクロナデだが、外面にはまだ弱いロクロ目が残っている。体部下端はヘラケズリで厚みを減じている。

2・3は甕である。2は口径18.8cm、現高19.0cmで、赤褐色を呈する。短い口縁は大きく外反している。口唇部は形状変化を示さず、単純にまとめられている。胴部はなで肩で、最大径は中位やや上部にある。胴部外面はナデの後に、上位を縦方向、中位を横方向のヘラケズリで仕上げている。3は口径19.6cm、現高9.7cmで、赤褐色を呈する。口縁は直線的に開くが、外周に断面三角形の粘土帯を貼り付けて、稜線を形成している。胴部はなで肩で、最大径を中位やや上部に持つ。胴部外面には縦方向のヘラケズリが施されている。


SPA
SPA'
1層 赤褐色粘土主体層
2層 暗赤褐色土層
焼土を多く含む
3層 暗褐色土層
焼土・ローム粒を含む
4層 黒色土層
SK 1
1層 暗赤褐色土層
焼土を多く含む
2層 暗褐色土層
焼土・ローム粒を含む
SK 2
1層 暗褐色土層
ローム粒を含む
2層 黒色土層
SK 3
1層 暗褐色土層
ローム粒を含む
2層 暗黄褐色土層
ローム粒を多く含む
SK 4
1層 暗褐色土層
ローム粒をやや多く含む
2層 暗褐色土層
ローム粒を含む
3層 暗黄褐色土層
ローム粒を多く含む
SK 5
0
1m

第95図　土坑実測図

第4節　土　坑

5基の土坑が調査された。すべて縄文時代遺物包含層の範囲内に所在する。B2大グリッドの南部に集中し、いずれからも遺物は検出されなかった。

SK 1（第95図、図版21）

不整楕円形プランで、長径1.2m、短径0.7mの規模である。中央部と南端に小ピットを有している。覆土は中央最深部が黒色土のほかは、焼土が主体的である。

SK 2（第95図、図版22）

略楕円形プランを呈し、長径0.7m、短径0.4mを計る。覆土には焼土が多く混入している。

SK 3（第95図、図版22）

0.65m×0.5mの長方形プランを有する。底面には凹凸がある。覆土はローム粒を含む暗褐色土が中心で、SK 4、SK 5とも共通している。

SK 4（第95図、図版22）

略楕円形プランを示し、長径0.8m、短径0.4mを計る。

SK 5（第95図、図版22）

長方形プランを呈し、0.9m×0.5mの規模である。

第5節　小　結

今回の調査では、縄文時代早期田戸下層式の時期を中心に形成された遺物包含層と、平安時代の竪穴住居跡2軒、土坑5基が明らかになった。

遺物包含層については、今回の調査で全貌が明かされたわけではない。土器片を主体とする遺物の分布状況は、調査区南東の台地中心部にその中心があることを暗示している。遺物中に焼礫が含まれ、さらに、包含層下から検出された土坑群が縄文時代に属するものとすれば、その一部の覆土中に焼土が含まれていることから、包含層と炉穴群の組み合わせも十分考えられるところである。

平安時代の竪穴住居跡についても、本調査区が台地突端部近く位置していることから、検出された2軒にとどまることなく、台地中心部に住居跡群、すなわち集落本体が展開しているものと推察される。SI 1の竈が北東壁に設置される一方で、復原されるSI 2の竈が北西壁に設置されているという差異は、集落本体の調査を待たなければ明らかにならない。

第4章　まとめ

—周辺地域の考古学的成果—

青山富ノ木遺跡をはじめとする一連の調査成果によって、当地域における考古学的諸事実を解明することを通して、小支台ごとの歴史的な特徴も明らかになってきた。すなわち、名木支台では古墳時代後期から奈良時代にかけての集落跡が卓越し、鎌部支台では1地点のみではあるが縄文時代遺跡が存在し、青山支台以南の内陸部に入ると、奈良平安時代集落跡が増加する。さらに中世になると、北部の名木や青山には、掘立柱建物群が広範に展開し始める。この傾向が周辺諸地域といかなる関係にあるのか、次にその概況を紹介する（第1図）。

該当地域は、水脈によって4区域に小分割できる。小支谷が旧常陸川湿地帯に直流する北西部のA区、北東流する解析谷沿岸地区である北東部のB区、大須賀川上流支流群地域の南東部のC区、尾羽根川上流右岸に位置する南西部のD区である。この4区は、それぞれ現在の下総町、神崎町、大栄町、成田市におおむね重複している。

A区の遺跡　旧石器時代では青新岩作遺跡[10]から、立川ローム層の石器包含層が発見された。

縄文時代の遺跡は少数で、臼作山散布地[11]では早・前・後期の土器片が確認されている。前原遺跡[12]は早期包蔵地である。また、中峰東・小峰遺跡[13]は早期から後期及び奈良平安時代の複合遺跡である。これらの遺跡は、いずれも大須賀川寄りに偏在している点に留意すべきである。

弥生時代では中里原の台遺跡[14]から、奈良平安時代集落に混じり、後期の竪穴住居跡が検出されている。

古墳時代に入ると、遺跡数が大幅に増加するが、それはこの地区には、多数の古墳が集中しているためである。神崎町に属する小松古墳[15]からは6個の石枕が出土したと伝えられている。同じく神崎町の向田古墳群[16]は前方後円墳を含む4基から構成される。高の宮作古墳群[17]中には前方後円墳と前方後方墳が含まれている。同じく高台古墳群[18]も前方後円墳を含む7基の古墳群である。さらに、大日山古墳[19]は木炭槨を伴う全長54mの前方後円墳で、小松古墳とともに古色を示してる。名木地区では、名木不光寺遺跡内に未調査の前方後円墳が存在し、媛宮古墳群[20]、前原古墳群[21]などの円墳群が所在する。このほか、青山新田には中原古墳群[22]、成井地区には成井華塚古墳群[23]が点在している。

一方、集落跡は古墳時代後期から始まる遺跡が圧倒的に多い。小野女台遺跡[24]は後期から平安時代にわたっており、中里西口遺跡[25]も後期から奈良時代にかけての集落跡である。

奈良時代になると、名木廃寺[27]が建立され、集落跡としては中里原遺跡[26]が成立する。

中世には名木地区に主要建造物が集中する観がある。名木砦跡[28]は単郭式で、二段曲輪を備えている。現存する常福寺（真言宗）[29]は、江戸時代に再興された寺だが、延応元年(1239)に僧湛尊が開基したと伝えられる。

B区の遺跡　縄文時代では台阿らく遺跡[30]から沈線文・条痕文系の早期土器が出土している。また、植房貝塚[31]は前期の標識遺跡として有名である。古原遺跡[32]には中・後期の貝塚が存在する。

古墳では堀込1号墳[33]や浅間古墳[34]などの前方後円墳が知られている。

中世に入ると数多くの城館が築成され、B区を特徴づけている。植房地区には植房館跡[35]と植房砦跡[36]が

所在する。また、武田地区には武田砦跡[37]と千葉氏館跡[38]とされる遺構がある。武田砦跡は財団法人香取郡市文化財センターによって調査され、複郭式で腰曲輪が巡り、4棟の掘立柱建物跡が検出された。さらに、南方の古山地区には古原砦跡[39]が存在する。寺院では、応安4年(1371)銘の板碑が現存する植房の世尊寺[40]が知られている。当地域は、神崎津へ出る路と香取神宮へ至る路との分岐点に相当し、その重要性のゆえにこれらの軍事施設が集中している観がある。

C区の遺跡　旧石器時代では、久井崎Ⅱ遺跡[41]でスクレイパーが出土している。この遺跡からはこのほかに、縄文時代早・中・後期、古墳～平安時代の遺物・遺構が検出されている。また、大久保遺跡[42]からは、縄文時代早・中期、奈良平安時代の土器に混じり、有舌尖頭器が採集されている。

当地区の特色は縄文時代遺跡の多さにある。上記2遺跡のほかにも、長作遺跡[43]は早・前・中期の包蔵地である。さらに、三ッ塚遺跡[44]は前期の、浅間遺跡[45]、台遺跡[46]は中期のそれぞれ包含地である。

古墳では、6基の円墳からなる地蔵原古墳群[47]は、その一部が早稲田大学によって発掘され、1号墳の粘土郭が明らかにされている。同時期の集落跡としては、地蔵原鳳風遺跡[48]が財団法人香取郡市文化財センターによって調査され、古墳時代後期1軒、平安時代9軒の竪穴住居跡群が検出されている。

中世では単郭式の中野砦跡[49]が知られている。

このほか当地区には、中近世の塚群が所在している。内野塚々群[50]は4基からなり、3号塚上には庚申碑が、4号塚上には二十三夜灯碑が建立されている。また、仙土台塚群[51]は2基が現存している。

以上のA・B・C区の概況によって、各地区の特色が一応把握できる。旧石器時代遺跡はまだ調査例が少なく、その偏在性を指摘するまでにいたらない。しかし、縄文時代遺跡では、内陸に位置するC区が卓越している。弥生時代は全体的に遺跡数が僅少である。古墳時代では、古墳数の圧倒的な多さから、A区が中心的存在となっている。この傾向は奈良・平安時代になっても、多数の集落跡や名木廃寺の存在からみて、依然持続していたであろう。やがて中世、それも南北朝以後は、B区に主要な軍事施設が集中的に築成されるようになる。A区からも、本事業関連調査で多数の中世後期掘立柱建物跡群が検出されたが、同様な密度の調査をB区で実施すれば、この時期のB区の優位性は、さらに不動のものとなるであろう。

こうした中心地域の変遷過程は、生産性と交通の視点から説明することができる。縄文時代の旧常陸川流域は、霞ヶ浦を含む長大な入り江を形成していた。A・B両区は、律令時代に「香取の海」と呼ばれたこの入り江の、沿岸台地に属している。台地下は遠浅の海岸か、汽水性の湿地帯であったはずである。狩猟・採集経済に依存する縄文時代の社会は、このような環境下では発展の余地がない。それに対して、内陸部のC区は、小支谷の水源となる湧泉地帯であり、小動物が豊富で、植生も沿岸台地とは相違を見せていたであろう。縄文時代社会の発展は、こうした環境下でこそ保証されたのである。

香取の海は、縄文時代前期を境に海退化がすすみ、それとともに水域は細くなり、淡水化が進行していく。一方、弥生時代以来の稲作農業は、その後全国的な普及を見せ、古墳時代には当地域においても、本格的な展開を開始する。この時期のA・B両区の汀線付近は、諸河川の堆積作用に伴い葦原が成長して、徐々に淡水化が進行していたはずである。初期の稲作は、こうした葦原を望む台地上の谷津を主要な母胎として定着していった。この時期にB区よりA区の方が優勢な理由は、A区の方が旧長沼と旧常陸川の合流点により接近していたためであろう。古墳時代における当地域に最寄りの政治的・文化的中心地は、印旛国造の所在地とも推定される龍角寺古墳群周辺である。そこから東総の中心地である香取神宮周辺へ至るには、水路をとった場合、旧長沼から旧常陸川に入るルートが考えられるが、その合流点は中継地とし

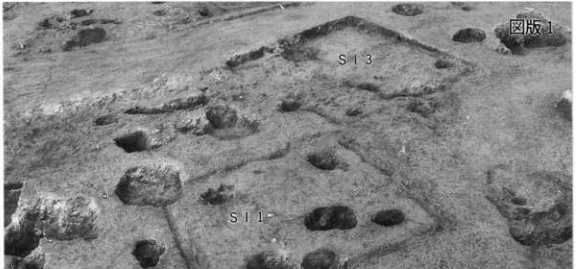
ての重要性を担っていたであろう。事実、下総町西大須賀・滑川は顕著な古墳群の集中地域である。

中世におけるB区の卓越性は、香取の海＝古鬘ヶ浦の経済水域としての重要性の上昇と深く関連している。中世の古鬘ヶ浦は漁業が盛んで、常陸側・下総側それぞれに基地となる湊として、多数の津が整備された。また、それらの津を結ぶ水運も発達して、津の後背地には大小さまざまな村々が形成された。かくして、古鬘ヶ浦は、東関東における水上交通の一大中心地へと変貌するのである。数ある津の中でも、神崎津は下総側にあって、ひときわ北に突きだした岬状の地形に悪まれて、ほかの津にまして有利な渡船場を兼ねていた。当地には小松社（現神崎神社）が鎮座し、神官の神崎氏が周辺社領を領有していた。その後背台地の一角に、B区の城館跡群は所在している。この地域一帯は、西からは大須賀氏が、東からは国分氏が進出しており、この地域に所在する軍事施設はいずれかの一族に帰属すると考えられる。

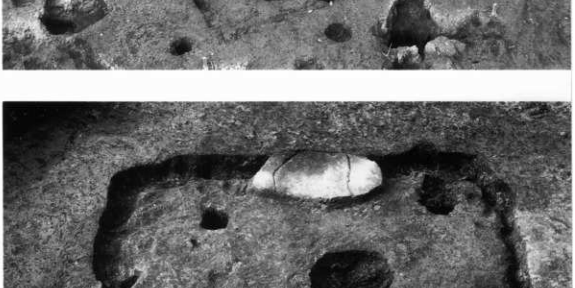
参考文献

10）原田享二 1996 「青新岩作台遺跡」『事業報告Ⅴ』（財）香取郡市文化財センター
14）江尻和正ほか 1989 『文化財調査報告Ⅶ－中里原ノ台遺跡』下総町教育委員会
19）市毛勲ほか 1970 『大日山古墳』千葉県教育委員会
24）石井明憲ほか 1990 『小野女台遺跡』（財）香取郡市文化財センター
25）鳴田浩司 1991 『中里西口遺跡』（財）香取郡市文化財センター
26）荒井世志紀 1995 「中里原遺跡」『事業報告Ⅳ』（財）香取郡市文化財センター
27）沼沢豊 1983 『下総町名木廃寺跡確認調査報告』千葉県教育委員会
28）植竹好明 1990 「名木城址」『下総町史原始古代・中世編史料集』下総町史編纂委員会
30）江尻和正 1993 『台阿らく遺跡－神崎町浄水場建設予定地の調査－』（財）香取郡市文化財センター
31）西村正衛 1957 「千葉県香取郡植房貝塚出土土器」『早稲田大学教育学部学術研究』第6号
37）江尻和正 1993 「武田砦跡」『事業報告Ⅱ』（財）香取郡市文化財センター
47）大川清 1946 「千葉県香取郡昭栄村第1号古墳」『古代』第9号
48）黒澤哲郎 1991 「地蔵原鳳凰遺跡」『事業報告Ⅰ』（財）香取郡市文化財センター

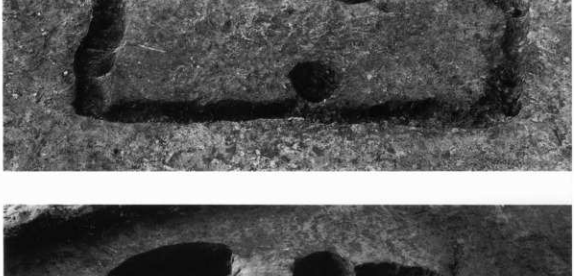
写真図版



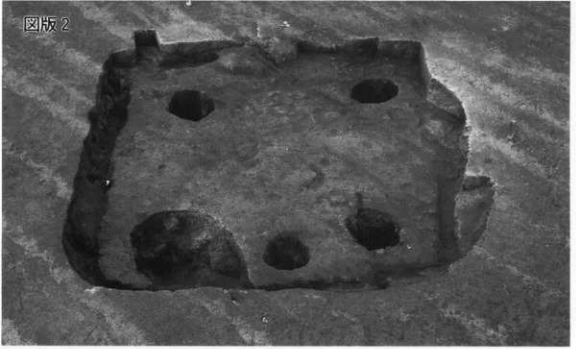
SI1・SI3



SI2

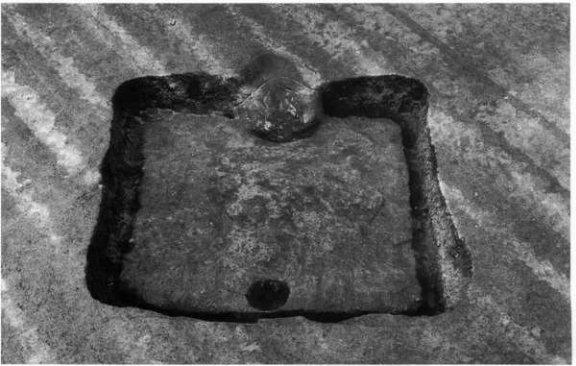


SI4

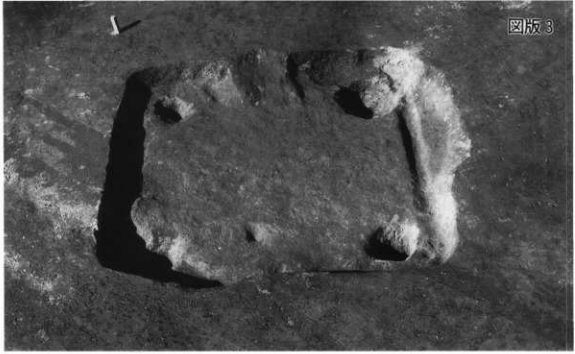


SI 7

SI 8



SI 9



S I 10

S I 11

S I 12・S I 13

図版 4

S I 14

S I 15

S I 16・S I 17

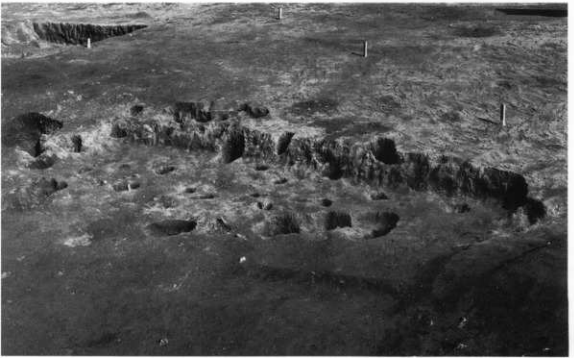
S I 18

S I 19・S I 20

S I 21

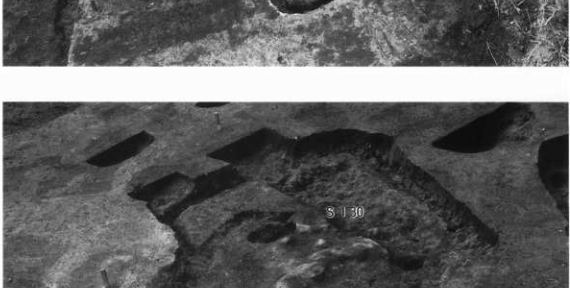
S I 22

S I 23



S I 24

S I 28

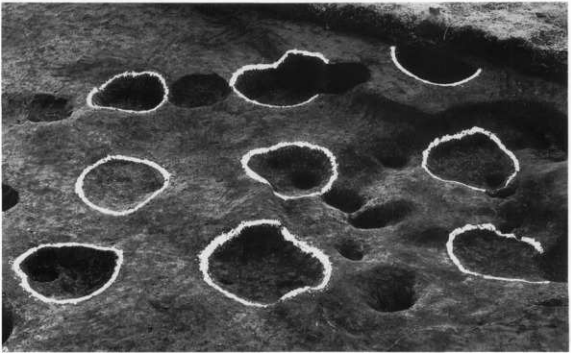


S I 29・S I 30

S I 32・S I 33

S I 34

S B 4～6



S B10

SB11

SD3周辺

SX5

SX6

SY1

SK20

SK2・SK3

SK36・SK37

SK10

SD2

SI2－2

SI8－4

SI14－2

SI2－1

SI9－4

SI14－4

SI5－1

SI14－3

SI9－3

SI7－6

SI14－1

SI9－1

SI8－1

SI14－13

SI16－3

SI8－3

SI14－15

SI16－2

図版12

S I 16－1

S I 16－6

S I 17－1

S I 17－2

S I 17－3

S I 20－13

S I 19－1

S I 20－6

S I 20－3

S I 20－2

S I 20－4

S I 20－12

S I 22－15

S I 22－6

S I 22－11

S I 22－10

S I 22－4

S I 22－5

SI22－3

SI28－1

SI33－5

SI22－7

SI28－4

SI23－1

SI28－3

SI33－3

SI25－6

SI28－2

SI33－2

SI29－2

SI33－1

SI25－3

SI29－1

SI34－1

SI25－1

SI32－1

SK2－1

図版14

SK20－5

SK20－2

SK20－3

SK21－2

SK37－3

SK37－2

SD1－1

SD7－4

SB2～5－1

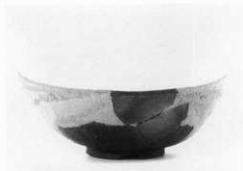
SB2～5－2

SB10－1

SB7－2

SB7－1

B4－52－9


B4－52－3

B4－52－2

B4－52－1

他地点1

B４－44－１

ＳＩ８－２

B４－52－５

ＳＩ19－２

他地点２

グリッド

墨書土器

他地点３

他地点16

ＳＩ22－17

手捏ね土器

図版16

SI4－5

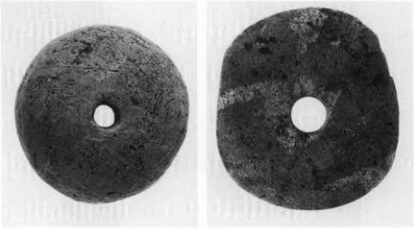
SI23－4

小型台形土器

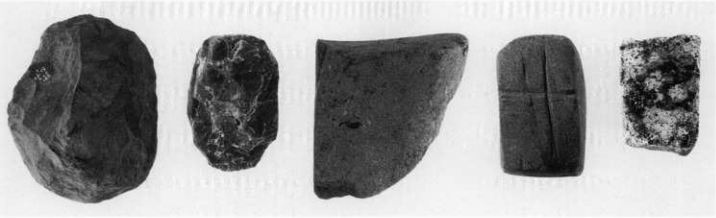
SK32－1

琥珀玉

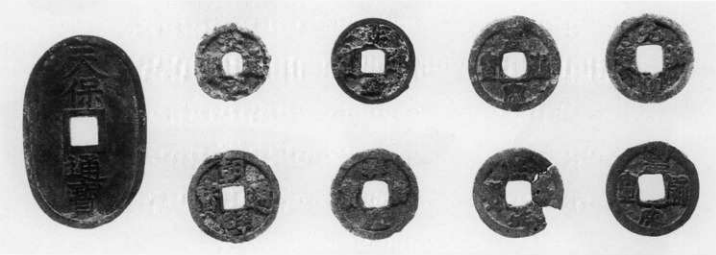
二面風字硯



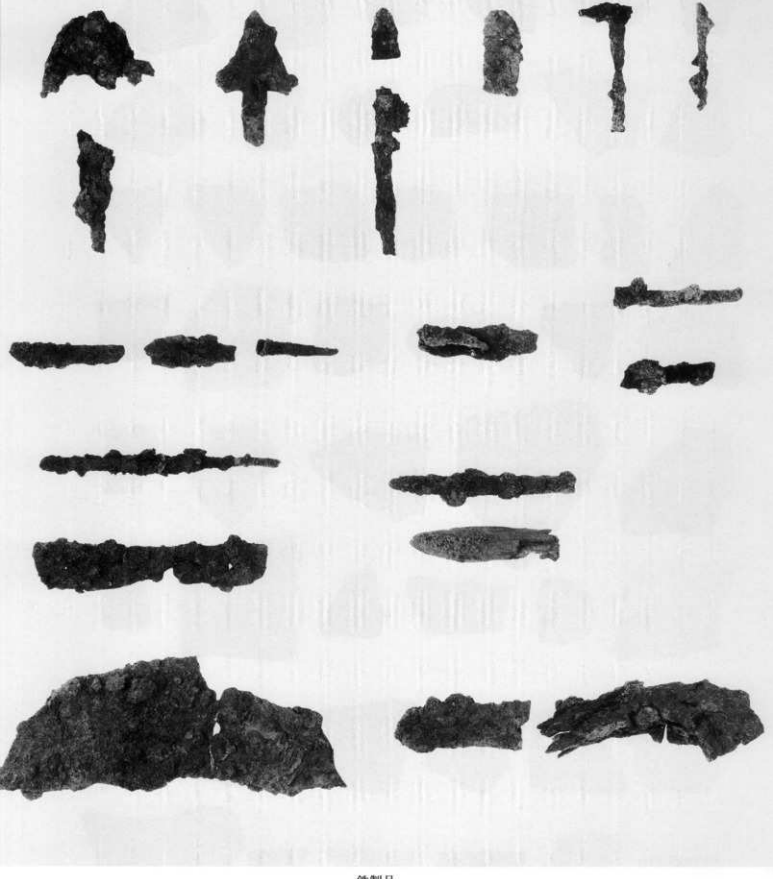
紡錘車



石器類

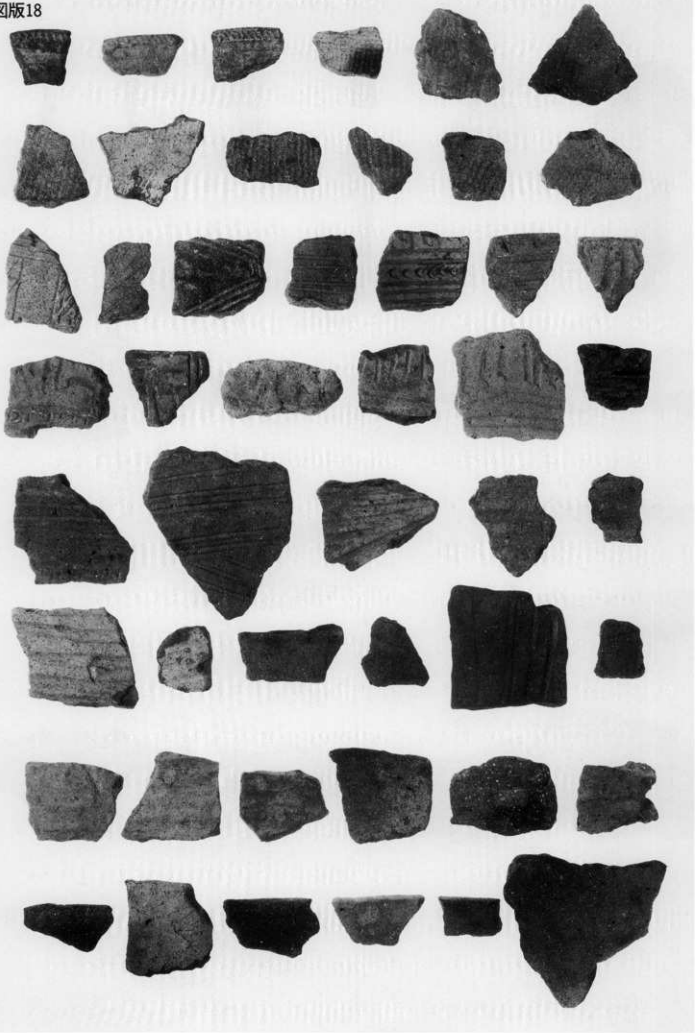


青銅銭



鉄製品

図版18



グリッド出土縄文土器

▲鎌部長峯遺跡調査前風景

縄文土器片出土状況▼

SI1

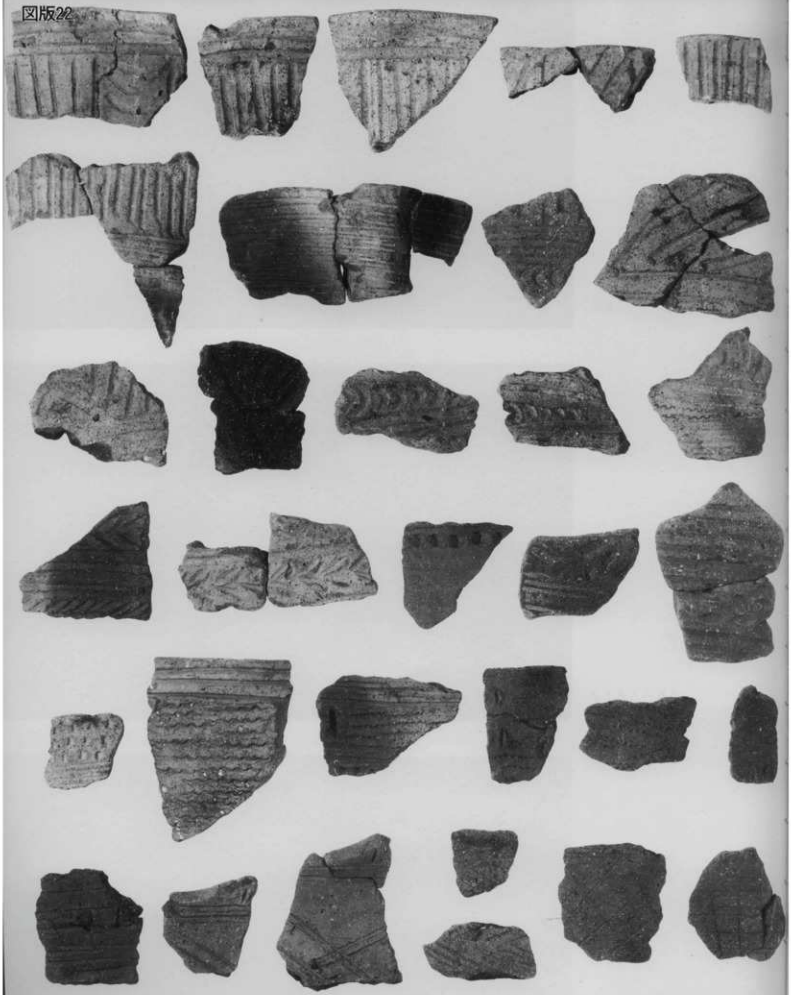
SI2

SK1

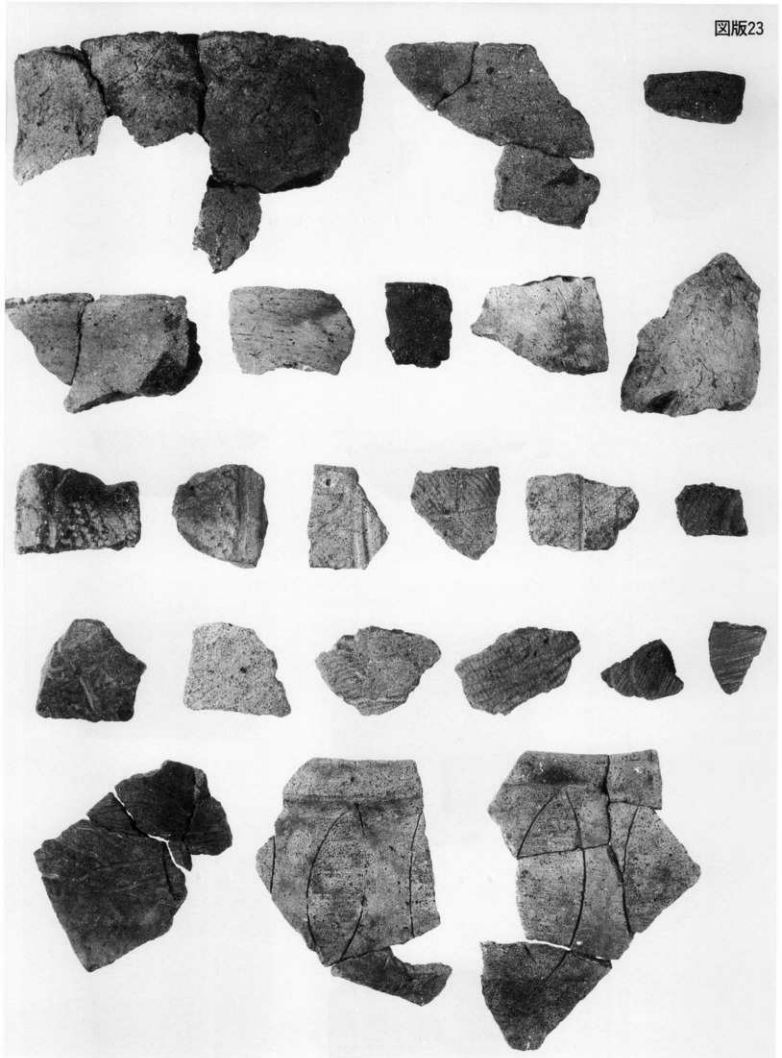
SK2

SK3・4・5

図版22

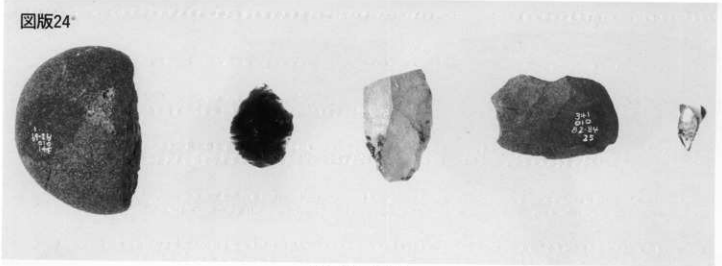


包含層出土縄文土器片(1)



包含層出土縄文土器片(2)

図版24

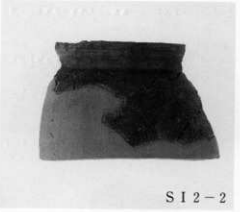


包含層出土石器

SI1－1

SI2－1

SI1－2



SI2－2

SI1－7

SI2－3

報告書抄録

ふりがな	しもふさまちあおやまとみのきいせき・かまべながみねいせき
書名	下総町青山富ノ木遺跡・鎌部長峯遺跡
副書名	主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	Ⅶ
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第370集
編著者名	宮重行・雨宮龍太郎
編集機関	財団法人　千葉県文化財センター
所在地	〒284　千葉県四街道市鹿渡809-2
発行年月日	西暦　1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
青山富ノ木	香取郡下総町青山字富ノ木116ほか	341	009	35° 51′ 36″	140° 23′ 47″	19900903～ 19910327 19910409～ 19910614	5,950	道路建設
鎌部長峯	香取郡下総町名木字長峯591－1ほか	341	010	35° 51′ 49″	140° 23′ 37″	19910701～ 19910925	3,380	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
青山富ノ木	集落	奈良平安時代	竪穴住居　35軒	土師器・須恵器・鉄器・銅銭・陶器	二面風字硯
		中世	掘立柱建物跡　12棟		
			地下式坑　1基		
		中近世	土坑　21基		
			溝　9条		
鎌部長峯	包含層	縄文時代		縄文土器・焼礫・土師器	
	集落	平安時代	竪穴住居　2軒		
			土坑　5基		

千葉県文化財センター調査報告第370集

下総町青山富ノ木遺跡・鎌部長峯遺跡

－主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅶ－

平成11年３月31日発行

編　集　財団法人　千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-2

発　行　千葉県土木部
千葉市中央区市場町1-1

印　刷　財団法人　千葉県文化財センター
株式会社　みつわ
千葉市美浜区新港213－5